明治二十七年六月二十五日第三種郵便物認可

November 20th 1908.

Report of the Sericultural Association of Japan.

No. 199.

大日本蠶絲會報

第百九拾九號目要

▲口繪讀者文藝▼

●フォルマリン液と膿蠶　理學博士　佐々木忠次郎
●煮繭論　助手　紺野新一
●製絲業の經營に就て　京都蠶業講習所技手　服部柳太郎
●貯繭方法と煮繭程度との關係　京都蠶業講習所技手　荒木武雄
●寒地に於ける魯桑栽培の好成蹟　小松嘉藏
●聖德太子の蠶教註釋　小野元兵衛
●採種上の免蚓法　埼玉縣農事試驗場技手　石田孫太郎
●生絲檢査の成蹟と撚絲との關係　水野辰五郎
●一事一言　今西直次郎
●料理のいろ〳〵　農學士　加賀山辰四郎
●韓國群山地方の蠶業　大日本製糸學會長　石井泰次郎
▲本邦蠶界の柱石　佐々木長淳翁▼　小田宗孝

TOKYO.
The Association;
No. 18 Nishikicho Sanchome, Kanda, Japan.

特許

中原式生繭乾燥器　伊國
中原式煮繭器　佛國　特許出願

○本乾燥器は生繭乾燥器中の大王と稱せらる本器は大小數種に分つ即ち小形は一回壹石五斗入より三石入六石入大は拾貳石入、四拾八石入、貳百石入等にして蒸汽と火熱の兩式ありて棚枠と旋風器と相待て回轉す

○本煮繭器は煮繭と繰絲を分業にして生産費を減少し繰絲時間を短縮し絲量を多く出ださしめ且つ燃料を減ずる上に於て世界唯一のものとす

○本器は繭の煮加減均一に宜しき爲繰絲中落繭せざれば絲量多く繰絲神速なる事を保證す

○本器御試驗の爲八拾人繰以上の製絲家に於て據付方御望みの方へ本器壹臺と繭煮方熟練の男工壹名相添三週間御貸與可申上候實地御試用の結果良好にして利益あるものと御認定の節は更に御相談可仕候若し不結果にて御戻し有之候共決して異議無し

○說明書御請求の節は乾燥器又は煮繭器と書分け御通知相成度直に呈送す

東京市本所區藏石南門町三ッ目橋通
特許中原式生繭乾燥器
特許中原式煮繭器　製作販賣所
『電話浅花二貳二六番電報(ナカ)振替貯金口座一六五〇四

蠶絲の事逐年其歩を進め此年其質を改め優に國産の首腦として重きを國家經濟の上に致せりと雖も猶更に進んで改善の策を講じ發展の機運を作り以て在野の遺利を收むべきもの頗る多し是衆目の均しく認むるところにして本會が常に蠶絲業の改善發達を標榜して東西に呼號する所以なり現代の當局竝に各縣の當業者諸君幸にして意を此點に同うし有形無形あらゆる方面に着々其實を擧げ本會の事業をして殆ど全きに爾からしめんとせらる斯業の爲め本會の深く悅ふところなり客月本會靜岡支會其發會式を擧ぐるや新に入會せる者一萬一千有餘名を算し本會豫定の會員數を超過すること將に一千餘名に達せり此の如きは　總裁殿下慈德の然らしむる處なりとはいひ又以て當支會役員諸氏及當業者諸君が斯業に對する忠實熱誠の致す處にして本會の謹て鳴謝するところなり希くは各府縣の當局及當業者諸君亦幸に轍を靜岡縣に履み東西相率ひ南北相呼應して益々斯業の前途に處し皇國唯一の富源をして愈々深く愈々廣く而して尙愈々永からしむることに務められんことを此の如くにして遂に全からば是國家の幸なり豈獨り本會の幸のみといはんや

明治四十一年十一月二十日

大日本蠶絲會

論說

●フォルマリン液と繭蠶　……一—五
理學博士　佐々木忠次郎
助手　紐野新一

●養蠶論　……六—二七
京都蠶業講習所技手　服部柳太郎

拾芳

●製絲業の經營に就て　……二七—三三
京都蠶業講習所技手　荒木武夫

●貯繭方法と養蠶稚屋との關係　……三三—三六
小松嘉藏

●桑地に於ける骨粉栽培の好成績　……三六—三九
小野元兵衛

●梶葉太子の蠶教註釋　……三九—四〇
石田孫太郎

●採種上の発蛾法　……四〇—四一
埼玉縣農事試驗場技手　水野辰五郎

心影

●本邦蠶界の柱石　……四一—四四
佐々木長淳翁

甲門

●生絲檢査の成績と撚絲との關係　……四四—四九
生絲檢査所技師　今西直次郎

●一事一言　……四九—五〇
農學士　加賀山辰四郎

蓮響

韓國群山地方の蠶業　……五〇—五一
通信委員　小田宗孝

家庭

●料理のいろ〳〵　……五一—五三
大日本割烹學會長　石井泰次郎

問答

●桑樹接木に就き質問並答　●桑園の害蟲驅除に就き質問並答　●蜆油并木灰に就き質問並答　●秋蠶種に就き質問並答　●人造蠶種貯藏庫に就き質問並答　……五三—五六

絲況

●横濱市場　●里昂市場　●紐育市場　●上海市場　……五六—六八

時報

●會務錄事＝靜岡支會見學會式并第一區品評會＝越後殿下京都ニ御發車＝御旅館に於ける越後殿下＝靜岡支會大會＝越後殿下の式場御成と光榮ある靜岡支會＝授賞式の會場＝越後殿下御臨會＝今日＝品評會へ御成＝越後殿下の御歸京＝支會職員の選擇＝高知支會の設立＝地方委員諸氏の囑託＝幹事會員の選擇＝宮城支會國蠶種品評會狀況　岐阜支會品評會＝滋賀支會第三回蠶絲品評會＝高知支會の設立　……五八—六八

●蠶糞雜觀＝本年の養蠶＝小學兒童の秋蠶飼育＝實業結人會＝蠶業大辭書の完成

●讀者文藝＝蠶掃相撲

佐々木長淳翁と令息佐々木理學博士の家庭

Monsieur C. Sasaki, son fils et sa famille.

大日本蠶絲會報　第百九拾九號

論叢

フオルマリン液と膿蠶

學務委員
理學博士　佐々木　忠次郎
助手　紺野　新一

膿蠶は蠶兒に桑葉と共に「フオルマリン」を給與するも亦發生するといふ事實は嘗て、林農學士に依て發表せられたり、爾來余輩は如何なる分量の「フオルマリン」を添食せしむれば如何なる結果を呈するかを試みんが爲左の試驗を執行せり。

第一試驗　明治四十年六月十二日午後二時春蠶青熟種第五齡第一日の蠶兒貳拾頭を撮り之れに二プロセントの「フオルマリン」液を桑葉に散布して給與したるに育蠶中に五頭上族後に於て復た五頭の膿蠶を得たり、膿蠶發生の時期を示せば左の如し。

第五齡の初日	六月十二日	膿蠶の發生なし
同　二日	六月十三日	同　右
同　三日	六月十四日	同　右
同　四日	六月十五日	同　右
同　五日	六月十六日	同　右
同　六日	六月十七日	四頭の膿蠶を生ず
同　七日	六月十八日	一頭の膿蠶を生ず
上蔟蠶十五頭中五頭膿蠶となる		
膿蠶合計	十頭	

第二試驗　第一試驗の執行と同日同刻に同蠶二十頭を撮り之に四プロセントの「フオルマリン」液を桑葉に散布して給與したるに育蠶中に十一頭の膿蠶を生じ結繭後に於て復た三頭の膿蠶を出せり膿蠶發生の時期を示せば左の如し。

第五齡の初日	六月十二日	膿蠶の發生なし
同　二日	六月十三日	同　右
同　三日	六月十四日	同　右
同　四日	六月十五日	同　右
同　五日	六月十六日	同　右
同　六日	六月十七日	膿蠶二頭を生ず
同　七日	六月十八日	膿蠶四頭を生ず
同　八日	六月十九日	膿蠶五頭を生ず
上蔟蠶九頭中三頭膿蠶となる		
膿蠶合計	十四頭	

第三試驗　第一試驗執行と同日同刻に同蠶二十頭を撮り、之

に六プロセントの「フォルマリン」液を桑葉に散布して給與したるに、育蠶中に全部膿蠶となりたり、膿蠶發生の時期を示せば左の如し。

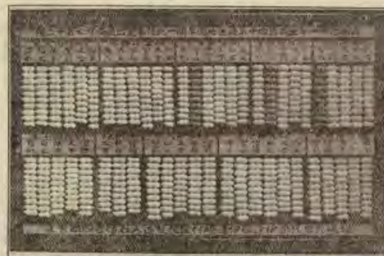
第五齡の初日	六月十二日	膿蠶の發生なし
同　二日	六月十三日	同右
同　三日	六月十四日	同右
同　四日	六月十五日	同右
同　五日	六月十六日	同右
同　六日	六月十七日	同右
同　七日	六月十八日	六頭の膿蠶を生ず
同　八日	六月十九日	七頭の膿蠶を生ず
同　九日	六月二十日	七頭の膿蠶を生ず
	膿蠶合計二十頭	

●第四試驗●　第一試驗の執行と同日同刻に同蠶弐拾頭を撮り之れに八プロセントの「フォルマリン」液を桑葉に散布して給與したるに育蠶中に全部膿蠶となれり、膿蠶發生の時期を示せば左の如し。

第五齡の初日	六月十二日	膿蠶の發生なし
同　二日	六月十三日	同右
同　三日	六月十四日	同右
同　四日	六月十五日	同右
同　五日	六月十六日	同右
同　六日	六月十七日	同右
同　七日	六月十八日	五頭の膿蠶を生ず
同　八日	六月十九日	十頭の膿蠶を生ず
同　九日	六月二十日	五頭の膿蠶を生ず
	膿蠶合計二十頭	

●第五試驗●　第一試驗の執行と同日同刻に同蠶二十頭を撮り之に十プロセントの「フォルマリン」液を桑葉に散布して給與したるに育蠶中に十九頭の膿蠶を生ぜり、膿蠶發生の時期を示せば左の如し。

第五齡の初日	六月十二日	膿蠶の發生なし
同　二日	六月十三日	同右
同　三日	六月十四日	五頭の膿蠶を生ず
同　四日	六月十五日	膿蠶の發生なし
同　五日	六月十六日	五頭の膿蠶を生ず
同　六日	六月十七日	膿蠶の發生なし
同　七日	六月十八日	同右
同　八日	六月十九日	九頭の膿蠶を生ず
同　九日	六月二十日	一頭遺失す
	膿蠶合計	十九頭



福島縣伊達郡伊達崎村石幡吉四郎氏製產出殼繭

●第六試驗●　第一試驗の執行と同日同時刻に同蠶二十頭を撮り、之れに十五プロセントの「フォルマリン」液を桑葉に散布して給與したるに育蠶中全部膿蠶となれり膿蠶發生の時期を示せば左の如し。

第五齡の初日	六月十二日	膿蠶の發生なし
同　二日	六月十三日	同右
同　三日	六月十四日	同右
同　四日	六月十五日	同右
同　五日	六月十六日	二頭の膿蠶を生ず
同　六日	六月十七日	三頭の膿蠶を生ず
同　七日	六月十八日	膿蠶の發生なし
同　八日	六月十九日	膿蠶の發生なし
同　九日	六月二十日	十五頭の膿蠶を生ず
	膿蠶合計	二十頭

●第七試驗●　第一試驗執行と同日同刻に同蠶二十頭を選出し之に普通の桑葉を給與したるに全部健全にて結繭して化蛹したり。

右七試驗に於て發生したる膿蠶の頭數を比較せば左の如し

試驗回數	フォルマリン液の割合	膿蠶發生の頭數
第一試驗	二プロセント	十頭
第二試驗	四プロセント	十四頭
第三試驗	六プロセント	二十頭
第四試驗	八プロセント	二十頭
第五試驗	十プロセント	十九頭
第六試驗	十五プロセント	二十頭
第七試驗	フォルマリン液を撒布せず	皆無

右等の試驗に徵し見時は膿蠶の發生と「フォルマリン」液添食とは大に關係するものたるや明かにして且つ同液の濃厚なるに從て膿蠶を出す事多きを知るに足る、(尤も試驗に供したる蠶兒は何れも健全無病なりと認めたるものなり)惟ふに蠶兒が胃中に「フォルマリン」液を納むる時は體內の組織を變化したる結果即ち中毒の結果として體內に多角體を生じ膿蠶となりたるものに外ならざるものと信ず。

煮繭論

通常會員 京都蠶業講習所技手 服部柳太郎

近來關西地方製絲家の中には山形縣地方に行はるゝ煮繭繰絲分業法に法り繭煮渡法を行ふ者續出せり、この時に當り中原作太郎氏は繭煮渡煮繭器を工夫して專賣特許權を得たり。吾輩思ふに關西地方製絲家にして山形縣の繭煮渡法を摸するもの果して能く其心髓を補捉し得て、其効果を擧げつゝありや疑なき能はざるなり、心茲にあらざれば見れども見へず聽けども聽へず漫然其外形を摸倣すとも該法の骨子を了解するに非ざれば所謂似て非なる者となり、却りて損失を蒙ると其實例に乏しからず、伊勢室山故伊藤小十郎氏は製絲界の泰斗にして斯界の模範たり、氏生前店員を戒めて曰く、予の瞑目せし曉には生繭仕入と乾繭法とにより尠くとも年內收益七八千圓を減ずべしと、伊藤製絲所に於て一ヶ年使用の繭三四千石なりと聞く、伊藤製絲所多年來の信用を以てし、伊藤式乾繭法に據りて同一作業を爲すも猶且つ伊藤小十郎氏の心を傳ふと傳へざるとにより、この小額の繭を以て收益に影響することと實に上述の如し、又伊豫河野製絲所はエキストラ絲を產出することに於て關西を壓せり、然るに河野駒次郎氏は十年來繭乾燥時季には遠く伊藤製絲所より高給の技術者を招聘して一切の操業を一任すといへり、形式より言へば伊藤製絲所の乾燥法は進歩せるものにあらず、其器械は完備せるものにあらず、吾輩をして忌憚なく評ぜしめば幼稚にして、不經濟なるものと稱すべし。然かも智慮に富みたる河野駒次郎氏は外形の末に拘々たらず、伊藤小十郎氏の成功せる所以の心髓を覺得せんと欲し、一向專念伊藤式を學ばんとする其慧眼感ずべく、兩製絲所の今日ある偶然ならざるを知るべし。

これに反して徒らに其形式を學ぶとも其心髓を體讀し能はざれば假令進歩せる形式に於て完備せる機械を用ふとも充分の効果を收め得ざるのみならず、却りて損失を招くことあり新方法を用ひんとする者と新機械を擇ばんとする者と常に茲に留意せざるべからず、凡て新機械則ち專賣特許權を有する機械の價値を批評せんには其機械に於ける特許權の主體は孰れの部分に存在し、其部分は機械全體に對し如何なる働きを爲すやを先づ講究せざるべからず、特許權を得たる部分が機械全體に對し、重要ならざる時は其考案は巧妙なりとも未だ

以て推奨するに足らず、これと同時に其機械の經濟的價値を査察せざるべからず、何となれば考案的價値と經濟的價値とは必ずしも常に一致するものにあらざればなり、庸愚の徒往々にして學問上研究的に興味多き問題にても實用上經濟的價値寡きものは輕蔑の眼を以て之を迎へんとするものあり、或は又研究的價値多き問題にて積々たる世評あるものは直ちに實用的に有力なるものと誤解するものあり斯の如くにして彼是相混同するの結果理論と實際との調和を缺ふものあるに至る

實用的價値ある新法を用ひんとするものは必ず先づ理論的に研究して其心髄を自得せざるべからず、これと均しく新發明新工夫に依れる新機械を用ひんとするものは必ず先づ其實用的價値に就き精しき調査を試みざるべからず之をこれ理論の妙用といふ、蚕繭に對する新法又は新機械を用ひんとするもののために以下蚕繭に關する研究を述ぶべし、應用の自在は讀者の手中に任すべし、宜しく冷暖自知すべきなり。

一　煮繭の種類

第一　現時廣く行はるゝものは瀬戸磁器釜中に繭を投じて浸湯せしめ、蓋することなく原料の良否により三分時乃至十五分時間蚕繭す、而して繰絲工女自ら蚕繭するものなり。

第二　山形縣地方に行はるゝものは蚕繭波法なり釜を蓋して蚕繭中二回冷水を繭面に撒布す蚕繭專門の工男これに從ふ。

第三　繭を湯中に沈めて蚕繭するものあり、金網を用ひて繭を壓せり。

抑も解舒の良否絲量の増減及類節の多少は蚕繭に對する主要なる要求として數ふべきものの故に、この三者の因つ生ずる原因を知らば適ての蚕繭法に對して其の優劣を別ち得べし則ち蚕繭に關する既知の事項を列擧粲類して三種蚕繭法に對する批評を試むべし。

煮繭に關する既知の事項

一、蚕繭時間短きものは蚕繭時間長きものに比し解舒可良なり、例令は良繭は蚕繭時間短く不良繭は蚕繭時間長し。

二、夏期は冬期に比し、蚕繭時間短く解舒可良なり。

三、繭層吸濕せるものは非乾燥せるものに比し、蚕繭時間短く解舒可良なり。

四、一回の蚕繭量蚕釜一面に浮ぶ時は其分量揚くして釜面の半に及ばざるものに比し、蚕繭時間短く解舒可良なり。

五、蚕釜深くして水淺く繭面上に蒸氣の瀰滿するものは解舒可良なり。

六、佛國直繰式の如く釜面より發する蒸氣を旋風機にて室外に排出するものは蚕繭時間長く解舒不良なり。

七、蚕釜を蓋して蚕繭するときは蚕繭時間短く解舒可良なり、蚕繭時間短きが如く蚕繭時間短き方法又は蚕繭時間短き繭は總て解舒可良なり、則ち解舒不良のものは時間を延ばすべき必要ありと云ふべし。實際上同一繭同一方法同一時季に就て言へば蚕繭時間短きより長き方解舒可良なり。

九、蚕繭時間短き時は概ね繭類多し。

一〇、繭層濕潤したるものは類節多し、生繭牛乾燥繭の如き著しき例なり。

一一、蚕繭時間長き時は絲量を減ず。

一二、蚕繭時間短き時は絲量多し、繭層薄き時は絲量を減ず。

一三、短時間蚕繭し繰繭し湯の温度を高むるときは解舒宜しく絲量多し、長時間蚕繭し、繰絲湯の温度を低くするときは類節多く絲量を損するものなり。

一四、以上の事實を參照して推論すれば解舒を害せずして類節を寡くする方法を取れば絲量を減ずるの不利益あり、絲量を減ずることなくして解舒を可良ならしむる方法を用ふれば、類節多きの損害あり約して言へば類節を寡くせんとせば絲量を減し、絲量を損せざらんとすれば類節多く彼是相背馳して果して斯の如く絲量を損失することなくして類節を寡くする方法未だ明かならずとせば上述の三種の蚕繭方法も亦一長一短あり、而して亦絲量を損することなくして類節を寡くする方法の發見は蚕繭に對して緊要なる要求なりといふべし、吾輩の言はんと欲する研究は則ちこれなり。

蚕繭に關する研究

一、蚕繭時間の長短によりて起る繰絲上の結果、二、蚕繭湯温度の高低によりて起る利害、三、繭を蒸蚕するの効果、四、蚕繭中途に於て繭面に冷水を撒布する効果の四項に就き詳細なる繰絲試驗を爲し、次の如き斯驗を得たり。

一、繭を湯中に沈めて蚕繭し中頃冷水に浸漬し再び沈めて蚕繭するときは絲量多くして類節寡し、並に各種繰絲法中優良なるものなり。

二、該方法を用ふるには繭の煮加減を知ること難きにより山形縣蚕繭蚕法は、繭蚕法波法に倣はざるべからず。

三、繭蚕法は所謂沈み繰となり蚕繭は湯中に沈下するを以て作業上繰絲湯低温に陷り易し繰絲湯の低温は既述の如く類節多く絲量寡きの害あるにより該法に關しては此の點につき考慮せざるべからず。

四、繭を沈蚕するには高温を可とす、低温のもの程成績不良なり。

五、蚕繭時間短くして繭面に冷水を撒布するもの、或は蚕繭面に冷水を撒布して其儘繰絲に供するものは成蹟良しからず前説の新研究を以て如何なる工場如何なる人にも必ずしも之を採用すべきことを説めんとするは元より輕率たるを免れず雖も掛くるも蚕繭蚕法波法を用いんとするものゝ爲めに京都蠶業講習所蠶事報告第十二號及第十七號を參照すべし、才能ある實用者によりて吾輩の研究成蹟を以て價値あるものたらしむるを得ば獨り吾輩の幸のみに止らざるなり。

製絲業の經營に就て

特別會員
京都蠶業講習所技手　荒木武雄

現今我國に於ける製絲業の經營は甚だ困難なる狀態に在り即ち製絲の原料たる繭は或る短かき期間に其大部分を買入れざるべからざるのみならず、一時に資金の多大を要し且其時價を定むるには長き間の絲價を推定して標準を立てざるべからざるが如き危險あり、之を以て相當の資金を有するものと雖之れが經營を欲するもの少なく、偶〻自ら利せんとするよりも寧ろ地方蠶業の發展に資せんとする赤心より斯業を起すものと雖も多くは失敗に終りて克く其最初の目的を達したるものの極めて稀なり。

愼んで製絲事業に於ける如上の危險と不便とを除去するにあらずんば蠶業の基礎不定にして斯業の發展意の如くなる能はざるべく、識者は洵に深く此點に就き考慮する處なかるべからざるなり、夫れ然り而して之れが救濟の法たる地方の狀況と四圍の關係とによりて、同一に律すべからざるものありと雖も比較的廣く實行することを得べく、且比較的多くの効果を奏すべしと信ずるものは左の方法なり。

一、養蠶家共同して產業組合法に依り、生產販賣組合を設けて製絲場を設置し各自の收繭を收集して製絲し之を一括して販賣する方法なり、今この方法に依りて經營する事業の得點を列擧すれば左の如し。

一、養蠶家の理想とする所は每年其得たる繭を優良なる生絲に製して時價相當の價格を以て容易に販賣することを得るか又は絲價相當の價格を以て容易に繭を販賣し繭賣に其代金を收得することを得るにあり、然るに前述の方法によれば克くこの理想を實現することを得べし。

一、養蠶家としては賣金を得るに容易にして且比較的多きを要せず、繭は少しく勞力を用ひずして購入することを得、且其價格は絲價の高低により後日に至りて確定することを得るは極めて容易に且安全に經營することを得べし、而して前述の方法に依れば(全くこの理想通りとなるべし)

一、製絲家は往々不良繭を格安に買入るゝことあり、爲めに繭價を高に買入れたる場合に養蠶家として滿足故善上五里霧中に迷はしることあり、然るに前期の方法によれば繭賣を調査して其品位の高低により價格を定むるものなれば毫も斯る憂なきのみならず現つて養蠶家即ち組合員は其刺戟を受けて益〻良繭を產出するに至るべし。

一、工女は多く組合員中より出すものなれば之れを得るに甚だ困難を感ぜず、且工女の實家と製絲場との距離近ければ通勤することをも爲し得べし。

一、資金は元來必要なれども一時借入るゝ場合ありとも信用確實なるを以て農工銀行其他より比較的低利に借入るゝことを得べし。

一、養蠶家の共同して產業組合法に依り製絲業を經營する利益大略右の如く、而して其欠點やゝ極めて少なければ養蠶は速かに同方法の各地に行はれんことを望むや切なりと雖も茲に例外とすべきもの二あり。

一、未だ蠶業幼稚にして一二町村の養蠶家共同するも尙一製絲場を設置する能ざるが如き地方は未だ同法を行ふに適せず

一、基礎強固なる製絲場あり、良習慣により養蠶家との取引圓滑に行はれ相互の間何等不便を感ぜざる地方の如きは强て右の方法たるやを實行し余輩の机上論にあらずして既に之を行ひ着々奏効しつゝある地方あり、今其實況を述ぶれば昨年の如き絲價暴落して大小の製絲家皆多大の打撃を受けざるものとしてこの組合の設置せる製絲場のみ超然として時勢の上に立て少しも痛痒相關せざるものゝ如く、又本年の如き絲價に比して繭價の安き年にありては組合員即ち養蠶家の受くる利益多大なるにより、景況更に可良なるが如く、前述洋々たるものあるなり、乞ふ幸に同法を實行せんとせらるゝ人あらば先づ左に記する京都府竹野郡郷村に於ける同組合の定款を讀み次きに成るべく其地に足を運びて實況を調査せられんことを。

佐賀郡賀茂農業講習所にて於て明治四十年十月一日より長さ二百八十八本の蚕合に繭を生産せるもの

無限責任郷村繭絲生產販賣組合定款

第一章　總則

第一條　本組合ハ組合ノ生產ヲシテ繭賣ヲ目的ト生絲ヲ製造販賣ヲナスヲ目的トス

第二條　本組合ハ無限責任郷村繭絲生產販賣組合ト稱ス

第三條　本組合ノ組織ハ無限責任トス

第四條　本組合ノ區域ハ京都府竹野郡郷村字郷

第五條　本組合ノ事務所ハ京都府竹野郡郷村字郷

第六條　組合員タルモノハ本組合ノ區域內ニ居住シ且獨立ノ生計ヲ營ムモノニ限ル

第七條　組合員ニ對スル組合員ノ權利ハ拂込濟出資額ニ應ズルモノトス

第二章　出資及準備

第八條　出資一口ノ金額ハ拾圓トス

第九條　出資第一回拂込金額ハ一口ニツキ金參圓トス

但新ニ加入セルモノニ付テハ現在組合員ノ拂込濟出資額ト同額トス

第十條　第一回拂込後ハ左ノ出資ノ拂込ヲナスモノトス

第一回拂込後翌々年以內ニ全額ヲ拂込ムモノトス

第十一條　組合員ハ出資ノ拂込ヲ怠リタルトキハ期日後一日ニツキ其拂込ムベキ金額ノ百分ノ二ニ當ル過怠金ヲ徵收ス

第十二條　準備金ノ額ハ出資總額ト同額トシ其額ニ達スル迄每年事業年度ノ剩餘金ノ四分ノ一ヲ積立ツルモノトス
第十三條　加入金過怠金及第四十七條ニヨリテ拂戾ヲナシタル持分ノ殘額ハ之レヲ準備金ニ繰入スルモノトス
第十四條　剩餘金ハ備準金ニ積立ツベキ金額及組合員ニ配當スベキ金額ヲ控除シテ尙殘餘アルトキハ特別配當金及特別積立金トナスモノトス
特別積立金ハ組合ニ必要ナル事業ノ設備費償却及損失塡補ニ充ツルモノトス
第十五條　準備金ハ總會ノ承認ヲ經タル銀行若シクハ一個人ニ預ケ入又ハ之レヲ以テ國債證券ヲ買入ル丶ノ外他ニ之ヲ利用スルコトヲ得ス

第三章　組合ノ機關

第十六條　本組合ニ理事五名監事三名ヲ置ク理事ハ組合長一名ヲ互選ス
第十七條　理事ノ任期ハ三ケ年トシ監事ノ任期ハ一ケ年トス
但滿期再選ハ妨ケス
補欠選擧ニヨリ就任シタル理事又ハ監事ハ前任者ノ殘任期ヲ繼承ス
第十八條　辭任其他事由ニヨリ理事又ハ監事ニ欠員ヲ生ジタル時ハ通常總會ヲ待ツ事能ハザル場合ニ限リ臨時總會ニ於テ補欠選擧ヲナスモノトス
總會ガ理事又ハ監事ノ辭任ヲ議決シタル時ハ同時ニ補欠選擧ヲナス事ヲ要ス
第十九條　總會ハ通常總會及臨時總會ノ二種トス
通常總會ハ每年一回四月之ヲ開ク
臨時總會ハ左ノ場合ニ於テ之ヲ開ク
一、理事ガ必要ト認メタルトキ
二、監事ガ產業組合法第三十四條ニヨリ必要ト認メタルトキ
三、總組合員五分ノ一以上ヨリ會議ノ目的其招集ノ理由ヲ示シテ請求シタルトキ
第二十條　總會ノ招集ハ少クモ五日前ニ會議ノ目的及事項並ニ開會ノ時日場所ヲ示シタル書面ヲ以テ組合員ニ之レヲ通知スル事ヲ要ス
前項ノ通知書ニハ招集者之ニ記名捺印スルコトヲ要ス
第二十一條　總會ハ總組合員ノ半數以上出席スルニアラザレバ開會スル事ヲ得ズ
第二十二條　總會ノ議長ハ組合長之レニ當ル組合長事故アルトキハ理事ノ一人之ニ代ル
但總會ニ於テ必要ト認ムルトキハ出席組合員中ヨリ之レヲ互選スル事ヲ得
第二十三條　總會ノ決議錄ハ理事之ヲ作リ議長及監事之ニ記名捺印スル事ヲ要ス
第二十四條　總會ノ議事ニ關スル細則ハ總會ニ於テ之ヲ定ム
第二十五條　理事及監事ハ名譽職トス
理事及監事ハ正當ノ理由ナクシテ辭任スル事ヲ得ズ
第二十六條　本組合ニ書記一名技術者二名現業者若干名ヲ置キ理事之ヲ任免ス
書記ハ理事及監事ノ命ヲ受ケテ庶務ニ從事ス
技術者及現業者ノ業務規定ハ理事ニ於テ之ヲ定ム
第二十七條　理事ハ總會ノ決議ヲ經テ特別ノ技能アルモノヲ協議員トナス事ヲ得

第四章　事業ノ執行

第二十八條　本組合ノ事業年度ハ每年度六月一日ニ初マリ翌年五月三十一日ニ終ル
第二十九條　本組合ニ於テ生產スベキモノハ組合員ノ收得セル春夏秋蠶繭ヲ生絲ニ製造スルコト
第三十條　組合員ハ理事ノ承認ヲ經ズシテ自己ノ生產シタル蠶繭ヲ他ニ販賣シ若シクハ之レヲ製絲販賣スルコトヲ得ズ
第三十一條　組合員ハ自家ノ蠶繭ヲ左ノ期間內ニ於テ組合ヘ送付スルモノトス
春蠶上簇後春蠶繭ハ八日乃至十二日夏蠶ハ七日乃至十日秋蠶繭ハ五日乃至十日以內
第三十二條　組合員ノ蠶繭查收スベキ期日中ハ組合ニ立會員及審查員ヲ置キ組合員ヨリ送付セル蠶繭ヲ評價查收セシムルモノトス其順序左ノ如シ
但立會員ハ二名審查員ハ三名以上トシ理事會ニ於テ選任スルモノトス
一、組合員ヨリ蠶繭ヲ送付シ來リタル時ハ立會員ハ受付帳簿ニ詳記シ本人ノ面前ニ於テ之ヲ檢量シ受付番號ヲ付シ審查員ニ送付スルモノトス
但便宜上平均ト見ルベキ蠶繭百匁以上ヲ送付スルモ妨ケナシ
二、審查員ハ前項ノ蠶繭ノ送附ヲ受ケタル時ハ審查簿ニ其番號ヲ記載シ審議ノ上評價等級ヲ付シ立會員ヘ送付スルモノトス

三、立會員審查員ヨリ評價等級ノ通知ヲ受ケタルトキハ接續切符ヲ用ヒ出繭人ノ住所氏名繭ノ數量評價等級ヲ記シ捺印シタル查收證ヲ本人ニ交付スルモノトス
但シ審查員ノ付シタル等級ヲ立會員ニ於テ正當ト認メサル場合又ハ本人ノ異議アルトキハ再審查ヲ爲サシムルコトヲ得
四、立會員ハ審查員ノ出繭人ノ何人ナルヲ推知セルノ疑アルトキハ其審查ヲ中止シ其繭ハ立會員ニ返付セシメ後更ニ審查員ニ送付スルモノトス
第三十三條　組合員ハ組合員ノ蠶繭查收後一ケ月以內ニ理事監事協議ヲ以テ評價等級一等蠶繭ノ金額ヲ定ムルモノトシ以下ハ一等ヲ異ニスル每ニ百匁ニツキ金一錢五厘減ノ割合ヲ以テ各組合員ノ蠶繭價格ヲ查定スルモノトス
第三十四條　製產品ハ理事協議ノ上販賣ヲナスモノトス
第三十五條　組合員ヨリ查收シタル蠶繭代價ハ製產品販賣ノ後一ケ月ヲ經ヘサル期間ニ之ヲ支拂フモノトス
但本人ノ求ニヨリ製產品販賣以前ニ支拂フトキハ一ケ月金拾圓ニ付金拾錢ノ割合ヲ以テ之ヲ控除ス
第三十六條　組合ニ餘裕金アルトキハ總會ノ承認ヲ經タル銀行若シクハ一箇人ニ預ケ入ル丶事ヲ要ス
第三十七條　事業執行ニ關スル細則ハ理事之ヲ定ム

第五章　剩餘金處分及損失分配

第三十八條　剩餘金ハ準備金ニ積立ツヘキ金額ヲ控除シタル後ニアラサレハ之ヲ組合員ニ配當スル事ヲ得ス剩餘金ノ配當ハ組合員ノ持分ニ應スルモノトス其率ハ年六分以內トス特別配當金ハ事業年度內ニ於テ組合員カ組合ニ賣渡シタル蠶代價ノ高ニ應シテ之ヲ配當ス
但其金額ハ第十四條ノ殘餘金ノ十分ノ一トス
第三十九條　損失ノ塡補ハ先ツ特別積立金ヲ以テシ次ニ準備金ヲ以テス
第四十條　組合財產カ組合ノ債務ヲ完濟スルニ足ラサル時ハ出資額ニ應シ損失ヲ分擔スルモノトス
脫退シタル組合員ノ損失分擔ノ割合亦同シ

第六章　加入及脫退

第四十一條　新ニ組合員タラントスルモノハ每年六月乃至八月中ニ加入申込書ヲ理事ニ差出スコトヲ要ス
第四十二條　新ニ加入シタル組合員ハ加入金ヲ差出ス事ヲ要ス加入金ノ額ハ前事業年度末ニ於ケル各組合ノ出資ニ對スル持分額ヨリ其拂込出資額ヲ控除シタル額ニヨリ出資一口每ニ之ヲ定ム
但拂込濟出資額ハ特別配當金ヲ以テ拂込ニ充テタル出資額ヲ算入セス
第四十三條　理事加入申込書ヲ受ケタル時ハ書面ヲ以テ總組合員ノ同意ヲ求ムル事ヲ要ス
總組合員ノ同意アリタルトキハ理事ハ其旨加入者ニ通知シ出資及加入金ノ拂込ヲナサシメタル後組合員名簿ニ記載ヲ爲ス事ヲ要ス
理事ハ豫メ定メタル利息ノ支拂ヲ約セシメテ二ケ年以內前項ノ拂込ノ延期ヲ許諾スルコトヲ得
但出資金額拾圓加入金額五圓ニ滿タサルトキハ此ノ限リニアラス
第四十四條　組合員ハ其持分ヲ讓渡サントスルモノアル場合ニハ理事ハ讓　人カ組合員ナルトキハ總會ノ決議ヲ經テ之ヲ承認シ讓受人カ組合員ニアラサル者ナルトキハ書面ヲ以テ總組合員ノ同意ヲ求メ其ノ同意アリタル後直ニ其旨讓渡人及讓受人ニ通知シ且組合員名簿ニ記載ヲナスコトヲ要ス
第四十五條　組合員脫退セントスルトキハ少クトモ其事業年度末十ケ月前ニ其旨理事ニ豫告スル事ヲ要ス
第四十六條　死亡ニヨリテ脫退シタル組合員ノ相續人カ直ニ加入ノ手續ヲナシタルトキハ組合ハ被相續人ニ對スル持分ノ拂戾計算ヲナサスシテ之ヲ被相續人ト同一ノ權利ヲ有シ義務ヲ負フモノト看做ス此場合ニ於テ加入金ヲ差出ス事ヲ要セス
第四十七條　組合員左ノ事由ノ一ニ當ルトキハ總會ノ決議ニヨリ之ヲ除ス
一、出資金加入金ノ拂込ヲ怠リ期間後一ケ月以內ニ其義務ヲ履行セサルトキ
二、自己ノ生產シタルモノニ非サル繭ヲ自己ノ生產シタルモノ丶如ク詐言シ組合ヘ提出シタルトキ
三、第三十條ノ規定ニ違反シタルトキ
四、組合ノ事業ヲ妨ゲル所爲アリタルトキ
五、犯罪其他ノ所爲ニヨリ信用ヲ失セルトキ

第四十八條　組合員脫退ノ場合ニ於ケル持分ノ拂戻ハ其拂込ノ出資額ニ止ムルモノトス

但死亡禁治產其他總會ニ於テ止ムコトヲ得サルモノト認メラレタル事由ニヨリ脫退シタル組合員ニハ持分ノ全部ヲ拂戻スモノトス

第七章　組合ノ解散

第四十九條　本組合ノ解散シタルトキハ理事其精算人トナル

貯繭方法と煮繭程度との關係

通常會員　小松嘉藏

予は頃日貯繭方法の異なるに依りて、煮繭程度に如何なる關係を有するかを實驗せり、而して其成績に依る時は、貯繭方法の如何に依りて甚しく煮繭程度の相異あるを認め、且將來大に研究す可きものあるを信ず、仍而茲に其成績の概略を掲け參考と爲さんとす。

一　貯繭の方法

貯繭の方法を分ちて左の三區とす、

罐詰貯繭　圓筒形鐵葉罐
防水紙貯繭　東京本所產繭袋
強製紙貯繭　仙臺產繭袋

是れに貯藏せる原繭は同一種なるものにして且同一程度に乾燥せるものを各器に分配收容し、更に乾繭は蒸殺と燥殺の二區に分ち、之れを貯繭す而して之を貯藏せるは昨年六月にして是を繰絲せるは本年二月なり。

二　煮繭程度

或る一定の繭に對する均等なる熟煮程度を確定する事は最も至難の業にして從來煮繭の程度は當事者の經驗と老練とにより肉眼的鑑定をなし是れを定むるにありき。然れども是れ其結果を具體的に立證する上に於て何等の根據なく、且如何に經驗と老練を以てすと雖も、假りに同一の原繭を以て甲乙兩區を比較する場合に於て果して同一程度に鑑定し得るや否やは甚だ疑問とする處なり、若し些少なりとも差異あらば之れが繰絲時間及絲量絲質に關係を及すと大にして、爲めに兩者の關係を明確に知ると能はざるに至る可し、然らば是を單に溫度と時間とのみにして機械的に鑑定す可きか、是亦完全を期する能はざる可し、即ち煮繭器構造の關係及蒸汽壓力の變動其他降雨等により、自然に起る水質の變化大氣壓の關係等に依りて、如斯規矩的に當嵌むる事も亦兩者の熟煮程度を均等ならしむること能はざる可し。

是に於て予は是等の關係を綜合し、且斟酌して左の方法に依り是れを定む。

此實驗に於て各區均等なる熟煮程度を得るには、第一各區一定の溫度を以てし、時間により之れを測定すること勿論なりと雖も、之れ鑑定上老練なる技能を要したる其方法は先づ煮繭湯を沸騰後靜止せしめ煮繭器の一定の個處に檢湯計を挿入し、（此理由は煮繭器の各部各々溫度を異にすることあればなり）既定溫度に至りて一定量の繭を投し、終始溫度を一定度に保ち、肉眼鑑定に依り其適度を見計ひ、是れを取揚け繰絲湯に移す、繰絲湯は常に既定溫度を保たしめ繰絲す、而して其繰絲間に落緒せる繭數を繰了毎に調査するものとす、蓋し落緒繭數の多少は煮繭の適確を知る好材料なればなり。

如斯方法に依り煮繭時間を前後に更へ數回反覆實驗し、落緒繭數の多少及絲量其他前後の狀況に依りて其適度を確定せり。但し落緒繭數の標準は第一回落緒繭數を以て是を定め、第二回以下の落緒繭數多少は索緒の際の箒の扱方及手加減等に依て支配せらるゝ事多く、單に煮繭程度の關係にのみ歸する事能はざればなり。

此實驗に於ける煮繭溫度及繰絲湯の溫度は左の如し。

煮繭溫度　二百〇九度
繰絲溫度　百六十度

三　煮繭時間と落緒繭數

第一　燥殺區

罐詰貯繭

煮繭時間	原繭粒數	落緒繭數 第一回	第二回	第三回	第四回	第五回	繰絲時間	絲量
三'〇〇	三〇〇	二〇三	一四六	一一三	七五	—	一'〇三	一〇'〇〇
三'三〇	三〇〇	一六六	一一三	七一	—	—	一'〇一	一〇'三〇
四'〇〇	三〇〇	一三六	一三〇	八八	—	—	一'〇五	一〇'四〇
四'三〇	三〇〇	一四六	九六	八八	—	—	一'一〇	一〇'〇〇

防水紙貯繭

煮繭時間	原繭粒數	落緒繭數 第一回	第二回	第三回	第四回	第五回	繰絲時間	生絲重量
三'〇〇	三〇〇	二〇一	一四二	一〇四	八〇	—	一'一六	八'八〇
四'〇〇	三〇〇	一四七	一四六	九一	五六	—	一'一六	一〇'二〇
五'〇〇	三〇〇	一六八	一三五	八八	—	—	一'〇八	九'五五

強製紙貯繭

煮繭時間	原繭粒數	落緒繭數 第一回	第二回	第三回	第四回	第五回	繰絲時間	絲量
四'〇〇	三〇〇	二〇九	一五五	一〇〇	八五	—	一'一〇	八'一〇
四'三〇	三〇〇	一五五	一六八	一三五	八〇	—	一'一八	八'四〇
五'〇〇	三〇〇	一四〇	一三三	一三五	八〇	—	一'〇八	八'三〇

但し強製紙貯繭は蟲害の爲繰絲時間及絲量共に少し

第二　蒸殺區

罐詰貯繭

煮繭時間	原繭粒數	落緒繭數 第一回	第二回	第三回	第四回	第五回	繰絲時間	絲量
三'〇〇	三〇〇	二二五	一四七	一三七	一〇〇	七〇	一'一八	一〇'一五
四'〇〇	三〇〇	二一〇	一五六	一一九	九九	六五	一'二五	一〇'〇〇
五'〇〇	三〇〇	二〇〇	一三五	一三一	八五	六五	一'一七	一〇'三〇
六'〇〇	三〇〇	一九九	一二〇	一一三	八九	六〇	一'一八	九'八五

防水紙貯繭

煮繭時間	原繭粒數	落緒繭數 第一回	第二回	第三回	第四回	第五回	繰絲時間	絲量
五'〇〇	三〇〇	二三六	一五六	一二五	八五	—	一'二〇	一〇'〇〇
八'〇〇	三〇〇	二〇五	一四四	一〇六	七五	—	一'一六	一〇'〇〇
九'〇〇	三〇〇	一六八	一四一	一〇八	六五	—	一'一四	一〇'四〇
一〇'〇〇	三〇〇	一九九	一〇八	九五	五六	—	一'一五	一〇'〇〇

強製紙貯繭

煮繭時間	原繭粒數	落緒繭數 第一回	第二回	第三回	第四回	第五回	繰絲時間	絲量
六'〇〇	五〇〇	一九九	一四一	一〇九	六三	—	一'一五	一〇'〇〇
六'三〇	五〇〇	二〇一	一六〇	一四一	五六	—	一'三〇	一〇'三〇
一〇'〇〇	五〇〇	一六八	一四二	一〇一	七四	—	一'一七	一〇'〇五

右成績と而して繰絲中に於ける難易其他狀況とにより煮繭程度を確定すること左の如し。

貯繭方法と煮繭程度

種別	煮繭時間	原繭粒數	落緒繭數 第一回	第二回	第三回	第四回	第五回	繰絲時間	絲量
燥殺罐詰	二'三〇	五〇〇	一九六	一二三	六二	—	—	一'二一	一〇'三〇
燥殺防水紙	四'〇〇	五〇〇	一九七	一五八	九一	五九	—	一'一五	一〇'五〇
燥殺强製紙	四'三〇	五一〇	一九五	一六六	一三五	八〇	六六	一'一八	九'三〇
蒸殺罐詰	五'〇〇	五〇〇	二〇〇	一六四	一四三	八五	五五	一'一七	一〇'一〇
蒸殺防水紙	六'〇〇	五〇〇	一六八	一四二	一〇九	七五	—	一'二四	一〇'三〇
蒸殺强製紙	八'三〇	五〇〇	二〇一	一六〇	一四一	五六	—	一'三〇	一〇'三〇

以上の成績に依るに同一種の繭は貯繭の方法を異にするに依り、煮繭程度に各々大差あるを見る可し、且又茲に大に注目す可きは各區の差が自ら或る比例をなし、而して燥殺と蒸殺とは亦其揆を一にせること是なり、今其比を具體的に示すときは左の如し。

	罐詰	防水紙	强製紙
燥殺區	煮繭時間 2.30 分	煮繭時間 4.00 分	煮繭時間 4.30 分
蒸殺區	5.00 分	3.30 分	10.00 分
等級	3	8	9

抑も同一の繭を同一程度に乾燥し貯繭を異にせるのみにより、煮熟程度に差を生ずること如斯し、其原因如何?。余の感したる處左の如し。

一、罐詰貯繭は空氣の流通を欠く故(絶對的にあらざるも)外氣の接觸なきこと。

二、防水紙貯繭は罐詰に比し外空氣の流通あるが故に比較的に外氣に接觸すること。

三、强製紙は三器中最も多く外氣流通し且接觸す。

以上を綜合して考ふるときは貯繭中空氣の流通の良否即ち繭が外氣に接觸する程度に比例して煮熟の程度も亦異るものゝ如し、即ち罐詰は乾燥當時の狀態にあり、次に防水紙は比較的少しの變化を受け、强製紙は最も多くの變化を受く故に此の如き結果を生ずるに至るならんか、果して然らば繭は是を永く貯ふるときは外氣の接觸に由りて如何なる變化を來すものなるや、余は是れに就き少しく調査する處ありしも、未だ完全なる證明を得ず、故に更に後日を期し詳論せんと欲す。

寒地に於ける魯桑栽培の好成績

（長野縣上高井郡に於る實例）

特別會員　小野元兵衛

魯桑が暖國に適當すると云ふことは誰でも疑を挿まざる所であるが、寒國の栽培に適當するや否やと云ふに至つては疑を存するものが多い樣である、然るに茲に魯桑が寒地にも恰適すると云ふ實例を得たのである。長野縣と云へば本邦では寒地の方であるが、長野縣中でも寒氣の強い上高井郡小布施村と云ふ、長野市を去る四里の地點で、例年十二月中下旬には一尺五寸乃至三尺の雪が積つて翌年三月下旬でなければ融解し了らず、室外寒暖計が華氏二十度以下に降下すると云ふ寒地に於て實驗した例であるから、之を紹介して未た疑ひを懷かるゝ諸氏の參考に供さうと思ふのである。

去る明治三十九年の春本村の養蠶家中でも殊に熱心な市川三郎氏を初め小山源次郎、平松九内の三氏から書面で魯桑苗を注文され、同時に精密な栽培上の質問があつたから、早速苗木と共に諸種の注意を認めて送つたことがある。是れが抑も本郡否北信地方へ魯桑の輸入された初めであつて、同氏等は余が發表した魯桑栽培意見を本誌上で見るや、直ちに談合の上書を飛して注文したとのことである。此歳植付けた桑園は試驗の爲とて各自一反歩を限り、其秋になつて恰も甲府市に開設の聯合共進會觀覽を兼ねて來峽し、親しく我家を訪問され魯桑園の實況を見て大に研究する所もあり、且つ大に決心する所あつたと見へ、歸來匆々協議を凝して魯桑栽培を爲して地方に桑園改良の範を示すと共に、盛に魯桑苗を作つて良種の繁殖を圖らふと云ふので、三全社と云ふ組合を設け三人が協同一致して目的を貫徹せうと云ふことになり、四十年には三人で一町歩の魯桑園を仕立ると同時に、一方には余が許から一人の接木の熟練家を招いて約三萬木の苗木を作り、本春は更に二反歩の桑園と苗木六萬本とを仕立つたので即ち最初より一町五反歩の魯桑園と十萬本に近い苗木を養成した譯であるから、此地方に於て栽培せらるゝ、又栽培されんとする魯桑も中々侮るべからざるものである。

先頃余が長野市の聯合共進會へ參觀するや、三全社の諸氏は強て余に來遊を求められ、余も機を得て其成績を見たく望んで居つたので、之を幸として十月十日に往て見た。所が其成績は非常に良好であつて、余が自慢の積りであつた桑園も三舍を避けねばならぬと云ふ狀態であつた。余は當初より魯桑が寒地にも適するとは信じて居つたが、實の處これ程には往くまいと心竊かに思つて居つた、然るに案外の好果であるから茲に紹介せうと云ふことになつたのである。

試みに市川氏の栽培方法と收穫とを記せば、畦間六尺株間四尺一反歩四百五十株の植付で、初年には一切摘葉せず若干の間作をなすに止めたか、條數二本から三本で其伸長は平均五尺に達し。二年目の春發芽前に伐採して新芽の發育を促がした處、條數五六本乃至十四五本で平均六尺以上に伸長し、初秋と晩秋兩期に摘採した其葉量が二百貫匁あり。三年目たる本年は同じく春伐後の條數十四五本乃至二十一二本で六尺から九尺以上にも伸長し、秋期二回の葉量は四百三十貫あつたとの事、現に枝條繁茂の狀態は六尺の畦間尚ほ狹きを感ずる位であるから、四年目たる來年に於ては五百貫以上の收穫があり、五年目以後には六百貫以上の收葉あるべしとは、獨り余のみの觀察ではない。

此の桑園を作るに市川氏は何程の肥料を施したかと云ふに植付初年に於ては堆肥と大豆粕とで僅に五圓、二年目には堆肥二百五十貫大豆粕二十貫此代金拾圓、三年目には堆肥五百

貫大豆粕四十貫で此代金凡二十圓と云ふのである。

木村の土地は砂礫壌土であつて、地味は肥沃の方である。小作料は一反歩十二圓から十四五圓と云ふのである。

茂して居る、而して其収穫は前の魯桑園と同程度の起塔で、春秋兼用は通三百貫以内秋百二十貫が最上等、秋専用では普通三百貫内外で四百貫の者は殆どない と云ふことで、株數は通常千株以上である。茲で一寸断つて置くのは寒地にして春蠶の掃立が五月四五日以後になる地方では、魯桑は必ら ず秋蠶専用に仕立てると云ふとある。七月中に掃立る蠶兒を夏蠶と云ふ地方もあるが、是れから云へば寒地では夏蠶の相違いのと、秋蠶とを飼ふ様にすれば良い。

寒地に於る栽培上の注意

魯桑が其厚葉にして乾枯の遲緩なる點と大葉にして摘葉に多大の勞力を省のと、硬化比較的遲くし且つ鐵の附着すること極めて少なき點に於て、夏秋蠶の飼育に特に適することは普人の知る所であるから、寒地に於ては即ち春期發芽前に、剪枝修を余が方式に依つて刈取り、之から伸びた新芽の五六寸に生長した時、余が分蚊法に依つて芽先を摘取り分蚊せしむると、蟻蚊が揃して吹葉が多くなる計りでなく、著しく硬化すべき下葉を減じ、樹勢を均一にし且つ風害を免る、等の利益がある。若し之を分蚊せしめず放任すると、條の發育極めて不平均となり、收葉は減じ且下葉の硬化するものが多くなるから専用桑園では此分蚊に注意せなければならぬ。

分蚊に就て屢々余に向つて、君の云ふ通り、芽先を摘んだが、片枝だけ元氣能く伸びて片枝は伸長せない と苦情を云つて來るものがある。併し是れは摘み方が少ない爲であるから、今少し多く間きつた葉の直ぐ上の葉を殘ける位に(異葉から三葉位だけ)摘取さへすれば、必ら分蚊して雙方とも同勢力の條が發生するものである。

余は決して自分の仕立法を誇る積ではないが、面白い實際の對照であるから序に述べて見よう。市川氏の昨年植付けた桑園の隣地に、普通魯桑を從來の仕立方に依つて仕立つて置くものがある。これは云迄もなく根刈である。付後三年目であるが、一株の條數は二本乃至八本頗る不齊一で、加之枯損した株の多さと甚く計りである。肥料は非常に多いから條の伸長は一丈以上に達して居るが、其收葉は確に市川氏の二年目桑園に劣つて居ると思はれた。此他にも普通の仕立て枯損が多くて困ると云ふ話を耳にしたが、是は決して寒氣の爲や害の爲ではなく、仕立方の不適當な爲に枯損したのであり、且又魯桑同樣に耕耘を回行つた爲に其根を損して樹勢を衰弱せしめたと云ふのも多いやうである。

最後に専用桑園の施肥に就て一言せん、總じて桑樹の施肥は桑葉摘採の一ヶ月以前に於てせざれば、飼育上面白からざるものであるため、春蠶の桑葉には春期多量に肥料を施すを好まぬが、専用桑は七月以後に使用するもの故此點からは氣長く施して差支ない。地方に依ると専用桑でも肥料は寒肥に施さねばならぬ如く考へて居る樣だが、是等は大なる誤謬であつて、徒らに肥料を損することにもなるから、春期になつて施したら却つて利益ではあるまいか。尚ほ肥料としては早春漸効肥料たる堆肥類を施こし、五六月の頃速効肥料を適宜施したら良くはないかと考へる。それから緑肥の効能は必ら ず忘れてはならない。

寒地は秋蠶を盛にすべし

寒地の春蠶が掃立の遲るゝ原因は、氣候の寒冷なるにも依るが、主として桑葉なきことである。而して春蠶掃立の遲延は上條時期に於て、大抵普通農事と衝突し、往々二兎を逐ふの憾を免れない。之れを避るの策は秋蠶を盛に飼育して春蠶の飼育を減ずるより外はない、夏秋蠶を飼育するに魯桑の右に出づべき良桑なきは、余が實驗上に於て將又た各地當業者諸君の實驗に依つて疑ふべからざる所であるとすれば、未だ經驗なき諸君は兎も角も一畝又は二畝の小區域に魯桑園を仕立てゝ、果して是れが土地に適當するや否を試驗すると同時に、深く其仕立法を研究されることをお勧めする。物は見た丈、聞た丈では到底眞の味は解らない。「論より證據」食つて其味を解するのが尤も捷徑であらふと思ふ。

聖德太子の蠶教註釋 三

通常會員　石田孫太郎

平和なるやう陽氣を廻らし

寒暑乾濕の過ぎたるは平和ではない、暴風も暴雨も大なる障害である、聖德太子は是等のものを我身に做ふて取扱へと仰せられたが、太子の御心は斯樣な惡天候で寒た時に限り、身を挺して働けと仰せられるのではない、平常から其心掛をして居て、寒暑乾濕はものかは、如何なる暴風が來やうとも泰然として居るやうにせよと仰せられるのである、則ち平和なる樣に陽氣を廻らして、蠶一生中少しでも苦痛を與へるなとの御意である、又斯くせざれば養蠶の豐作は望まれるものではない、而して此平和なる樣陽氣を廻らすと云ふことは、甚だ多方面に關係するのであるが、我輩茲には主として蠶室の取扱のことを陳べたいと思ふ。

一　春の稚蠶時代

春蠶の雛ない時に恐る可きは主として寒冷である、又寒冷と共に乾燥も來ることがある、左れば養蠶家たる者は豫め之に備へ、斯る天候に襲はるゝとも其害を受けぬやうに、前以て蠶室を取扱ふて置かねばならぬ、則ち雛蠶の時には先づ寒冷を防がんが爲めに、室の周圍や床板の隙間等には悉く目張りをなし、且つ成る可く東南に面したる温暖な室を撰ぶが良い、世間には此蠶室のことを構はず、寒冷の襲ひ來るに任せて飼育する者あり、又自己の主張より結果は同じことて、寒冷の防禦困難にしてあれど、何れも其結果に陷ゐるのである。

結局は桑不足と云ふ結果に陷ゐるのである。

自己の主張の爲に桑不足でも蟻が減じても構はぬ人達、否聖德太子の御言を本ぜざる人達は、寒冷の防禦でもあるまいが、寒冷が來れりと云て心配する人達は、ヤレ火を焚くの、ソレ炭を入れよ、ソレ〳〵戶締を十分にせよ抔と騒ぐ樣であるが、之は常は小供のことを構はずに置いて、病氣になると督者よ藥よと騒ぎ立つるのと同一で、之れ程愚かなことはない故に雛蠶の時には寒冷が來るものとして、其蠶室取扱法を十分に且親切にして置かねばならぬ。

二　春蠶の壯蠶時代

壯蠶となれば変ふ可きは寒冷ではない、第一は湿熱である第二は空氣の不流通である、此外尚多しと雖も、湿熱と空氣の不流通程恐ろしいものはない、故に壯蠶時代の蠶室取扱法としては、室内の各所に施したる目張を切ることである、室内を廣々とすることである、之等は三眠時代のことて、四眠以後になれば、譯ても空氣の流通を良くし、晴天軟風の日には戶障子を開放して、新鮮の空氣が十分入る樣にするが良い、斯くするのは、壯蠶室を平常平和なる空氣が十分入る樣にするが良い、斯くするのは、壯蠶室を平常平和なる空氣を廻らすものて、雪に蠶が健全に育つのみならず、人間が働いて居ても心地の良いものである、而して一朝湿熱等の來れる場合には、手を盡して之を防禦するやうにすべきて、斯る惡天候が來たからとて大騒ぎをやるやうては、迚も春蠶の豐作は望まれない然らと云て大子の御言に違ふ處の最惡なる養蠶家の處置と言はねばならぬ。

三　夏秋蠶と蠶室取扱法

信州の如き乾燥國は別として、各地一般夏蠶の飼育は梅雨中であるから（時によると冷湿に襲はれることがあると、故に夏蠶を飼育するには、其蠶室の取扱に就ても、之等の惡天候が雛蠶の時から來るものと覺悟しなければならぬ、併し雛蠶の時は、箔數も少ないことてあるから、何を爲すにも大なる故障はないが、其故に蠶室の取扱を非合理的なことをしてはならぬ、即ち夏蠶を飼育するには先づ以て春蠶五齡の飼育を爲す積りで居るが良い、室内は開放すれども、晴天軟風の日に限りて行ひ、冷氣な日に雨も上る頃となるから、早秋蠶飼育の心得を以て、譯て空氣の流通を計り、少しでも滯りすゐやうなことがあつてはならぬ秋蠶となれば氣候漸く暑く炎熱亦た厳しくなるのて、あるから雛蠶の時より夏蠶の五齡飼育の積りて居るが良い、即ち蠶室は、空氣の流通を良くし、且つ蠶室の周圍や床板の隙間等に施したる目張を切ることである、室内は廣々とすることである、之等は三眠時代のことて、四眠時代のことは、丹精を盡らす處の人々も、上簇となれば温湿度のことも空氣の流通のことも構はぬ傾向のあるのは、實に遺憾であるから、我輩は蠶の室中にある期間を假りに第六齡と云ひたい然り第六齡飼育の積りてなければ、太子の御言に添ひ難しと思ふ。

日夜間斷なく精力を盡すべし

試みに我輩をして蠶たらしめ、而して如何なる人を好み、又如何なる人を好まざるか說かしめたならば、我輩は左の如く言ふであらう。

第一　好かぬ人。

一　手足の垢着きたる人を好まぬ、多忙にて手足を洗ふ暇なしと云ふが如き者は、外に勉勵の風を奬ひ、内に惡情の氣に滿てるものである。

第二　手荒き事を爲す人を好まぬ、斯る人は軟弱なる體質を損ひ、剣桑給桑等何を爲すにも亂暴である。

第三　短氣な人は嫌ふ、初めは親切且つ熱心でも、中頃非務に飽き易し。

第四　氣長き人は嫌ひである、斯る人は(臨機應變の處置を取らず、爲に苦悶に陷らしひることが度々ある。

第五　朝寢をする人も嫌ひである、午前四時には第一回の給桑を要する積りなからである。

第六　早寢を急ぐ人も嫌ひである、夏の夜にも十二時は最終の給桑時である。

第七　明日ある人は嫌ひである、斯る人は大切なる事務を延

多くの人々は上簇となれば知らぬ顔である、我蠶は之に就て苦かな失敗を有することあるから、近頃蠶の第六齡を以て擬し、繭中は飼育の半ばなりと聲言して居るが、全體上簇とは果實の實入り時て、其注意の如何によりて豐凶を異にするのである、之には春夏秋蠶の差別はないが、譯て失敗は夏蠶に多い、春蠶の時には温度も低いから、火の用心を十分にして、火力を用ふることてあるが、夏蠶の時分には天然の温度が高い爲めに、火力を用ふることが掛ない、否上げて終へば其儘である、勿論温度が高くて晴天の日ならば、火力を用ふることは要らぬが、温度高くして温氣の多いことが有勝である、斯る日に火力を用ひざれば其出來たる繭は、到底製絲には適せぬものである、夏蠶たると秋蠶たると將た春蠶たると問はず勿論、温度高くも湿氣の多い日には、必ず火力を以て其湿氣を拂ふやうにせねばならぬ、又上簇室は暗いのが良いと云ふのて、風も通はぬ樣に締切者もあれど、之は又格別の誤りである、要するに蠶の時に

は、空氣の流通を良くし、日つ炎熱防禦の手段として日掩を十分になすべきてある、室内は成る可く廣々とし、且つ清潔に拂拭するのが大切てある、練木氏は純清淨潔は飼育の半ばと言はれたが、之は凡て蠶に通じての與義てあるけれども譯て春夏の壯蠶より秋蠶に掛けては養蠶豐作の與義てある太子が平和なるやう陽氣を廻らせと仰せられたのも、其心の茲にあることは疑ふべくもない。

四　上簇室の取扱法

ばして、之を明日に爲さんとし、蠶の不快を顧みない故である。

第八　愛なき人は嫌ひである、斯る人は蠶の苦みを見るも痛痒相感しない。

第九　智識なき人は嫌ひである、斯る人は盲動して不測の禍に陷らしむる。

第拾　果斷なき人を嫌ふ、斯る人は機に臨みて爲すべき務めを爲す能はざる者である。

第拾一　利慾の少なき人を嫌ふ、斯る人は目前の小利に眩して大損を招く、養蠶家の大損と蠶の運命の悲慘とは同一である。

第拾二　煙草を喫する人も嫌ひである、否之を喫んで手と口とを洗はぬ人が嫌ひである。

第拾三　酒に醉ひたる人も嫌ひである、斯る人は蠶の事も一時忘れて終うからである。

第拾四　油賣りも嫌ひである、斯る人は爲すべきを爲さずして、爲したる如き眞似を爲すからである。

日夜間斷なく精力を盡せとの訓示に照して見ると、以上拾五個條の其一に當る者は、既に御旨に添はぬものである、然らば御旨に添はんとするには如何にすべき乎、乞ふ我輩再び蠶となりて、好む人の要件を師るであろう。

二　好きな人

第一　身潔りを清潔にする人、斯る人は居室蠶座をも綺麗にする、併し日髮日風呂白粉香水に憂き身を窶すのは、蠶中は御免である。

第二　柔和な人、柔和に何事も手早くする人は、誠に心地の良いものである。

第三　辛抱強き人、斯る人は初めより終り迄親切で、如何なる難事にも堪ゆるからである。

第四　勇氣ある人、斯る人は飢餓其他苦難に陷ゐらんとする時、身を抵して働くからである。

第五　早起きする人、斯る人は發生より結繭迄一瞬も眠らぬ蠶に對して、十分手を盡すからである。

第六　遲く寢る人、斯る人は最後、最々後の給桑其他を、十分にするからである。

第七　中途で倦かぬ人、斯る人は蠶に愉快を感ぜしむるものである。

第八　慈愛深き人、斯る人は余等の健康に注意して一時も忘れぬものである。

第九　智識によりて活動する人、斯る人は取扱上の錯誤と云ふものはない。

第拾　利慾の大なるもの、斯る人は自己の利益の故に蠶をも親切に養ふものである。

第拾一　煙草を喫すれば直に手を洗ふ人、煙草を喫せざる人は猶更良し。

第拾二　酒は絶對的に飲まぬが良い、酒は狂氷にして又催眠藥である、蠶の前には神酒も無用也。

第拾三　平和なる家庭男唱婦隨、男は諸し女は應ず、斯る家庭では船頭多くして船が山に登るやうなことはないものである。

第拾四　蠶日向なく立働く人を好む、斯の如き人は中心より蠶を愛ぶ快な地に置くものである、主人在らざれば油を賣るが如き者は、蠶の敵である。

右拾四個條を具備して居るならば十分である、我輩は今改めて、これ蠶の要求にして又聖德太子の遺敎である、宜明に、思ふに今日立派に蠶を飼ひ自他を益して居る人々は、曾以上の拾四個條を守り、且つ桑樹飼養技術等を完全にして居る者である、斯の如くにして誰か失敗しやうぞ、諸君若し失敗したならば乞ふ前記の拾四個條と太子の蠶敎に回顧せよ我蠶を養ふには父母の赤子に於けるが如くせよ、

寒暖陽氣の加減皆我身に做ひ、陽氣を過らし、温ならず冷ならず平和なるやう、我輩の豫定は本紙上に於て十分申上る積りであつたが、會日夜間斷なく精力を盡すべし。

我輩の豫定は本紙上に於て十分申上る積りであつたが、會報も明年初刊と共に凡ての記事を新にすると云ふことであるから、遺憾ながら之にて擱筆す、願くは其意の在る處を汲むで、其足らざるを恕し給へ、又詳はしく知んと欲する人達は

種別	蠶期	上蔟月日	食桑中	経過中	合計	室内平均温度	温度	回数	對蟻一量匁給桑量
二化性	白龍	七月十七日 午前八時半	八月十九日 午前九時	十八日 十四時間	四日 十時間半	二十三日 三十分	八〇・七	八四・六	一六七 三二、五四八
二化性	大和錦	同	八月十九日 午前七時	十八日 十二時間	同	二十二日 二時半	同	同	三二、五四八
一化性	小石丸	七月二十六日 午前八時	八月十九日 午前十時	十八日 十六時間半	四日 九時間半	二十三日	八〇・三	八四・二	一七二 三二、七五四
一化性	青熟	同	八月十九日 午前八時	十八日 十四時間半	四日 七時間半	二十三日	同	同	同 三二、四一四

四十年度の分供試種類及其系統は左の通り

二化性　白龍　大和錦　四ヶ年の風穴貯藏の習性を有す　本場採種

一化性　小石丸　二ヶ年の風穴貯藏の習性を有す　同　青熟　同　上

右飼育の結果

全蛹經過表

乞ふ拙著日本養蠶豐作全書に據られんことを、何れ明春は又項を改めて御目に懸るであらう。

我輩は諸君の養蠶が春夏秋共に一大豐作を爲さんことを祈る。

（完）

埼玉縣農事試驗場技手　永野辰五郎

各齡體量表

（生長極度百頭の量）

目標	種別	上蔟 重量	上蔟 容量	中蔟 重量	中蔟 容量	下蔟 重量	下蔟 容量	合計 重量	合計 容量	上蔟一斉 重量	上蔟一斉 頭数
二化性 白龍	種別	一八三六	二四	五二	五二	五七〇	五五〇	二四八二	二四六二	一〇〇	三一七
二化性 大和錦	種別	一五五六	六	二〇	六	二〇	五三〇	二一二二	二一二三八	九三	三四一
一化性 小石丸	種別	一六八二	一〇	三二	一〇	三五〇	三五〇	二〇〇二	一九七二	一〇二	三四一
一化性 青熟	種別	一五八七	七一	七一	五〇	三二四	三二〇	二〇六四	二〇三六	一〇二	三二六

收繭表

（對蟻量一匁）

目標	種別	最長 繭	最長 容量	平均 繭	平均 容量	最長	最太	平均	最節切	新
二化性 白龍	種別	二九〇〇	四〇〇	三五〇	三六三	四〇〇	二九二	一二〇〇	一九六	〇七
二化性 大和	種別	二〇〇〇	四〇〇	三〇〇	三四七	四〇〇	二九二	一二〇〇	一九八	一〇九
一化性 小石丸	種別	二〇〇〇	四〇〇	三〇〇	四一七	四〇〇	二九二	一二〇〇	一九八	一〇九
一化性 青熟	種別	二〇〇〇	四五〇	三〇〇	四一七	四〇〇	二九二	一二〇〇	一九八	一〇九

以上の結果によつて見れば、一化性飼育の成績は、其殆んど凡ての點に於て、掌ろ二化性飼育の成績を凌駕して居る、而しながら本疑問たる飼育の難易如何に對しては、其成績良好なるの故にて、直に強壮なる飼育容易なりとは、斷定し難く、這は不適當なる飼育の下に、例へば給桑不足とか、過蔟とか、或は又多濕、過乾、不順の氣候等の下に飼育し、其不適當狀態に抵抗する力の強弱によつて決定すべきものであるが、而しながら前成績によつて、飼育の其他至難なるものでないことは明瞭である、蓋し飼育の左樣に困難なるものならんには例令適當狀態の下に於ける飼育の結果と雖も、其然らざるものに比し勿論劣等なるべき筈である、兎に角、飼育の難易問題は、假に一歩を讓つて困難なりとするも、既に繰返したるが如く、吾人養蠶家は稻の飼育の困難位には打勝つて、總用なる蠶の飼育をなすこそ、進歩的養蠶者の務めである、而も其

實蠶の種類と強弱關係は、吾人が想像して居る程に差のあるものではない、寧ろ其製造蠶種の善惡が、飼育の難易に至大なる力を持つて居るのであるから、品種々類を云々するよりか、善良なる蠶種の飼育こそ肝要なることである。

前に述べた一言附加して置かんに、夏蠶期と雖も環境の事がないのに、特に秋蠶時期と稱んだのは、夏蠶時期は恰も入梅期であつて、蒸熱冷温交々襲來して、寧ろ秋蠶期よりも飼育困難なると特に病毒傳播の最大なる故である。

桑葉問題を如何にすべきか

元來桑樹の生理上よりすれば、春蠶期一回の摘採でさい、尚其生理を害する筈であるのに、近來秋蠶業の發達に從つて、秋蠶期飼育の摘葉其他しき有樣で、桑園も念々衰頽の狀態である、例令其關係が少數の蠶種製造家のみなりとは謂ひ、等しく秋蠶期飼育の增加である以上は、決して看過すべき問題ではあるまいとの不安を挑むものあらんが、之れは只一把變たるに過ぎず、即ち桑の摘採は或る程度を越さば決して利益がなく、若し時期に於ては春秋蠶に使用するも宜しからんが、無く成木、老木の時代となりては、決して利益がない、否な寧ろ不利益なる結果を生ずる、其關係は例へば秋蠶期に一反歩より百貫目摘葉したりとせば、翌春蠶に於て百貫目内外の減收を見るの不利益は、又大なる利益もない、然るに夏秋蠶飼育用として、春發芽、刈取り上地の事情に鑑みて、夏、秋蠶、或は早稻秋蠶及び普通秋蠶等、しく晩き秋蠶の二三回の飼育をなして、之れに摘葉することゝなせば、其收穫は春蠶用として從來の仕立方に據れるものとの比較でない、今實驗の一端を挙ぐれば、植付第二年目密植桑實生圖（一反歩一千五百本植）にして、一反歩二百五十六貫の收穫を上げ得たのである、而して第三年目即ち本年は優に鬼桑實生桑にして一反歩三百五十貫、桑實生百七十五貫七百目、桑二百四十貫三百目である、前記桑實生圖の收穫は、殆んど之れに等しき收穫ある見込みである、既に夏蠶に摘葉したる分は前記桑實生圖の收穫時の收穫は、殆んど之れに等しき收穫ある見込みである、而して今春蠶用の桑に五百貫以上であるのが普通なのであるから桑園にありては優に五百貫以上である。

此の五百貫は葉丈けの五百貫であつて今春蠶用の桑に比較すれば、刈桑一千二百五十貫、即ち四十一駄以上に相當する譯である、即ち通常春蠶にありては、其棒（前年の枝條）と葉（新梢を含む）とは五分〳〵であつて、其葉は二割五分の新梢を含んで居るのであるから、之れ等凡てを計算すると、前記一千二百五十貫に相當することゝなる、何んと一反歩の收穫、一千二百貫以上であるとは、實に驚かざるを得ない、春蠶用桑にありては殆んど絶體に望むことの出來ない位である、而して秋蠶期飼育なるものは、斯の如き桑園を利用することが出來るのであるから、桑葉問題より、寧ろ進んで秋蠶飼育を擴張すべき譯である。

病毒問題は如何

秋蠶期は病毒の繁殖盛んなる時期で、微粒子病毒の爲めに受くる所の損害は、春蠶期採種のものよ

り以上であろうとは、一般の唱ふる所である、一體病毒（病原微生物）なるものは、高温であつて且つ多湿なるときは、其繁殖は乾燥であるか、或は低温にして且つ燥乾なる時は、其繁殖が鈍ぶい繁殖の多くなる時は其傳染も又盛んなるべきが、ざる場合は傳播も又少ない、故に六七月の梅雨期中に於て飼育するときは、其の天候は高温多湿なるか、或は冷湿なる場合が多い為に、病毒の傳播も又盛んである、秋蠶生種は比較的病毒の多くのも、其元（原）蠶の飼育期が、恰も入梅期中に當たるが故であろう、然るに秋蠶は入梅明後の飼育で、多くの場合乾燥勝ちであるから、秋蠶原蠶の如く、病毒の心配が少ない、而しながら實際に於て、春蠶期飼育のも病毒に比しては、寧ろ病毒の蔓延多かろうが、今や完全なる蠶病消毒法なるものが發見され、特に消毒を行なはなければならぬの所に從ひ、何れも皆之れが消毒法によつて、絶體に蠶室蠶具に附着しあるべきであるが、此の消毒法によつて出來るのであるから、其飼育する所の病毒を全滅することが出來る蠶種にして真に無毒なる良種であるなれば、そは病毒を恐るゝに及ばない、桑樹の害蟲特に除去すべきであるが、其他桑尺蠖等も其嫌外をなすことがあれば宜ろしく之れを編除せざるべからず、若し又然せざるときは、左様に変よる程のものでもあるが、只茲に問題外のことではあるが特に一言を加へて置きたいのは、其原種である、若し其原種が病毒検査の成績にして、三割以上否二割以上の不合格蛾區（病毒の尋めに）があつたなれば、之れは原種たるの資格ないものとして、自家の蠶種製造用には絶対立てぬがよい、蓋し例へ無毒の蠶種のみ合格せるのであるとは謂へ、矢張有毒なる故にて廢棄せられたる蠶種とは、頗る近縁にて、兎に角同一血統であつて或は從弟か從兄の関係に基づき、之れを考へて見るのに、其合格したる蠶種は、直接病毒こそ遺傳せられて居らぬにもせよ、其性質に於ては必ずや病毒に侵され易すく、即ち免疫性に欠けて居るに相違ない、故に原種用蠶種は可成全く無毒の蛾區のものを飼育に供したいのである、若し自家の蠶種にして有毒歩合の場合は、宜しく他に善良の蠶種を求むること、實に肝要なる勉めである、如斯注意し、其飼育に於ても周到なるに於ては、決して病毒恐るゝに足らずである、論ずるに、春蠶に於ける天然育、折衷育、高温育、其他種々の飼育法に於て其病毒歩合に差違はなく、共に其の病原の全滅と及飼育法の注意とによつては、蠶種の完全なる病毒歩合は、ただ少ない、之れ正しく、克く氣候に打勝ち得るので病毒豊恐るゝに足らぬことを示す一とつである。

生産せる蠶種の外見如何

蠶種外見上の醜美は其販賣上蠶種の價値を定むるに於て甚だ有力なる事項であるから、蠶種製造家は勿論、卵色の一定、蛾卵の整理、及蛾卵数の多きを望むは、當然であるが、扨て秋蠶期は、一般に化性蠶種を飼育し之れより採種したるものは、春蠶期製造したる即ち從來の普通春蠶種に比して、遜色なきや否なやの問題も、又大に重要視すべ

き價値を保つて居る、然るに當場の調査によるときは此の事たる實に杞憂たるに過ぎぬ、今同一系統よりなる春、秋兩期に採種したるものを比較對照して、其外見上の一般價値を案ずるの資材に供せんに。

種類	製造期	卵色	産卵数
小石丸	春蠶採種	淡黒紫色	二四八
同上	秋蠶採種	黒紫色	二八八
仙色	秋蠶採種	黒紫色	二八六

前表示す所の如く、卵色は産卵数の凡てに於て秋蠶期採種のものが勝つて居る、又卵の形狀を比較すると、秋蠶期採種のものに比して遙に少ない、之れ其特性として寧ろ卵間の短かきものし、當然の現象である、而して寧ろ卵間を極端に長くした即ち、春蠶期に採種したるものを、翌年秋蠶期に飼育する蠶種の、水引餘りに多きに過きるものは必ず や、多少卵の生理に背ける現象に相違ないが、此の反面として生理上特別の変化なくして、卵期間の短かき爲めに、或は其特性として水引の少なきもののならんには、理論上其卵に肝要なる内容物の減損少いのであるから、寧ろ卵の生理上喜ぶべき現象であるやも知れぬ、兎に角之等卵の外見上の價値は、春蠶期採種のものに比して遜色ないのである扨て然らば

秋期採種せるものを翌春蠶期に飼育したるものとの比較如何

此の解決こそ、秋蠶期に就て翌春蠶期の蠶種を製造すること、及蛾卵の多きを望むは勿論、卵色の一定、蛾卵の整理、及蛾卵数の多きを望むは、當然であるが、扨て秋蠶期は、一般に化性蠶種を飼育し之れより採種したるものは、春蠶期製造したる即ち從來の普通春蠶種に比して、遜色なきや否なやの問題も、又大に重要視すべき現象であるやも知れぬ、兎に角之等卵の外見上の價値は、春蠶期採種のものに比して遜色ないのである扨て然らば

秋期採種せるものを翌春蠶期に飼育したるものとの比較試驗

供試種類及其系統左の通り

明治四十年度春飼育

春期採種又者
秋期採種又者

從來の如く普通春蠶種採種法に據れるもの
秋期採種又者　春蠶種を風穴に貯蔵し秋蠶期取出して飼育し之れより採種したるもの

種別	春期採種又者	秋期採種又者
食桑中	十二時間半	十二時間半
結繭中	十七時間	十七時間
日数合計	三十四日	三十二日六時間半

全齢經過表

種別	蠶室内平均温度	給桑回数	繭量一匁当蠶数
春期採種又者	七〇、六	一七	三七二五
秋期採種又者	七二、四	一七	三九〇二五

右飼育の結果、

各齡體量表（生長極度百頭の量）

種別／目標	一齡	二齡	三齡	四齡	五齡
春期採種 又昔	〇、一五匁	〇、九〇匁	四、七五匁	二二、三〇匁	九五、〇〇匁
秋期採種 又昔	〇、一五	〇、八〇	四、四五	二四、〇〇	一〇八、〇〇

收繭表の一（對蟻量一匁）

種別／目標	上繭 重量	上繭 容量	中繭 重量	中繭 容量	下繭 重量	下繭 容量	玉繭 重量	玉繭 容量	合計 重量	合計 容量	上繭一升 重量	上繭一升 顆數
春期採種 又昔	二、六八八匁	二七七、一合	九、八匁	一、〇合	二八、六匁	三、三合	三二一匁	三一、五合	三、〇四七、四匁	三一二、九合	九七匁	二五五
秋期採種 又昔	二、九七五	二九七、五	二四、〇	二、四	二六、〇	二、五	一九〇	一七、五	三、二一五、〇	三一九、九	一〇〇	二五四

收繭表の二（對給桑百貫）

種別／目標	上繭 重量	上繭 容量	中繭 重量	中繭 容量	下繭 重量	下繭 容量	玉繭 重量	玉繭 容量	合計 重量	合計 容量
春期採種 又昔	七、一九六匁	七、三一、八	二五、二匁	二、七合	七六、六匁	八、八合	八五九匁	八四、三合	八、一五六、八匁	八、二七、六
秋期採種 又昔	七、六二四	七、六二、四	六一、五	六、二	六六、六	六、五	四八七	四二、五	八、二三八、一	八、一七、六

絲質試驗

種別／目標	一顆の絲長 最長	一顆の絲長 最短	一顆の絲長 平均	對四百回纖度 最太	對四百回纖度 最細	對四百回纖度 平均	對四百回 類節	對四百回 切斷
春期採種 又昔	四七〇	三九〇	四三二	三、六〇	一、四八	二、五二	九、五	〇、三
秋期採種 又昔	四八〇	四五〇	四六三	三、七二	一、六〇	二、七六	一四、四	一、〇

繰絲試驗

種別／目標	上繭一升 乾繭量	上繭一升 生絲量	上繭一升 屑物量	上繭一升 蛹量	對生繭百目絲量	對蟻量一匁上繭絲量	對給桑百貫絲量
春期採種 又昔	三六、〇匁	一〇、二匁	三、六匁	一六、七匁	一〇、五匁	二八二、二匁	七五五、五匁
秋期採種 又昔	四〇、〇	一〇、三	三、八	二〇、六	一〇、三	三〇六、九	七八六、四

以上

四十一年度春飼育成績供試種類及其系統左の如し

春期採種 小石丸
同 青熟
従來の採種法による普通春蠶種

秋期採種 小石丸
同 青熟
（春蠶種なりしものを三十九年後二ヶ年間風穴貯藏の習性を附けたるものを秋期飼育し之れより採種したるもの）

右飼育の結果

各齡經過表

種別／目標	飼育日數 食桑中	飼育日數 絶食中	飼育日數 合計	室內平均 溫度	室內平均 濕度	給桑 回數	給桑 對蟻量一匁
春期採種 小石丸	二十六日十二時間半	七日十二時間半	三十四日一時間	七一、六度	七〇、二度	一六四回	四一、〇二六匁
同 青熟	同	同	同	同	同	同	同
秋期採種 小石丸	二十六日十九時間半	七日五時間半	同	同	同	一六五	三八、九二九
同 青熟	二十六日二十二時間半	七日二時間半	同	同	同	一六一	三九、〇九九

各齡體量表（生長極度百頭ノ量）

種別／目標	一齡	二齡	三齡	四齡	五齡
春期採種 小石丸	〇、一六匁	〇、九〇匁	四、二〇匁	二二、六匁	八八、〇匁
同 青熟	〇、一七	〇、九二	四、一五	二二、三	九四、〇
秋期採種 小石丸	〇、一一	〇、九五	四、一〇	二三、〇	九九、四
同 青熟	〇、一五	〇、九七	四、二〇	二一、三	九四、九

收繭表の一（對蟻量一匁）

種別／目標	上繭 重量	上繭 容量	中繭 重量	中繭 容量	下繭 重量	下繭 容量	玉繭 重量	玉繭 容量	合計 重量	合計 容量	上繭一升 重量	上繭一升 顆數
春期採種 小丸石	二、二一二匁	二、一〇、七合	八八匁	八、八合	一二匁	一、二合	五〇六匁	四六、〇合	二、八一八匁	二、六六、七合	一〇五匁	二七三
同 青熟	二、三三八	二、一六、四	八八	八、八	一八	一、八	四九六	四五、〇	二、九四〇	二、七二、三	一〇八	二七八
秋期採種 小石丸	二、八一〇	二、六七、六	二五	二、五	五	〇、五	五三五	五〇、〇	三、三七五	三、二〇、六	一〇五	二七五
同 青熟	二、二八〇	二、一一、一	三五	三、五	五	〇、五	六八五	六二、二	三、〇〇五	二、七七、三	一〇八	二七一

收繭表の二（對給桑百貫）

種別／目標	上繭 重量	上繭 容量	中繭 重量	中繭 容量	下繭 重量	下繭 容量	玉繭 重量	玉繭 容量	合計 重量	合計 容量
春期採種〔四一〕小石丸	五、三九二匁	五、一三、六合	二一四匁	二一、四合	三〇匁	三、〇合	一、二三三匁	一、一二、〇合	六、八六九匁	六、六一、三合

採種上の参考法

絲質試驗表

一頭の繭長

種別	目標	最長	最短	平均
同	青熟	五、六九九	五、二七、五	二、二四
秋期採種	小石丸	七、二一八	六、八三	二、二、四
同	小石丸	六、四四	六、四四	二、三
同	青熟	九〇	九、〇	一、三
同	青熟	五、八三一	五、三九、九	一、三

對四百個繭重

種別	目標	最太	最細	平均	切斷
同	青熟	二、一〇九	一、〇九、七	一、〇九	七、一六六
秋期採種	小石丸	二、四四	一、三七四	一、二八、五	八、六六九
同	小石丸	一、三	一、七五二	一、五九〇	七、六六六
同	青熟	三、六三一	三、三九、九	三、三、〇	六六三、〇
同	青熟	三、六三、〇	八、六六九	八、二三、六	八、二三、六

以上試驗の諸成績を通覽するに、兩年共敗蠶額に於ては秋蠶期採種のもの勝つて居る、又絲質絲量等は困難相一致する點あるも、兎に角其一般成績に於て寧ろ秋期採種のもの勝つて居ると雖も劣つて居る樣なことはない、之れ等の詳細なる事項は今茲に明をなすの繁を避くるが、讀者宜ろしく各表に付き彼或比較熟考せられたらんには、其優劣自ら分明するであろう、之れを要するに秋蠶期採種なるものは、其製種の飼育の成績が從來の春蠶種に比して、例令勝つて居る樣なことなるも、其結果は不成績に陷る樣なことになるにもせよ、之れ更に普通春蠶種を風穴貯藏して、原種となす丈けのことであれば、之れ又憂ふる程の問題でもない、更に角之れ等は更に後年の試驗成績に待つより致方のない事である。

終りに當申添へて置きたいことがある、そは他ではない此の発蛆法の研究は、未だ嘗て二ヶ年間の試驗であるのに殆んど斷定に近き語を以て論じ來たりたることは、元より當業者諸士の誹を甘受する積りであるが面しながら、此事たる一ヶ年遅るれば一年丈け丈け不利益を見ねばならぬ事柄であるから、一時も早く諸士に知らしめて其惨害を免れしめたいとの愛心と、且つは斯樣な重大なる問題は、單に試驗の成績にのみよりて決定するでなく、實際に應用した上の成績にも鑑みなければ、斷定困難なる事柄である、故に茲に発蛆法を提供し、諸士の如何を敬したい考えより起こつたことである、顧みるに蠶蛆の爲めに惨害を蒙りつゝある所の、當業者諸士よ予が心のある所を汲み且つ其有望なることを思ふて是非之れが應用を切に希望する次第である。（完）

春蠶期に揃立て飼育したる試驗の成績は前示した所の通りで其成績佳良であつたが夫れ以上の研究は何れ後年に待たねばならぬが察するに十數年或は數十年の風穴習性を帶びた一化性種を原種として採種したる者を、翌春蠶用種となせば其の結果或は繭質其他の成績に影響を及ぼすかも知れぬが數年位には其繭質其他の成績に於て劣る樣なことはあるまいと思ふ、よし數年繼續採種すると、其結果は不成績に陷る樣なことになるにもせよ、之れ更に普通春蠶種を風穴貯藏して、原種となす丈けのことであれば、之れ又憂ふる程の問題でもない、更に角之れ等は更に後年の試驗成績に待つより致方のない事である。

終りに當申添へて置きたいことがある、そは他ではない此の発蛆法の研究は、未だ嘗て二ヶ年間の試驗であるのに殆んど斷定に近き語を以て論じ來たりたることは、元より當業者諸士の誹を甘受する積りであるが面しながら、此事たる一ヶ年遅るれば一年丈け丈け不利益を見ねばならぬ事柄であるから、一時も早く諸士に知らしめて其惨害を免れしめたいとの愛心と、且つは斯樣な重大なる問題は、單に試驗の成績にのみよりて決定するでなく、實際に應用した上の成績にも鑑みなければ、斷定困難なる事柄である、故に茲に発蛆法を提供し、諸士の如何を敬したい考えより起こつたことである、顧みるに蠶蛆の爲めに惨害を蒙りつゝある所の、當業者諸士よ予が心のある所を汲み且つ其有望なることを思ふて是非之れが應用を切に希望する次第である。（完）

生絲檢査の成蹟と撚絲との關係（續き）

學士會員
生絲檢査所技師　今西直次郎氏談

織度不整の撚絲經濟に及ぼすこと

生絲檢査所に施行せらるゝ生絲品位檢査の諸項目は墨く取引の成否に大關係を有することは無論であります、其内織度の如きは最も重きを置かるゝ樣であります、織度の不整なる生絲は前述の再繰中に細、ムラ等の原因の爲めに切斷を生ずる物であるけれ共、其細、ムラは再繰に於て全然取除き得らるものではない、再繰の後生絲に下撚を施すものでありますが、撚りて懸けつゝ鍋に揚げらるゝ、伸張力は再繰の時よりも多きを要するものでありますから細、ムラ」の場合には又々切斷を爲して屑絲を生ずるものであります、下撚を施したるものを普通二本合せて之に上撚を施すことつて居ります此撚りを施すに際し、生絲織度の不整なるもの假令ば

九乃至十デニール位の細絲と十五六デニール以上の太絲とを混合し有場合には其撚絲は波狀を呈して甚しきは壁織に用ゆる撚絲のやうになるもので通常地合一定の織物の材料となるものではないのです、斯る不同の撚絲は製造中發見次第之れを取除くに注意するけれども製造中恐らくは容易に發見し得らるゝものではない、かねて撚絲仕上げの際之を吟味して甚しきものは之れを取除て注文主に之れを渡して居ります、佛國里昂は流石に精美なる織物を製出する丈け夫れ丈け撚絲の吟味が嚴重であります、余嘗て同國の撚絲場に修業中里昂の注文主より前述の如き「ムラ」撚絲を附返されたることを屢々目擊しましたが、其撚絲は注文高より引去られて撚絲場主の辨償となるものであります、要するに纖度不整の爲めに屑絲を生じたる量目は之れを償ひ且つ之れが生産力を減じて撚絲經濟に關係を來たすことは實に大なるものであります、以上は撚絲に對する缺點であるが其撚絲を織物に仕上げても亦同じく其生産力の上に大關係を生ずるものであります、玆に之れを枚擧するの暇はないが、一言我羽二重織に就て例を揭げてみますれば、此織物は人の能く知る如く經緯共に撚りを施さぬものでありまして生絲纖度の整否には至大の關係を有するものであります、近年我羽二重織に力織機を用ゆる者益々增加して來た其實况を觀察するに普通羽二重は五十碼を以て一定とし之れを織立てる樣てありますが纖度均一なるものは無事に仕上げ得らるけれども其途中假令ば二三十碼の處に甚しき太絲を顯はした、之れは豫定外の太絲の爲めであつて若し織續して織立るなれば此一定は傷物になるのであるから其部分を取除くべきものであります、然るに力織機は生産力を增すの目的で使用するものなれば一職工で數臺を擔當するものであるから一々其絲節の如何に注目することは出來ない其不同なるものを顯出した頃には已に數寸織上げられて居ることは屢々てある、兎に角其部分は取除くを要するもので、之れが爲めに屑を生じ一日の生産力に影響することは實に夥しきものであります。

要するに纖度の均否は撚絲及織物の作業上幷に經濟上最も大關係を有するものであるから、內外商より我檢査所に其檢査を請求せらるゝ件數も年々增加つゝあることですが仔細に其成績を閱するに始終市場に歡迎せられてある生絲の纖度は何つも好成績であつて一年中の平均を見ても實に感服して居る次第であるが併し斯の如き生絲の數は猶ほ微々たるもので復た甚だ遺憾とする所であります、製絲家は前述の撚絲經濟の如何を鑑みられ努めて生絲纖度の均一を圖られんことを切望するのであります。

纇節の多寡は撚絲の生産力に及ぼすこと

生絲纇節の多寡は織物の精粗に大關係を有するものでありますが其大部分は撚絲工場に於て除却せなければならぬものでありまず、先つ生絲の再繰を了りたれば伊佛に於ては特に節「コギ」器械の設けあつて再繰されたる生絲を更に之れに繰返しつゝ主なる纇節を取除くものであります、此節「コギ」は極めて簡單なる裝置て鋏形のものに羅紗を覆ふたるもので此

間隙を生絲が通過するに際し大纇は勿論檢纇にても少しく大なるものは此節「コギ」に止められ絲條は切斷するもてあります其節を除きては更に緒を繋ぐものであるから纇節の多きものは自ら屑絲を生して隨て生産力を減ずるに至るものであります、此節「コギ」は一ヶ所でなく二三ヶ所も備附けられてあつて生絲は是に於て大概掃除せらるゝのみならず、其固有の光澤も同時に發輝するや否やを認むることが出來るのであります、近年我邦に於ても歐米式の撚絲器械大に行はれて居るが未だ精巧なる織物を輸出するに至らぬが、前述の如き節「コギ」を使用する者殆んど皆無の樣であるが、輸出向の生絲は纇節の如何に注意すべきものであります。

從來歐米に於て生絲の纇節檢査は肉眼鑑定に關するものであつて、我檢査所に使用せらるゝ如き器械的檢査を施して居らぬ、我檢査所に於ては創立の際之れを考按せられて品位檢査項目の一に加へられたが、初め請求者たる外商中之れに重きを置かなかつたが其効用の著きを感じて昨今は概ね其檢査を請求することになりました、纇節は種々あつて製絲家も能く其原因を承知せられて居るが前述の如く撚絲の精粗及び生産力に關すると甚だ大なるものであるから我檢査所の成蹟に鑑み之れが改良を施されんことを希望するのであります。

強伸の撚絲生産力に關すること

生絲の強力及び伸度の多寡は主として織物の良否及び生産力に大關係を來たすものなれども撚絲の工程に關係することも尠からぬものであります、前述の下撚を施す場合に於て細「ムラ」の爲に切斷を生ずるは畢覺強伸力を一定せんが爲てあります獨り細「ムラ」のみならず生絲抱合の惡しきもの即ち絲條の密着を欠くが爲に自然強伸力を減ずるもので隨て撚絲中切斷を生ずるとも屢々てあります、近年歐米諸國の機業家は織物の生産力を增して成るべく安く成るべく多く需要せしむるの方針を取つて居る撚絲家も之れに準じて撚賃を安くし生産を增すことに餘儀なくせられて居るから從來撚絲器械の錘一分間に、四五千回轉したものを一萬回以上にも速力を增して居る樣な次第て、米國の如きは最も其必要を感じて居る樣てあります。

之れを要するに生絲の精否は概ね撚絲場に於て鑑別せられ且つ整理せらるゝものであるから機業家は撚絲場の成績に鑑み、自己の經濟如何を豫定するか如く撚絲家を信頼することは多大のものであります、故に撚絲の精否及生產力に關する諸項目に就て大要を述べて來たのでありますが我生絲檢查所に於て施行せられて居る品位檢查の項目は悉く前述撚絲の精否及經濟に關係して居る者であるから、我製絲家は常に其檢查の成績に鑑み改良進歩の方法を講究せられた方が最も捷徑であつて實效を奏せらるゝてあろうと信ずるのであります。

（完）

一事一言

農學士　加賀山辰四郎氏談

去月中旬或る用向で信州地方へ旅行した、上野から出て信越線で長野に行き、歸りは、中央東線に依りて松本諏訪を經て甲州を通つた、此旅行中蠶絲業の事で見たり聞たりした事を種にして、少しばかり話して見よう、急ぐ旅であつたから、思ふ様な視察も出來ず大體汽車中の視察と承知して貰ひたい。

○上野を出て高崎迄の間に第一に目に着く者は大宮より熊谷深谷本所等の停車場附近に製絲場の煙突が夥しく立て居る事である、武州は有數の蠶業國で、繭の產額多く、從て製絲場の澤山あるは尤の次第であるが、其經營者は多くは信州人であつて、赤羽から始つて新町迄の間に十三ヶ所四千餘釜の工場が諏訪人の手に依つて經營せられつゝあるとの事である、以前、上武地方で買込んだ繭を碓氷隧道を牽上げて、大屋驛よりは荷馬車で十四五里の道を和田峠を越へて、晝夜兼行て、諏訪へと持込んだ當時の事を回顧すると、荷造運搬の費用を省き、繭質の損傷と製絲の時期を失する等の不便不利が無くなつた譯で、誠に結果な事である、今日でも、本所深谷等の市場に出る繭が悉く是等の製絲場で潰される譯ではないが、併し、漸次原料供給地と製絲工場との位置が接近すると云ふ現象は、賀すべきことゝ思ふ、他の地方にもポツポツこんな傾向が見へるが、將來は益々此趨勢の進まんことを望むのである。

○新町邊を通つて氣の付くのは神流川及烏川沿岸の廣漠たる桑園で、旅人をして、上武地方蠶業の盛大を想像せしむるは慥に此桑園であるが、見渡した所では桑樹の勢が案外良く見へた、桑園の改良と云ふとは多年の問題で、殊に近年は官廳や團體で補助金を出し、苗を配り、教師を置き抔して其增殖改良を圖りつゝある場合だから、當業者も肥培の大切なることだの、濫穫は却て損である位の事は、氣が付て來た爲であらうと一人が言へば、イヤ、遠目で見て桑園の勢良く見へるのは、本年は秋蠶の不作で桑葉が澤山殘つて居るからだといふものもある、車中の評はとり〳〵なりしが、我輩は、最早今日は當業者は桑と繭、繭と絲との關係から、桑園肥培の緊要なるを自覺したる筈なりと云ふ意味から前說に贊成した。

○高崎停車場を通る者は線路の左方に工場の如き大な建物のあるを見落してはならぬ、之は言ふ迄もない碓氷社の分工場である、丁度我輩の通過した日は、同工場の增築の事で相談會が開かれて、理事者側から提出した三萬幾千圓かの原案を、滿場一致で可とするのみならず、今一層增額したらと云ふ議員もあつたとの事である、碓氷社の事は今更述べ立てる迄もないが、同社並に甘樂下仁田等の所謂上州南部三社が今日あるを致した所以は、是等諸社の基礎が對人信用にあるに依るといふことは最價値ある事實で、同種類の組合に對し、好個の模範てはあるまいか、碓氷社の社則では、重役は毎年改選する規定なるが、現社長は重任二十四年に及ぶとの事である、理事者の提案には、兎角嘴を容れたがる世の中に、原案の金額を增して迄も業務の擴張を理事者の責任に委せんとする一事を見ても、理事者を信頼するの厚きことが分るではないか、同社の區域は、漸次擴張し、今では五縣二十八郡に渉り、組數百四十六、社員の數二萬五千に達し、尙ドシ〳〵加入を申込むといふ情況で、本年の製絲高は八千個以上に及ぶ見込だと聞いては、同社の盛衰は、獨り社員の利害問題のみでない、其影響する所極めて廣く且大なりと云はざるを得ない、甘樂下仁田の二社も、漸次太るとの事であるが我輩は是等の諸社の區域が廣がり、社員が增し、製絲高が殖へるといふことは、即ち經營其宜しきを得たる證據として、社運の隆盛を祝すると共に、永久に社業の基礎を鞏固ならしむる方策の實行に關して、今一段の力を盡して貰ひたい、之は獨り我輩の希望のみてはあるまいと思ふ。

○信州路に這入つて小諸、上田邊の製絲場、縣立蠶業學校蠶病豫防事務所、蠶種製造家の廣告など、鐵道の沿道だけでも、色々と蠶業上の設備があつて、道は信州だと思はれる、上田の城下桑を見て、歩桑といふのは斯ういふのかと、問ふ客があるかと思へば、屋代邊の山の上の桑を見て、あんな高い所に桑を作る勞力は非常だろう、信州には桑園を仕立てる餘地が乏しいと見へると評する人もある、ハアー之が屋代河原の桑園か、元來有名な桑園だが、毎度霜害や水害てやられるさうだから、手を入れる張り合がないのだらうが、信州の桑園には大分此樣なのがあるか知らん抔、樣々の話の中に、汽車は長野に着いた我輩は車中で此話を聞いて、彼の人達は色々と評をするが、あれが歸國後信州視察談になるのではあるまいか、兎角汽車の通る地方が其縣の代表視せらるゝ嫌がある、視察する人も、談を聞く人も、氣を付けねばならぬ事であらうと思ふ。

○共進會は其規模の大なると、位置の形勝を占め居る事は、恐らく他に例が無からう、各館の配置、構造、出品の陳列等も、先づ可なりの出來だ、殊に夜間開場に、惜氣もなく電燈を點ずる抔は、他てはチヨツト眞似の出來ぬ所と思ふ、そこて、外の事は別として、蠶絲業に關して言へば、今回の共進會は、聯合區域は、本邦蠶業の重鎭たる關東を中心として、新進の愛知新潟を兩翼に控へ、而も、主催縣が長野と來て居るから、蠶絲館獨立といふ先例を開いたのは、尤の次第

であるが、殊に重きを置くといふ意味に於ての獨立ならば、今少しく工夫はあるまいか、農業館から蠶業の部分を切放したといふ、一切公的に此館に收めて、且系統的の印象を與へる樣にしては如何かと思ふ、少くとも、特許館にあるもの丈は是非に此館に入れたいと思ふ、斯くする事は、勅力の關係もあらうと察する、併し、經費上の都合もあり、或場合には地積の關係もあらうと察する、又陳列上の統一を缺くといふ形式論も無いには限らぬが、併し、多少の犧牲は已むを得ぬではないか、我蠶は其一般論として、共進會では、特許品の如きは、其の應用上より見て、可成各館に分屬せしむる方が宜しからんと考ふるものであるが、夫れも悉くといふ譯に行かぬ場合には、分場の困難なるもの、又は其必要少きものを除き、飛合地、及貯藏の方法から飼育術に至る迄學ぶべき種類丈でも、斯うしたならば如何かと思ふ、此度の共進會の實際を見ると、特許館は物が生きて居て、興味が多いから、見物人が停滯し、非常の混雜で、ゆつくり見る事の出來ぬのみならず、中には一部分を見る丈で、自己の營業に關するものでも、小器具の如きは、見落すものが少くなかつたらと思ふ、若し之を各館に分配すれば、觀覽人の數と觀覽時間の配付を均一ならしめ、當業者は各々專門の業に就き十分見る事が出來ると思ふ。

大日本蠶絲會信濃支會の設立した特設蠶絲館は、其位置といひ、內容といひ、上出來であつた。

○今回長野に開かれた關東區實業大會には今

もまだ〳〵増加すべき運命を持つて居る、然るに、秋蠶に付ては學問よりも實際の方が先に進んだとも言はうか、蠶卵の性質、蠶種の製造及貯藏の方法から飼育術に至る迄學ぶべき種類丈でも、斯うしたならば如何かと思ふ、此度の共進會の實際を見ると、特許館は物が生きて居て、興味が多いから、見物人が停滯し、非常の混雜で、ゆつくり見る事の出來ぬのみならず、中には一部分を見る丈で、自己の營業に關するものでも、小器具の如きは、見落すものが少くなかつたらと思ふ、若し之を各館に分配すれば、觀覽人の數と觀覽時間の配付を均一ならしめ、當業者は各々專門の業に就き十分見る事が出來ると思ふ。

大日本蠶絲會信濃支會の設立した特設蠶絲館は、其位置といひ、內容といひ、上出來であつた。

○今回長野に開かれた關東區實業大會には今回も學問よりも實際の方が先に進んだとも言はうか、蠶卵の性質、蠶種の製造及貯藏の方法から飼育術に至る迄學ぶべき種類丈でも、斯うしたならば如何かと思ふ、此度の共進會の實際を見ると、特許館は物が生きて居て、興味が多いから、見物人が停滯し、非常の混雜で、ゆつくり見る事の出來ぬのみならず、中には一部分を見る丈で、自己の營業に關するものでも、小器具の如きは、見落すものが少くなかつたらと思ふ、若し之を各館に分配すれば、觀覽人の數と觀覽時間の配付を均一ならしめ、當業者は各々專門の業に就き十分見る事が出來ると思ふ。

○長野から松本に向ひ東筑摩郡蠶病豫防事務所の母蛾檢査の狀況を見た、母蛾の檢査は女子が適當であらうとは前年よりの問題であつたが、今年から女子を豫防吏員に採用するの道を開かれたから、長野縣で直に之を實行して居る模樣は今度信濃支會で發行した、信州の蠶絲業、北に長野協賛會の發行した繪葉書で承知した、其實際を見て如何にもと思ふた、係員の話を聞いても、其成績が頗る良好との事である、他の地方でも、母蛾檢査の如き女子の手で間に合ふ仕事は、漸次女子に讓ることにしたら如何だらふと思ふ。

○松本といへば秋蠶を驅逐せざるを得ない、近年秋蠶の飼育に長足の進歩で、全國に於る秋繭の產額は十年前に比し三倍餘となり、昨年の如は其產額七十餘萬石に達した、將來少く蠶業に關する問題が由だらうと思ふた、愛知縣同會で可決した問題は、製絲業に關する特殊の金融機關の設置と、信越線碓氷峠に於る運搬の完全を急速に計ふる事を其筋に建議する事と、蠶業に關する金融機關の問題は、極めて重要な問題で、大に講究を要する者と思ふ、是が大會の問題となつたのは最も適當である、唯如何なる性質の機關を如何なる方法で設立すべきやの意見をも添へて、輿論に問ふて賞ひたかつた、問題丈を出して置くといふことも悪くはないが、大會を機會として其の方法に關する大體の意見をも交換しが適當ではあるまいか、大會は可成可決問題に對し其實施方法に關する案を備へて發表する事に致しては如何かと思ふ。

ぬ境遇であり、事が、勤勉の氣風を養成した一大原因でもあらう、此不便な土地へ、伊豆地方から石花菜を持來て寒心太を製造し、今日は一廉の物產となり年額三萬圓近く製造し、又除蟲菊は、鐵道より遠く山險道より、今日では大なる例はこんな工場として他に賣出して居る所を見ても極め勤勉の民である、現在製絲工場に居る者も自然地方人の勤勉ことが出來るではないか、現在製絲工場に居る者も自然地方人の勤勉又は他縣に比べて、大部分を占めて居るが、是等の者は實に金制度の奬勵と相俟つて、勤勉の氣風を見習ひ、一方には實に勤勉の生活を送り取るといふ主義でやつて居る美風を養ひ、多く働らいて多く取るといふ主義でやつて居る

之を要するに、諏訪製絲の第一歩は、同地方人の勤勉の賜であつて、引續きて今日の盛況を致した所以も此主義の實行が一大原因たるべしと信ずる、勤勉が成功の母であることは言ふ迄もないが、諏訪製絲の發達は、之を實際に說明する生きたる教訓ではあるまいか。

されど、近年は社會事物の變遷が急激であつて、風俗習慣も次第〳〵に變化するから、同地方の人々も十分注意を拂はねばなるまい。

まだ少く話して見い事もあるが今回は先此位にして置かう

料理のいろ〳〵

大日本割烹學會長 石井泰次郎

椀

天王寺かぶとうがらし味噌かけ

（原料割合）蕪大二箇、味噌百匁、砂糖五十匁、みりん酒四匁、水四匁、七色たうがらし小匙二杯

天王寺かぶは、洗ひて葉を切り去り、たて四つ切りにし、皮をむき、其一つを又四つ位づゝに切り、ざッと水をかけてあらひ、湯鍋に入れて湯煮するなり、なかば柔かになりし時湯を少し捨て、少しく鹽或は少しの醤油を加へ、柔かになる迄煮る、薄味をつくるなり。さて味噌は、普通の煉りみそのごとくつくり、たうがらしを入れて、よくまぜ合せるなり、柔らかになりたるかぶは汁をしたみて椀に盛り、上よりたうがらし味噌を、どろりとかけて出すなり。

皿

おかべ包（おかべとは豆腐のあだ名）

（原料）給四合、鹽四匁、豆腐小二つ、ごまの油二合ばかり、醤油五匁、みりん酒五匁

むきたる給を、水に入れ水をそゝぎて洗ひ、鹽湯にてゆッと湯煮し、（水四匁の割合の鹽湯）、煮に上て板の上にて、三つ四つ位づゝに切るか、又は少したゝきて置き、豆腐は前より、輕きおもしをのせて、水をしぼり置きたる物を、布巾に包みて御もよく水氣をしぼり板の上にて、薄刃庖丁又はさしみ庖丁などによくねり、そのねりたるを、大さじ一杯くらゐづゝ、手に取り、前のごまかくなしたる給を包むやうにして丸め、胡麻の油の煮たちたる中へと入れて、揚るべし、豆腐の水氣よく取れずして、油の中にてはねる時は、少しうどん粉を付けて、揚げてよし、

皆あげ終りたらば、鍋に醤油とみりん酒と同量に入れて火にかけてよく〳〵煮つめ、どろ〳〵となりし時、揚げたるものを入れ鍋のふちを持ちて、手早くころがし、直に器に取るべし、薄き汁にて長く煮て居る時はくずるゝ故、濃き汁にて手早く煮るべし。

菓子

（原料）道明寺粉二合二勺、水一合、砂糖百匁、水六十匁、水六勺、白角寒天一本半、水二合餘、鹽一匁。

道明寺ほしいひを、鉢に入れ、水を加へて浸しおき、三十分おきて、砂糖を鍋に入れ、水を加へて煮とかしたるを、絹篩にて別の鍋にこしこみおき又白角寒天を水にて洗ひ、水にひたして和かにし、かたくしぼりて、細かに切り、鍋に入れ水を加へて炭火にて煮る、少しも塊なくとけたるを、馬尾篩を砂糖の鍋の上にかけたる中にこし入れ、木杓子にて殘りなくこきこして共に炭火にてねり合せること十分餘にして、鍋をおろし、かきめぐらして少しさまし加減にして、ほしいひの鉢の上より少しづゝつぎ入れて合せて、みなつぎ入て後、ブリキ箱にながし入れ、水にうかして、二十分間の後、固まりしを、とり出して、四方か弗にかしうちに出すきりかたすべし。

この割合は、よしと云ふにあらず、ただ試みたるを記したるなり砂糖今少し多き方よろしきやうなり。いろ〳〵につくり試みて好みによるべし。これは巧みならぬ、素人菓子の一種のこしらへ方なり。

豚肉料理

◎ポークコロッケ（原料）豚肉百匁、じやがいも百匁（中位のもの六つ七つ）、玉ねぎ三個、メリケン粉、パン粉、玉子二箇、鹽、胡椒、バセリ

豚肉は、肉挽機械にてひくか、又はこまかくきり、よくたゝきて、鍋にラード又はヘットを少し入れ、火にかけ、とけたるところへ右の細くしたる肉を入れ、箸にてかきまわしてよくいため、肉の色のかわりし時鍋をおろし、皿にうつし置くべし、玉ねぎも上皮をむきてこまかにきり、鍋に油をひいたる中に入れて、やわらかになる迄いため、肉と共に皿に移し置く。

じやがいもは皮をむき去り、程よき大きさに切り、湯鍋の中に入れ鹽少し入れて柔かになる迄鹽ゆでにし、ざるに上げて水氣を去り、馬尾篩にてうらごしにするか又は檜鉢に入れてすりつぶし前の炒りたる肉及びねぎと共によく交ぜ鹽、胡椒を程よく加へて味をつけ右の割合だけのものを凡二十位に分ち、少し細長きかげんに丸め、メリケン粉をつけ、次に玉子のとかしたるをつけ、パン粉にころがし、パン粉を程よくつけ、ヘットの煮たちたる中に入れて揚げ、西洋紙などの上にとりて油をきり皿に盛り、バセリを洗ひて一房付け合せソースを添へて出すべし。

本邦蠶界の柱石

佐々木長淳翁（承前）

農事試驗場の新設

政府は何故に翁に急電を發して中道に呼戻しきや、是れ吾人の早く聞かんと欲するところなり、當時工部省働工寮は其名を働寮と改むると共に工部省より離れて内務省に屬せり、而して新に内務新宿に農事試驗場を設け養蠶製絲の研究を爲すの議成りしより、翁を以て其任に當らしめんとし、さてこそ急電を發して之が歸朝を迫れるなりき、翁の歸朝するや直ちに働寮農事試驗場養蠶掛を命ぜられたり、翁は農事試驗場養蠶掛に補せられ、新任以來着々其工事に着手し、先づ場中の大蔵を開拓して畑となし、之れに植うるに日本清國各種の桑樹を以てし、十種より之が栽培者を募りて其培養に當らしめ、又別に養蠶室として上下各五室を有する二階造を建造し、一室二名宛とし、日本從來の養蠶術に長じたるもの約二十名を各府縣に募り、明治七年の春初めて養蠶術のかたはら應繰製絲の試驗に從事せり、飼育の方法は之を正熱育温暖育清涼育の各種に分て行ひしに、何れも其結果良好なりしを以て豫定の結果を收め得たり、此飼育により實際蠶兒に適當なる温度は蓮氏七拾度前後にして、三十七八日間に孵化せしめ其上蔟せる生繭より抽出せる絲は八百回に達せり、翻って最良の法なることを確認し、之を公にしたるに年一年各府縣に於ても此標準に則ること來り、遂に今日に於ては此標準に依らざるもの殆ど無きに至れり、此等當時翁の研究は蓋しく其歩を進めて、養蠶に關する學理及實際に伴へる凡ての事項は悉く翁の解釋するところとなりしが、殊に繭蛆に就ては未だ多く世に知られざるに翁は自己の研究せるところを發表して從來の誤想を打破せり。

農事試驗場には又之に附屬せる製絲場あり、是れ明治八年の區別して森田真をして之が主任たらしめ翁自ら之を監督して專ら試驗と傳習とに意を用ひたり、當時採用せるものは伊太利式の最も進歩せる機械其他各種の製絲機械、蒸繰殺器、貯繭庫等にして、其成績亦養蠶と相俟ちて頗る良好なりき、此故に農事試驗場、業界の一覽鏡を如せりと共に翁の名は漸く世に高く、諸國の蠶絲業又翁を慕ふに至れり、翁の德や夫れ孤ならざるかな。

絹絲紡績所の創設

翁の驚に堪國博覽會參列の折、養蠶、製絲の學術と共に紡績の術を修得し歸へりてより、盛に我國に斯業の有望なることを唱導し、以つて之れを當時に紹白したる爲明治八年以後は絹絲紡績所設立の議、翁の衷情遂に其果を結び、翌明治九年三月群馬縣美土里村の地を相して一大絹絲紡績工場を建築するや、翁乃ち紡績所長金勳を拜して事業の進捗に努めたり、時の内務卿大久保利通公、密に翁に謂って曰く、本工場は今政府之を經營するも、後日必ず之を民間に佛ひ下くるを以て後日の模張に資へざる樣設計すべし、翁謹んで命を拜し蒸汽、水車、紡績等の諸器械等に十分意を留めて之を採來にし、大にしては蒸汽器械堀付場の如きは、地層を數尺の深さに堀り、下部より練瓦石を以つて積み上ぐる等此工費のみにても數拾圓を費せり、水にしては屋根瓦の如きは一枚づゝ釘を打付たり然れども其他の事務所の如き何時にても隨意改築せらるべきものは貫素を旨として又敢て願みざりき。

日夜工事を督して、碌梁正に備はらんとして、明治十年伊太利美國府に開設せらる、第五回萬國養蠶公會へ參列の爲なり、翁甚しく、面目を施し手を拍つて之を快とせしが、驚つて現時の狀を觀れば自己が多大の抱負と、重き責任とを以て起せる紡績所の工事は今正に半なり、養蠶公會は是れ世界の蠶學者を集むるもの、不省後に蠶を以て列國を凌しむるあらば悔も亦及ぶべからず、如かず辭して工場の大成を期せんにはと、依つて事由を具して參列を固辭す、翁乃ち紡績所の工事は今正に半なり、養蠶公會は是れ世界の蠶學者を集むるもの、不省後に蠶を以て列國を凌しむるあらば悔も亦及ぶべからず、如かず辭して工場の大成を期せんには

島根縣四伯耆四伯耆蚕業講習所

官命を拜し、翁乃ち紡績所の工事は今正に半なり、養蠶公會は是れ世界の蠶學者を集むるもの、不省後に蠶を以て列國を凌しむるあらば悔も亦及ぶべからず、如かず辭して工場の大成を期せんには一日翁を我邦に招き、我國蠶界の現況を以てし、工事の纏續は之を措いて又他にあるべからず、翁は皇國の爲萬腕を揮して此重責を果ぐるに、翁感目を久しうして遂に意を決し、命を拜して皇國を恥じざらんことを誓へり翁の再渡果して如何なる結果を齎しきや。

皇國を愧しめざる翁の誠忠

翁や絹紡績所建設の重任を擔ひ脱するを得たるも、公會參列の重任は更に又翁の頭上に落ち、來りて其一層其重きを加へたり、重きを加へて其の任を知り、其の任を知りて之を懷にし、遂に横濱より發して伊國に航せり、嗚呼太平洋の一波一波、印度洋長を渡るところ、乃ち熱帯遂に十五ヶ條を染出し、以て公會の提議となさんとし、萬一の失敗を期して之を懷にし、遂に横濱より發して伊國に航せり、嗚呼太平洋の一波一波、印度洋

の朝暾、落暉、果して翁が旅情に如何の感をか與へし、多忙多事の内に重任を負へる翁の感や果して如何なりし。

彼の國に着して公會に列すれば、滿堂皆之れ世界に名ある蠶學者のみ、大博士パストール氏亦此席にあり、開會のときより翁は普通席にあること數日、かくて日本代表者の陳ぶべき順となり翁は嘗つて徹夜して案じたる十五條の内の一ヶ條即ち日本の蠶病名と伊太利の蠶病名との比較對照表、及次の一ヶ條即ち蠁蛆生態の説明書及精圖を公會委員スサニー氏の手許迄提出し、尚前二ヶ條を以て足らざるときは、殘餘の十二ヶ條を提出せんと覺悟せしに、幸なる哉上の二ヶ條は共に歐洲蠶業界に非常の益を與ふるものなりとの高評を博し、殊に佛の大博士パストール氏の如きは多大の賞賛を與へられたり、茲に於いてか翁の名は忽ちに席の一隅より一隅に紫雷の如く反響し、日本蠶學の進步に驚かしめたり、此結果從來普通席に置かれたる翁は一躍して役員席に入るの榮擧を擔ひ爾後殆ど筆紙に盡さゞる優遇を以て無事公會の任務を了せり後ち參列者一同スサニー氏の別墅に招かれて園遊會の催さるゝや、席上翁は伊國に於ける純粹の微粒子病蠶の一覽を求めしに、スサニー氏は直ちに快諾しアルコールに浸漬したる同病蠶を示しゝより、翁は首肯一番直下に筆を振つて之を寫生し、記念の爲め日本へ持歸らんとてパストール博士其他列席の名士に示しゝに衆皆其技術の精妙なるに服し、非常の喝采を博せり、同地の新聞は直ちに之を筆して翁の學識多才を賞贊して措かざりきといふ。翁にして始て之を望むべし、之豈に翁が皇國を惚しめざらんとする誠忠の致す處に非さらんや。

顯微鏡術の應用

是より先明治七年新宿農事試驗場に養蠶部設置せられ、翁其掛長となるや、製絲の術と共に心を養蠶法に潜むと同時に、嘗つて明治六年歐洲にて學び得たる顯微鏡使用術を應用すべき顯微鏡檢査所を設置し、蠶の微粒子檢査を開始し、頗る好成績を舉げたり、時々三條、岩倉、大久保の三卿親しく車を試驗場に寄せて顯微鏡檢査の實況を視、いたく賞贊したりといふ、何事にも卒先して斯道の益事を圖る翁の面目亦羨むべきかな。

禁裡の御養蠶

明治維新の初政を享け、百方よく經營の任に當り、微を察し、大を算し、夙に殖產興業に意を用ひて治世の基礎爲めに強固ならんとせしに惜しむべし一世の奇傑大久保卿の計を傳ふ、蠶絲の事是より又昔日の勢を示さゞるに至れり、即ち此時より内務省の方針一變し、十二年五月新宿試驗場は宮内省へ轉ずるに至れり、之れ蓋し農桑は衣食の根元、民命の係るところにして、人世一日も缺べからざる要務なるを以て、恐れ多くも皇室に於て、百姓に先ち、御親蠶せさせ給はゞ自ら下萬民の徹底し、咸奮以て殖產の道令せずして行はれんとの有り難き御趣旨に出でたるものにして、翁も是と同時に宮内省へ轉じ尚養蠶を以て誠忠に擢んでんとを期したりしが、如何なる御都合やおはしけん、同場は其後廢止せられて、植物御苑となり、養蠶も亦遂に御見合と爲れり、翁事の成行にいたくも驚きたりしが凡べて天命と畏みぬ。

然るに時恰も一方青山御所に於て、皇太后陛下の御思召ありて御養蠶を遊ませ給ふことゝなり、翁其掛を拜命し、禁苑内に新に御養蠶場を設け、原紙十枚、成繭百貫、羽二重百反の御豫定を以て年々織がせらるゝことゝなり、尚別に陛下の大奧に於ても少しづゝ御手づから御養蠶せさせ給ひ、時々翁を召させられて御下問あらせられぬ、かくて勤續すること明治十九年に至れり。

改良熱の勃興

當時蠶業界の智識は尚開發せられざるもの頗る多く、學理の應用の如きも未だ其緒に就かず、特に内藤新宿なる試驗場の廢止せられたる後は、只三田育種場内に於て纔に養蠶課を設くるのみにして、官の獎勵、民間の施設共に足らざるもの多く、進步の見るべきもの更になかりき、翁之を見て切齒扼腕、蠶業の衰頽に歸せんことを慨し、如何にしても蠶業の挽回を計らんと日夜心身を勞する折柄、恰もよし、當時林友幸、渡邊洪基、大島圭介等の同志によりて組織せられたる萬年會（曾て該會設立の際には宮内省より金千圓を下賜せられたるとあるほどの會なり）なるものあり、事務所を京橋區西紺屋町に置き、專ら殖產興業に關する一切の研究を爲すを以て其目的とし頗る實績あり、翁は當時尚公職にありしにも不拘明治十六年三月自ら進んで同會に加はり、新に會中に蠶事通信部を設置し、養蠶に關する一切の事項につき自由に質問せしめ、之に對し懇切丁寧なる應答を與へ、之を各府縣に應答せしより、忽ち全國に喧傳せられ、質問机上に山を爲すの盛況を呈するに至れり、翁之を見て大に喜び連日徹宵して之か應答に任じたる結果、效驗全國に反響して養蠶改良の聲漸く諸處に起り、群馬、埼玉、福島、宮城、愛媛、山梨、福井、滋賀、靜岡、長野、東京等の各府縣を初めとして、各地より翁の出張講話を懇請し來るもの門前塔を爲すに至れり、翁勞苦を厭はず東奔西走して之等の希望を容れんことを努めたるより、席殆ど暖まることなく、明治十八年の頃に至りては蠶界の形勢全く一變し、研究、又は調査を目的とせる團體各所に起り、翁か積年の苦心は漸く一道の光明となりて時勢の暗雲を劈いて迸しり、燗々として明治の蠶界を照し出せり。

翁は是れ明治蠶界の建設者

中途武を捨てゝ蠶界に志しゝより、朝夕其研究を怠らず、洋の東西に來往して世界の學術を移し、舊來の蒙を啓きて新進の學理を適用し、外は日本蠶業の進步を知らしめ、内は日本蠶界に、大改新を促し、鞏固なる基礎の上に明治蠶界を建設す、嗚呼翁の生涯は之れ殆ど蠶界建設の爲めに費やされたりといふも敢て浮言にあらざるべし。其各地に出張して子弟を教養すること正に幾千、翁の功績や夫れ不朽なりと謂ふべし。今日蠶絲が日本の富力の大半を占むる所以を繹ぬれば之れ皆翁か誠忠の餘沫のみ、吾人は明治蠶界の建設者として翁の功績を長へに傳へんと欲す、著書に、蠶事摘要、蠶業講話事記、巡縣蠶桑講話、蠶の夢、蠶務問答等あり、穗燈の下一本を繙かば以て翁か精力に接するの觀あるべし、天高肥馬を吟じて白露桑葉に輝くの秋吾人は改めて翁の建康を祈るや切なり。

（了）

韓國群山地方の蠶業

在韓國釜山港
通信委員　小田宗孝

蠶繭輸出の嚆矢　當群山地方蠶業の發展を計らんが爲め、韓國鵝業模範場群山出張所の蠶兒飼育　同出張所に於ては本年度に於て春夏秋の三期試驗的飼育を爲たるに成績頗る佳良にして夏蠶の如きは十數枚の蠶種（枠製）を製造し、之を日韓人間に無償配布を爲し飼育せしめたるに、孰れも良好なりとの報告を得たりと、又同出張所にては明治年度春期無償配布用として春蠶種（小石丸）も概製三十枚程を製造し、之れが準備を爲し居る由にて、既に其配布方を申込むもの續々あり。

桑樹接木に就き質問

岩手縣
通常會員　馬場龜一郎

（一）柳の砧木に桑を接ぎたるものの桑葉は其成分に變りがありませぬか。

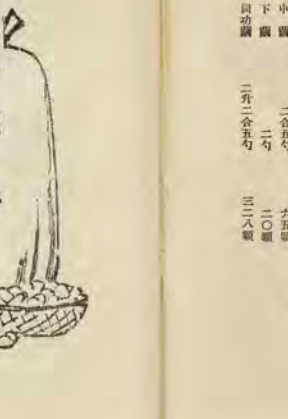
（二）右の桑葉を蠶兒は嫌はぬものでせうか。

（三）鼠害豫防として（一）の方法は効果のないものでせうか。

農學博士　川島勝次郎

答

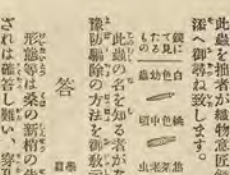
柳の砧木に桑を接ぐことは極めて困難である。普通の接木法に據る時は一時發芽するも枯死するもの多く、實用に適せず而して試桑葉の成分、鼠害の有無等に就ては調査したことがないけれども他の接木の例により之を考ふれば桑葉の成分は別に影響はないであらう。從て蠶兒の之を嫌ふことはないであらう。



桑園の害蟲驅除に就き質問

愛媛縣 通常會員 富田多門

近年當地方の桑園に處々に桑枯虫發生し、非常に害を受けて居りますが、此桑枯虫は六月末七月上旬頃より發生を始め秋蠶後より落葉前迄の間に盛に繁殖し蟲の色は初は白色にして齢のやうであつて、變態する時分は桃色と成り、又蛹と成ては焦茶色と成り、而して後脱皮したやうに跡があります此蟲を捕者が織物意匠御考を用ひて檢査したるもの二三の圖を添へ御考え致します。



此蟲の名を知る者がない、之は蛴乳甲蟲とは違ひますか、豫防驅除の方法を御教示下さい。

答　學藝委員 土屋明石弘

形狀等は桑の新梢の先端を害する蛴螬の如きも實物を見ざれば確答し難い、蛴乳甲蟲とは全く別種である若し蛴螬の害とすれば、石油乳劑二十倍液を盛に布るか石灰乳を使用するがよい。

蛹油並木灰に就き質問

山梨縣 通常會員 武井定市郎

蛹油に就て左の件を伺ひたい。

(一)製絲後の蛹より蛹油を製す方法並びに一貫匁の蛹より得らるゝ分量。

(二)蛹油の用途及價格。

(三)乾蛹(油糟)の化學的成分(分析表)及農產物肥料としての効價。

(四)本邦に於ける搾油工場の重なるもの一、二、及びその製造並びに販賣價格。

(五)木灰の化學的成分。

答　學藝委員 辻暢太郎

(一)、繰絲後の蛹には其大部分蛹殼を附着するを以て、先つ之か除去を行ひ、後其蛹を日光にて乾燥し、普通之を干蛹と稱して居る、從來行はれたる蛹油の搾取は壓搾法によるものが多い前述の干蛹とならしたるものを最初粉粹し又夾に通常の俵を使用して之を蒸し、木邦舊來の楔壓搾器又は水壓式壓搾器を以て油を搾取するが便利である、但し蛹を粉碎するには「ロール」又は臼等を用ゆるものである、斯の如くして搾取せらるゝ油は干蛹一石より約四升位にして此重量は一貫四百匁位である、而して干蛹の重量は約拾貫匁位である。

(二)、蛹油の用途に就きては現時に於ては多く不明なるも此も多量の遊離脂肪酸を含有して、且つ其融化量の大なるより推量すれば先づ石鹸製造の原料となすべく、最も有望なるならんが之比較的固形分に富むを以て蠟燭の原料にも使用し得らるゝであらう、價格は拾貫匁に付壹圓八十錢乃至四圓位である。

(三)乾蛹は窒素一、〇〇二四%磷酸一、二八%加里〇、四九%を含有するが故、窒素肥料として充分の價値を有すれども脂肪に富めるを以て木灰を混じて施用せば其分解を促すの効あるであらう。

(四)長野縣諏訪郡平野村小口重四郎同縣同郡宮川村矢ヶ崎の某氏は重なるものとし、前者は肥料販賣業者にして、後者は油販賣を目的として居る。

(五)木灰は左の成分を含有する(千分中)

	水	燐酸	苛性加里	炭酸加里	硫酸加里	燐酸	硅酸	石灰
有機物								
豆粕	一二	四一						
硅酸	三二	一五	一二	一二	三九	〇六		
燐化鐵及第土	二七	一七						
石灰	三〇三	貴	貴	貴	貴	貴	貴	六五

秋蠶種に就き質問

山梨縣 通常會員 田邊巖

會報第百九十三號問答欄秋蠶種の洗滌に就き土屋先生は井戸水のことを述べられたが、左の件を伺ひたい。

(一)井戸水と河水とは何れが宜しいでせうか。

(二)秋蠶種は風穴種も洗滌して構ひませうか、若し構ふとせば出穴後幾日目位に洗滌して宜しいでせうか。

(三)普通秋蠶種は產卵後何日目位に洗滌し又其洗滌時間は何時間位を適度とするでせうか。

答　學藝委員 土屋泰

(一)、井戸水は清らかなる水なれば、河水でも井戸水でも宜しい、併し井戸水は種々の物質を溶解することがあるから、清き河水があれば其方が宜しかろう。

(二)、風穴種は入穴前則ち春蠶時と同時に洗滌するが、最も安全である、若し忘れて其時洗はなんだならば、出穴後直ちに洗ふがよい、浸水時間は五分間位より長くてはいかぬ生種の方なれば產卵後三日目以後七日位の間に洗ふが宜しいと思ふ而して產種を水に浸す時間は前に同じい。

人造蠶種貯藏庫の件に就き質問

茨城縣 通常會員 山崎喜一郎

(一)七月下旬迄華氏五十度以下の溫度を保ち千枚以下の蠶種を貯藏し得らるる石造庫の造方(氷穴にても良し)を御明教ありたし。

(二)秋蠶種を風穴に貯藏するには、華氏何度位の溫度が適當でせう、又害の程度を伺ひたい。

答　學藝委員 土屋泰

(一)蠶種貯藏所として七月下旬迄で五十度以下の低溫を保ちたいとするには、天然に冷風の吹き出づる所謂風穴なるものを探索し、之に多少の人爲を加ふるより外ない、否らざれば冷藏庫を建設して之に依れば充分なれども、小賣本ては

出穴ないものである。

(二)風穴内の温度が四十五六度に達せば爾後一週日以内に出穴するを良とする、否らざれば幾分の被害を免れないものである。

原々種選定會

去月二十二日滋賀縣農會事務所庫上に於て開催せし京都府滋賀兵庫岡縣の聯合蠶種元原種選定會に於て出品したるもの京都七點、滋賀七點、兵庫三點計十七點なりしが、特殊に於ける聯合府縣の蠶種一定か目る目的にて同一品種のものに飲き四五ヶ年繰糸飼育の上原紙選定んなすことに決し、向明年より京都府は天田郡上夜久野居相勝治氏城丹蠶業講習所の蠶種に飲き滋賀縣は蠶種同業組合長横田隆治氏及び縣立原蠶種製造所の蠶種に飲き、兵庫縣城に崎郡蠶種製造販賣組合及美方郡同組合の蠶種に飲き、夫々京都は城丹講習所、滋賀兵庫岡縣は原種製造所に於て飼育か為し明年收繭の一升五合宛持ち寄り繰糸試驗かすことゝし、明年の選定會開催地か兵庫縣に定めたりといふ。

横濱市場

十月中に於ける横濱生絲市場の光景は其初旬に於て大勢甚しく不況五圓又十圓と下落し日に人氣沮喪の狀態なりしが、十日前後に至り氣配稍引締り價格亦昂進の趨勢を示しゝも十六七日頃より再び沈靜の狀態に陷りたり、然れども新絲以來非常の買控へとなりたる爲、昨年同期に比し、約五千梱内外の買不足なりし歐洲筋は此機に乘じて漸次之を買ひ埋めんとし米國筋亦之に買ひ漁ひしを以て、下旬の市場頓に活氣づき二十日より月末迄の手合高一萬一千個以上に達し、隨て相場の知きも益昂進して上一番九百二十五圓より、月末には九百三十五圓を唱ひ近年稀有の現象を呈したり。

而して客月中に於て最も高價に賣行きたるは靜岡縣天龍川社細の一千〇五十圓にして、最も低價なりしは福島縣三馬折返の七百六十四圓なりとす、今左に本年一月以來の最高價と前年の夫れとを對照すれば左の如し。

生絲最高價月別前年對照表

明治四十一年		明治四十年		價格の差
一月	形縣石黒部製絲	一、一一〇	山梨縣矢島組會太	一、三一五
二月	山梨縣矢島組會太	一、〇四〇	山梨縣矢島組會太	一、三〇〇
三月	山形縣清盛社太	九五〇	岐阜縣金森製絲	一、四〇〇
四月	愛知縣日登社細	九一五	埼玉縣羽村館	一、四五〇
五月	靜岡縣正木製絲細	九四〇	群馬縣交水社煙糸	一、四五〇
六月	山梨縣甲南社細新	一、〇〇〇	山梨縣矢島組新	一、四三〇
七月	山梨縣諏盛社太	一、〇三〇	埼玉縣森澤製絲細	一、四一〇
八月	群馬縣碓氷社羽子板	一、〇六〇	埼玉縣森澤製絲	一、四五〇
九月	靜岡縣六鑑社細	一、〇五五	靜岡縣城南社細	一、四七〇
十月	靜岡縣天龍川社細	一、〇五〇	山梨縣甲南社細	一、四六五
		埼玉縣森澤會社細		四一五

倘左に本月中の生絲集散種別表を掲げて參考となさん。

明治四十一年十月自一日至三十日生絲集散日別表

	入荷	手合	賣了	引渡	輸出	地方廻送	國名	社名	別種	最高價	最低價	摘要
一日	一、二二七	三九九	四七七	一八	—		七丹波	東上奥社細	器械太□	九七〇	八九五	大勢不況続し殊く又十圓安を致したれど買人なく値と手巻のなき方面となれり
二日	一、〇五三	一九二	七七九	三六	二、六三九		一〇	上野碓氷社羽子板 岩代共同三馬	器械中○ 繭細× 座繰 折返し+	一、〇二〇	七六〇	三ッ蔵は樋りなけれど絲々商談なく只安人氣に流るゝのみなりし

倘左に生絲集散日別表を掲げて參考となさん。

	持越	入荷	賣了	地方廻送	繰越
器械	二五、一三二	二四、〇五三	二〇、八〇七	八四七	二七、六三一
座繰	五五七三	五、六八九	二三二	七、八四二	
折返し	二、五〇六	三、一八八	九八	三、二一七	
繰糸	六五	一、七二三	三〇	一五七	
合計	三三、三七六	三一、六三七	二四、九五九	一、二〇七	三八、八四七

備考

一、夾中原位個は九貫目を指す

二、持越とは客月より本月に持越したるものにして本月一日の調査絲結とは本月より繰月に繰越すべきものにして本月來日の調査に係る

三、前月分の繰越と其數一致せざるは商談中のものありしに依る

四、繰越以外に商談のものありと知るべし

五、實子中米國に輸出せるものは一萬〇六百八十四袋にして歐洲に輸出せるものは四千百七十八袋なりとす

三日	一、六六七	四八四	四九四中	三三	五五一	二五	武藏 / 信濃	牧紳社御殿 / 常田館	□×	九五〇 / 八八〇	日に増し不人氣にて安値待注文口へ前直より十圓安にて取扱折合有りし
四日		—	—	—	八八二	—					日曜日
五日	一、九二〇中	五八四	七一九中	五五	—	五四	甲斐 / 岩代	廣盛社秋 / 共同三馬	+□	九九〇 / 七七〇	安直に應じ細筋物少しく手合得たるも新規は更になく夕景に遂に十圓安を現はすに至れり
六日	九一四	四五八	八六五	七二	—	七〇	武藏 / 岩代	山丸製絲 / 共同一馬	+□	九三五 / 八三〇	直段によりては多少買氣の向あれど捗々しき折合見ざりし
七日	一、二六五	四五四	四六三中	四五	六五二	八三中	岩代 / 信濃	製精社 / 富國館	□□	九五〇 / 八七〇	變りなく弗々ながら當用口へ商內ありし
八日	一、一〇七中	一、〇六八中	九三八	二六	—	一六八	下總 / 岩代	小島館 / 共同二馬	+□	九四〇 / 八〇〇	兩三度買氣ありて午後は品により十圓高を示したりし
九日	八四七	一、四八八	九八三中	一一五	—	六三	甲斐 / 信濃	金鳳社秋 / 大和館	□□	九七五 / 八六〇	續て買人氣となり氣配頓に締り太一番物十五圓高にて其他適當品太細りも弗々出來せり
十日	八六二	二、〇八四中	八五七中	四六	一、一七六	五二	美作 / 信濃	津山製絲 / 日本社銀	□|	九六〇 / 八五五	米國向兩三度買氣を呈し上品南部產絲に大手合ありて信州上一番格九百圓なりき
十一日	—	—	—	—	五七六	—					日曜日
十二日	九九〇	五〇六	一、一二八中	—	—	六二	上野 / 信濃	甘樂社來金 / 信光館	□×	九三〇 / 八五五	當用口へ弗々商ひ出來し相場保合なれど氣配落付工合なりし
十三日	一、六六九	一九八	八九八中	二五	五四八	三五	尾張 / 信濃	愛知製絲 / 信龍館	□□	九六五 / 八六〇	來向も頓挫の姿となりて商變なく歐洲向の如きも續て沈靜なりし
十四日	一、〇四八	一三九中	一、五九六中	—	—	四〇	甲斐 / 信濃	矢島組金櫻 / 丸茂製絲	□|	九八五 / 八六〇	引續き沈靜にて更に商談なし
十五日	一、二五〇	二八	九一二中	五五	—	五四	上野 / 岩代	甘樂社握手 / 共同二馬	・×	九八〇 / 八二〇	依然商談なく一般に見送り姿にて續て面白からざりし
十六日	八六五中	三〇一	一、〇八二	一二五	—	一二	陸前 / 岩代	佐秦製絲 / 共同二馬	+□	九九〇 / 八〇〇	細筋物多少手合出來せしのみ漸次不味を加へ居るものゝ如し
十七日	二、八五八	—	—	—	—	—					大祭日
十八日		—	—	—	—	—					日曜日

十九日	—	一五九	八一三中	五三	—	一七	相模 / 三河	本郷館 / 小栗製絲	○□	九八〇 / 八九〇	細筋物兩三口取組見たるのみにて休日前に引續き不捗成行なかりし
二十日	一、四二九	六七一	一、一五一中	二三五	一、〇八二	—	上野 / 岩代	下仁田社織物 / 共同一馬	+×	九八〇 / 八二〇	弗々手合出來せしが信州上一番格前直より十五圓安にて何分不引立の成行なりし
廿一日	九四〇中	七五四	九九〇	七七	—	四八中	伊豆 / 岩代	城南社 / 共同一馬	+	九六〇 / 八四〇	歐洲向は弗々手合出來したるが米向は見送り居り相場は變りなかりし
廿二日	一、一三〇	一、〇〇〇	六〇七中	一九	—	二四	甲斐 / 信濃	金鳳社 / 東英行	|□	一、〇〇〇 / 八八五	歐洲向は引續き弗々取組米國向も多少加れる爲め相場十圓高に取進みたりし
廿三日	一、一八〇	一、五〇一	九一五	—	一、〇七三	三七	上野 / 岩代	碓氷社羽子板 / 共同姫達磨	+□	一、〇一〇 / 八六〇	當用口は凡て商談續け氣配小堅く相場は五圓高成行なりし
廿四日		九五四	一、〇一三	三三	八五九	五三	信濃 / 上野	六文錢絲 / 碓氷社鶴	×□	一、〇〇〇 / 八六〇	相場保合にて當用口へ相應の商ひ出來せり
廿五日	—	—	—	—	—	—					日曜日
廿六日	一、九四一中	一、一一九	一、三一六中	二八	六九一	四八中	甲斐 / 岩代	甲南社 / 共同一馬	+○	九七〇 / 八四〇	休日明け續て賣行き相場五圓高に引締れり
廿七日	一、一八五	八八六	八七一中	一八	—	四六	陸前 / 信濃	旭館 / 尾澤組	□|	九二〇 / 八八五	變りなく當用口へ引續き取組を見たり
廿八日	一、三八三	七七〇	一、〇三三中	五八	一、二一九	五六	甲斐 / 信濃	金鳳社 / 山又製絲	□□	一、〇一五 / 八九〇	前日同樣變りなく續へて商ひ出來せり
廿九日	八七二	六九七	一、六五九	一一七	—	六四	遠江 / 岩代	天龍川社 / 共同一馬	+○	一、〇五〇 / 八六〇	當用口へは商談連絡し適當品太細とも小堅保合居れり
三十日	一、三三三中	二、〇六五	八八六	九〇	—	—	甲斐 / 信濃	矢島組金事 / 信英社	□|	一、〇四〇 / 八九五	太筋及細絲とも相場取組ありたる爲相場十五圓より二十圓高を示したりし
卅一日	七九八中	一、一八四	一、五〇六	九四	一、二四九	七七	上總 / 信濃	南總組 / 光進館	|□	一、〇一五 / 八九〇	續て相應の商ひ出來し相場又々十圓高を示したりし
合計	三一、六三七	二〇、二四三	二四、九五九	一、四七三	一四、八五四	一、二〇七					

尚左に本年一月以來の生絲集散の絲況を明かならしめん爲前年對照表を示すべし

絲況

生絲集散前年對照表

年月次	持越	入荷	賣了	繰屑	繰越	輸出	出清
四十一年一月	四四、二〇〇	一〇、九七、二	九、八五五	三二四	四四、三九三	五、九六六、二	五、九一、〇八一
四十一年二月	四四、三九三	四、八七七	一一、四六、二	一一七一	四三、八八〇	五、六六、二	五、九二、五四三
四十一年三月	三四、八八〇	一〇、〇九四	九、六七〇	二〇四四	三一、五七六	六、四七、九	六、九一、〇九一
四十一年四月	三一、五七六	一一、三一八	一三、四五五	二〇六六	二三、三七六	七、三六二	六、九二、五四三
四十一年五月	二三、三七一	九、五七四	一三、二八四	二〇〇四	一七、一四四	七、一四四	六、八二、五八九
四十一年六月	一〇、八一〇	二六、九九六	二、六一〇九	二、四三五	一一、三九五	八、五五〇	七、一七四、二三一
四十一年七月	一一、三九六	二六、七三〇	一九、九二四	一、六四〇	一七、二三九	一〇、五六三	一〇、三五九、五一四
四十一年八月	一七、二三九	二七、八三八	一九、九八三	一〇八一	二三、六〇四	一一、四四六	一一、七三八、〇八〇
四十一年九月	二三、四六〇	三一、六三七	一八、四六八	五六三	三二、二六八	七、二三〇	七、九四四、五七七
四十一年十月	三三、三七六	一七〇、八三〇	一五二、六七〇	一一、二〇七	三八、八四七	一四、八五四	一二、七九一、八〇八
計		二六、九六九	一三六、二五六	一〇五、八四五		八五、五五二	六九、五六四、四五七
四十年十月						七、八四四〇	八二、八五九、七七七

里昂市場（九月十六日發）

當九月に市場も少しく賑ふならんと豫期せしが、意外に取引は一向に出來ずして相變らず矣窒ことのみ多し、殊に盛夏細物は左迄にあらざるも普通品只下に執れも窒入淋くして、直段の下押しは尚更に買入をして踏倒迄延せしめたる姿なり。

「春蚕悲話」去る七月中一と度は法蘭西を記みたるも、其後は一向に氣乗りなく、傷かに日本及廣東の生糸のみ、買人が實績の割に迫られて取入るゝに過ぎず、而も其直段に執れも低落のものゝみなりし。

本週歐州糸の中出糸品は左の如し。

伊太里

ピエモンテ

一等十二—十五　一等十四—十六

仏蘭西

ヴェラ

四十七—四十九法　四十八—四十九法

忠里

小一等九—十一

又窓絹豆生絲の中日本出は左の如き出來値あり

器械	一等半九—十一
同	一半九—十二
同	一半十一—十三
同	一半十三—十五
掛田	一馬
同	二馬

尚同地駐在帝國領事よりの電報次の如し。

生絲市況前電と同じ（十月十七日發電）

羽二重四十一、二法見當

參照　前電とは生絲依然引立たず秋繭（？）四十一法見當羽二重見迄引委四十二

四十三法

四十九法半

四十四法

四十三—四十二法半

四十法半

三十九法

法見當

紐育市場

組育絲況に於き同地駐在水野總領事よりの電報左の如し。

生絲前報後引續き相場強氣の爲め漸次買進りの模様（十月十三日發電）

生絲市況依然靜か大秋創造期確定する迄は差したる移動なかるべし番茶相場物界の景況に寄しては一般に寂しきことな聞得するが如し（二十日付電）

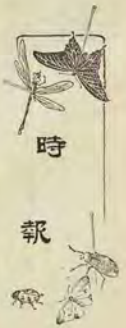
生絲市況曖昧なり但し屋の手許は既に微（？）模様にて帝國の模様にて中には明年四、五月頃の先走文なしたる向もあり（廿七日付電）

生絲は横濱倫敦に進行着行き前や宜しき方模様にて迫々機運の運轉を増加する模様なり（十一月二日發電）

上海市場

九月中の當地相場は無為寂寞四箇月後始百兩に付き三百二法乃至三百法半を唱へ前月に比すれば百兩に付き三法乃至四法方の下落なり生絲の輸出に比極て紆閑なりしに人物を拘らず、生絲市場は其に閑散を告げ九月中の實績は僅に白絲二千四百俵黄絲千九百俵に過ぎず、特に白絲は其不振の度著しく其商高は前月より二千七百俵を減少し前月の半數に一減たるの姿なりき、斯く市況沈靜の所以は歐米市場在荷蘭間の取當地外商より買進まるに因るものなり、是に於て市價自然下落し前月末七月絲金銀鱗等一俵に付き四百八十二兩半迄で騰上りもしれども、昨今は再び四百六十兩に下り其他黄黄絲機械絲及粹蠶絲共三兩乃至十兩方騰落するに至れり。

前述の如く市況沈靜のため輸出も自然振はず特に九月中の天候惡しく不良なり殊に一層輸出を減少せしめたり、即ち本月中の輸出高は白絲三千八百十六俵、黄絲二千六俵、惡絲千七百二十六俵、合計五千八百七俵にて前月より九百六十四俵の減少なり、此中惡絲は三百三十九俵黄絲六十五俵の増加を示すと雖も、白絲は千三百六十八俵が減少を示せり。



會務錄事

靜岡支會發會式並に第一回品評會

本會靜岡支會は李家支會長初め支會役員並に本會々員諸氏の熱誠よく沈睡せる斯界の意氣を挽回するに勉めんとし其第一着手として第一回品評會を開催し之を動機に支會の基礎を確定し其活動上共に本會々務の擴張を計らんとて豫てより日夜東奔西走奔つて精力を之に集中するところりあしが、愈々新募集會員豫定數一萬の半數に達するや、總裁殿下の台臨を仰き奉り支會發會式を擧げんことを懇望し來れるを以て、松平會頭には此旨　殿下に懇請し奉られたるが、殿下は深く御滿足の思召にて御嘉納あらせられ、長野市に開ける本會臨時總會より御歸京あらせられたる後、間もなく鹿兒島に成せられ、其御歸途台臨在らせらるゝことに御決定在らせられたるを以て、支會役員並に會員の感奮一方ならず、無上の光榮を荷ふを得るには尚會員の募集に勉めさるべからずとて一層奮勉し殆んど當事者ならでは推察し得ざる迄に奔走し、遂に當日迄に一萬四百九十餘名の會員を募集し、本會割當の一萬を

超ゆることと實に四百九十餘名の多きに及び、一舉豫定數を超え範を全國に垂るゝに至れり。

今や國本培養の才を忽諸に附すべからざる時に當り、地積の廣大蠶業の擴張すべきあり、富士裾野の曠野には遺利の拾收すべきありて、大に靜岡支會の發展を要すべき時に當り、這般十二分の活動を見るを待たるは實に邦國の寿喜べき現象にして、支會長の指導宜しきと役員並に會員諸子の奮勵感謝するに堪へたり、夫れ五十萬石の產繭を以て邦國蠶絲業界の覇權を握れる長野の大を以てして尙一萬五千を出でざるに、其產繭十萬石に及ばざる靜岡にして此盛況を見るに至らんとは、本縣斯業の前途洋々寒海の如きものありと謂つべきなり。

總裁殿下京都驛御發車

十月二十日午前九時十五分　總裁殿下には京都驛發の東行列車に便乘あらせらるゝ御豫定に御在しましかば、松平會頭には重富書記を隨ひ京都驛に御待ち受け申上げられたり、時間進みて九時十三分に及ぶや、御料の馬車にて京都驛に着かせ賜ふ　茲に大森府知事以下各官衙公署員の來送を受けさせられ休憩室に入らせ賜ふ、刻一刻發車時辰の迫るや御機嫌いとも麗はしく御乘車在らせられ、塚田御附武官、墨崎津田の兩家從本會よりは松平會頭、重富書記、供奉し參らせ、尙吉池理事は長濱婦人部發會式の都合に依り米原より御陪從申上げたり。

此日中秋の空薄暗く列車の岡崎安城邊を過る頃には微雨蕭々として窓を打ちしも程なく止みたり、殿下を乘せ奉つるに汽車は豫定の時刻に遅ふことなく濱松に着すれば、李家靜岡支會長は水野事務官補を從へ同驛に奉迎し茲より御陪從申上げらる、午後四時十分靜岡驛に着すれば砲聲然として響き渡れりプラットホームには農商務大臣代理下岡農務局長川上騎隊長、千谷裁判所長鹽谷農商務技手鹽谷本會書記、各官衙高等官、在靜將校本會々員各學校長師範中學商業學校生徒愛國婦人會員等奉迎し參らせ、殿下には御機嫌いと麗はしく奉迎者に御會釋あらせられつゝ松平會頭の御先導にて大東館に入らせ賜へり。

御旅館に於ける總裁殿下

御着靜在らせらるゝ前々より靜岡支會には左記の如く役割を定め本會よりは鹽谷書記先々日出張して應援を爲し準備遺憾なきを期したり。

（庶務會計係）生方五郎、藤田左士郎、横山賢、太田兵太郎、大庭藤太郎、大倉誠一▲（貴賓接待職非常警備係）水野富三郎、林銀太郎、鍵田介政、織田利三郎、帝都昌太郎、瑛山賢、岩佐喬治、池田國太郎、秋國宗平、笹野甚四郎、▲（式場並饗賓係）水野富三郎、松平若代、北村信榮、淺井鉉太郎、太田兵太郎、岡部宏太郎、風間太郎、小野寺三郎、小島孫英、川島清三郎、平井才次郎、大越次太郎、内田新次郎、伊藤誠太郎、鈴木勝太郎、林銀太郎、鍵田介政、横山賢、長岡辰吉、殿岡宗平、野田吉四郎、飯島勇太郎、織田利三郎、▲（會員接待掛）鳥掛川七五郎、飯島善太郎、横山賢、林田重光、山中德三郎、宮島訓橋、白倉保、針谷秋、中井川仲太郎、吉田多三郎、楠茂作、澤戸準藏、田舍の事とて待つこといと薄き御旅館に御不滿の御氣色な

になく、御旅裝を解かせらるゝや浴室に渡らせられ、晚餐後には縣馬齋藤寛幷に園藝試驗場長恩田微彌の兩氏を御相手に圍碁を召させ賜ひ午後十時御機嫌いと斜ならず御就床遊されたり。

明くれば十月二十八日前日に打て變りし中秋の好日和朝日影麗かに照らはためきて一片の雲だに空に懸らず、人每案外の思に打たれき、前日の雨天には靜岡支會の役員諸氏痛く心を傷め、若しも折悪しく雨など降り頻りなば如何せんと、十年間の氣象盛報告などを調べて案ずること一方ならざりしに斯業振興に御軫念あらせらるゝ、總裁殿下の御臨席御坐しまさるゝ日にしあれば、極めて靜穩なる菊日和となりしと貴かりき。

靜岡支會大會

此日授會式前蠶絲業大會悪に製絲競技會表賞授與式及靜岡支會第一回總會を擧行せり其次第左の如し。

（豫定時刻より少し遅れ午前十一時縣會議事堂前庭に於て擧行、第一鈴にて會員著席、第二鈴にて來賓著席、會長寺尾昌太郎氏講長席につき左の三講案を可決せり。）

蠶絲業大會議案

(1)、蠶種改良及其種類の一定を圖るは目下の急務と認む依て本縣蠶業試驗場及蠶業學校蠶學校等に種托して善良なる種類を選擇し以て原種なるものを製造し各蠶種製造者に無代價付せられんことを本縣知事に申請のこと

(2)、方今各地に行はるゝ放任育（或は安樂飼又は稚飼）は甲評區々にして利害一定せざるの感あり故に是れ宜調査研究し目下の必要と認む供て之れに關する調査を此點へ申請すること

(3)、蠶種の共同販賣幷に施設を設置し等級を造らしめ各蠶家に傳付せしむるの利益を說くることを縣知事に申請すること

(4)、縣下製絲業改良研究所の設置の事門技師を本縣蠶業務課へ移転方本縣知事に申請すること

(5)、養成工女奬勵の爲め縣費の內より組合へ奬勵金下付を申請すること及太上五項とも來年度より實行の事を決せり。

次に李家知事左の告辭を朗讀せり

靜岡縣蠶絲組合靜岡縣蠶種同業組合靜岡縣生絲製造組合親合會合同開催するに當り技に親しく諸氏と相見る事を得たるは本官の光榮とする處なり本縣に由來物產の富饒なる為に其一方に於ては蠶絲業の發達は實に寶庫年の事顯せり、然りと雖絲業家の奮勵努力に由りて從年著しき發達を遂げ今や最も重要なる產業の一となるに至れり是れ時に當り其の施設宜きを得ると否とは直に本縣財源の消長に關するのみならず延て國家の經濟に影響ずる所亦尠からずとす、諸氏の責や重しと謂ふべし諸氏其れ愼重事を講じ以て前途の方針を樹立し精勵奮執り以て步を大東の域に進められんことを切に希望の至りに堪ずず一言以て告辭とな す

靜岡縣知事正五位勳三等　李家隆介

右終りて製絲競技表賞式に移れり

◎製絲競技表賞式　各員著席するや生絲製造同業組合副組長岡倉金次郎氏の式辭あり審査長生方技師表賞授與申請をなし知事は五十七名に夫れ〳〵賞狀を授與して更らに知事の賞辭あり受賞者總代一等工女河合りの答辭を述べ閉會せり。

次ぎに次日本蠶絲會靜岡支會第一回總會に移り副會長小島孫藤氏の開會の辭、幹事長生方技師事務の報告を爲して會議に移りて安會規則を可決し副會長岡倉氏告げて午餐休憩の後支會發會式に移る。

靜岡支會發會式午後にあれば遠藤館の御無料な貸し事ちんとて大、東館樓上に於て式場御前左の通席書を右賢に供し奉るとともに、午前十時席開始の御

ゆ次めり、間三十分猶殿に御出座遊され、親く左記四氏の賞牌を御覽あらせられたり。

貴族聖林（機公爵内の園其他四五葉）山下貴俗（鼠に鳩と日の出の園其他四五葉）

殿下には、いつも御熱心に御眺を止めさせられ時に「鶯と云へるものは幾に蓮やかに形を成すもの」との有難き御賞詞の御言葉を賜はり、十二時頃全く著き了りたるが猶は此の鶯に悪く種上に揚げて式終了御鶯館後台覽に供したり。

總裁殿下の式場御成と光榮ある靜岡支會

中秋の空清く晴れ渡り珍らかなる爽日和の當日午後一時十分、伏見宮殿下には御旅館大東館を御出發あらせ賜ふ、古澤警視先驅を季家支會長御先導申上げ塚田御附武官、下岡農商務大臣代理、松平靜岡縣知事、鹽谷農商務技手本會書記二名家從二名警察部長殿を爲し朝まだきより清砂を盛れる御道筋奥服町通より札の辻を右へ會場に成らせ賜へり御道筋兩側には御英姿を拜しまつらんとて人垣を造りき。

支會發會式の會場

無上の光榮を荷へる支會々員は朝まだきより集ひ來て開會前既に五千餘名と註せられぬ之が會場は縣廳傍なる縣會議事堂の廣庭を以て之に宛て議事堂入口の奥に　殿下の御虚所を、向て左に農商務大臣御附武官席右に會頭副會頭席を設け入口の石段上には天幕を高く張れり而して左方野立に支會役員席右に本會理事幷に審査長席を設け、前列を有効章受賞者席次を特別會員席其後方を通常會員席と定めたり。

總裁殿下御臨場

やがて第一第二號砲に依り一同定めの席に着くや、李家支會長の御先導にて奏樂の内に台臨在らせらる、李家支會長開會を告げ終りて役員名簿　會員表及品評會出品點數表を捧呈するや茲に　總裁殿下は玉音朗らかに左の令旨を朗讀あらせられたり、

令　旨

惟ふに本邦の產業其種類に乏しからずと雖も最も良く我國の風土に適し何人も容易に之を經營し得て海外より正貨を吸收し國民經濟を潤澤ならしむるものは蠶絲業を措て他に之を求むべからざるなり然れども宇内の大勢國運の現狀は富力の發達を促して止まず富力の發達は蠶絲業の進歩に待つ大なるものあれば當業者蹶起奮闘すべきの秋なり靜岡支會會員諸子此に觀る所あり鋭意斯業の振興を期し今や其產額の增加と品質の改良とは將に先進地方を凌駕せむとするの概あり殊に諸子能く本會の趣旨を體し協力以て多數の會員を增募して發會式を擧げ先つ其事業の第一歩として品評

會を開催するに至る洵に美事なりと謂ふべし本日親しく此式に臨み功勞ある諸子に有功章を授與するを得るは眞愛の深く滿足する所なり庶幾は會員諸子小成に安むぜず障礙を排し艱難に耐へ斯業の改善進歩に努め國家の富源を涵養せむことを期せよ

明治四十一年十月二十八日

大日本蠶絲會總裁
大勳位功二級　貞愛　親王

右の令旨を賜るや一同最敬禮を行ひ季家支會長は御前に進み謹て拜受し奉り次て左の奉答を爲せり、

茲に大日本蠶絲會靜岡支會發會式並蠶種繭生絲品評會褒賞授與式を擧行するに當り親しく　總裁殿下の台臨を辱ふし特に優渥なる令旨を賜はる洵に是れ本會無上の光榮にして不肖隆介等の恐懼措く能はざる所なり惟ふに本邦蠶絲の業は年と共に發達して今や國產の重要なる部分を占め世界蠶絲國の巨擘を以て稱せらるゝと雖も其品質は未だ伊佛に及ばず其產額は尙清國に若かず加之經濟界の變動は蔽もすれば斯業の發展を妨げんとす殊に近來米國經濟界の恐慌に由りて打擊を蒙り爲めに斯業の前途を憂慮するもの尠からざる時に當り之れが奬勵の法を設けて品質の改善と生產の增加とを計り以て悲況の挽回を請ずるは焦眉の急務なりとす抑も我支會は斯の如く斯業委靡不振の際に開設せしに不拘一たび　總裁殿下台臨あらせらるゝの報傳はるや省も斯業に從事する者は皆虚喜興起して立ろに一萬有餘の入會者を得二千五百餘點の出品を見るに至り能く本會の目的を達する事を得たり之れ全く　總裁殿下の德澤に依るものにして斯業の爲め欣躍に堪へざる所なり然りと雖も本縣の蠶絲業は前途實遼遠なり不肖隆介等益奮勵努力以て令旨に報ひ奉らん事を期す謹て奉答す

大日本蠶絲會靜岡支會長　正五位勳三等　李家隆介

右奉答し終るや松平會頭は御前に進み有功章授與の申請を爲せり次て吉池本會理事功記を朗讀し授賞者を呼出せば　總裁殿下には左記功勞者に有功章を御親授在らせられたり、

▲一等有功賞　李家隆介

▲二等有功賞　小島源三郎、依田佐二平、生方五郎

▲三等有功賞　天野千代丸、稻見明精、尾崎敏樹、桑原櫛雄、木田龍勛、崔部成宜、市川和雄、昌谷彰、辻芳太郎

▲四等有功賞　長島弘裕、藤田佐士郎、鈴木勝太郎、小川省治郎、横山賢、太田兵太郎、寺山榮實、大澤富二三、小山鋼太郎、阿部保太郎、飯島善太郎、岩濱爲治、石上愚太郎、鈴木七二郎、後藤陳、伊藤誠太郎、黑田龜次郎、井出源作、五等有功賞　伊藤仙太郎、石川勝三郎、今田應三郎、土屋太七、太田彦一郎、木下新作、伏見立雄、風國周太郎、海野光太郎、山脇準之助、落合英一、大谷賢次郎、服部岩太郎、小野豬太郎、後藤角平、寺尾昌太郎、久保田福次郎、大澤富輔、成岡半五郎、田地川長三郎、石川勝寅、平井才次郎、小倉斧、佐原周作、籠岡保、內山權次郎、鈴木國太郎

古山多三郎、池田國太郎、高林由松、榎谷鹿藏、山田誠一
山下善一、荒川嘉三郎、秋元植平、立田清已、内田新次郎
野栗喜三郎、針谷伏、中津川仲太郎、鈴木一丸、鈴木佐太
郎、鈴木源一、長岡辰吉、戸倉惣兵衛、小川鉦次郎、杉山
金藏、佐藤新三郎、

右授與終つて有功章拝受者總代として依田佐二平氏答辭を述べ、次に李家支會長は之より蠶種繭生糸品評會の褒賞授與式に移る事を宣告せり、茲に於て芳賀審査委員長は審査の梗概を述べて褒賞授與の申告を爲し、李家支會長は左記一等賞者には銘々に其他には總代に褒賞を授與せり。

生絲一等賞　小笠郡富田春吉
蠶種一等賞　庵原郡杉山百太郎
繭　一等賞　安倍郡長岡弘
同　　駿東郡一杉要藏

右終りて松平會頭は階段に進み出て左の告辭を朗讀せり

蠶絲は我國貿易上常に優位を占め國家の經濟に最も密接の關係を有するのみならず之を内にしては發展の餘裕綽々たるものあり之を外にしては販路の廣濶洋々海の如きものあり之を外にしては販路の廣濶洋々海の如きものあると雖も躓もすれば海外に於ける政況又は經濟上の變動は蠶絲需要の上に影響を及ぼし蠶絲生産者をして痛苦を感ぜしむること尠からざるものあり故に其の苦を輕減し秩序的の發達を爲さしめんとせば常に海外の事情を調査し當業者に警告し併て内の各方面に販路を擴張せざるべからず本會は事業の一半として此間に力を盡さんことを期するも未だ其目的を貫徹すること能はざるを慨みとせり然るに當局者の熱誠と會員諸君の盡力とに依り今や會員の數五萬を超へ全國到る處殆んど支會又は地方委員部の設置を見ざるなく提携呼應して如上の針路を取りつゝあり此時に當り靜岡支會當局並に會員諸君は奮起して會員の增募に努め本會の擴張を圖ると共に支會の基礎を鞏固にし且其事業として品評會を開催し客歳以來沈滯せる當業者の意氣を鼓舞せんとす洵に時機蹟雨ながら其宜しきを得たるものにして當路者の功多きを謝すると同時に本會の目的の一歩を進めたるを賀せざるべからず

今や出品の審査完了を告け本日茲に褒賞を授與し併て發會式を擧るに當り恭くも　總裁殿下台臨あらせられ本會の爲に賞献せる會員諸君に對し有功章を親授せられ加ふるに優渥なる令旨を以てせらる是れ當支會の名譽にして本會の光榮とする所なり顧るに本縣の蠶業は其淵源頗る古く和銅年間に錦綾を機織すべき恩命に接したることあるより之を察すれば千三百年代以前に在ることを知るべく爾來幾多の變遷を經維新以後顧著なる發達を爲して今日に至れりと雖ども前途尚擴張の餘地頗く氣候風土好く蠶業に適するものあり依ては會員諸君克く台旨のある所を奉戴し一致協力益會運の發展を圖り以て本縣蠶業の進捗に貢献し國家の富原に資することを期せざるべからず聊か希望を述べて告辭とす

大日本蠶絲會々頭正三位勳一等男爵　松平正直

右に次て農商務大臣代理下岡農務局長は左の祝辭を朗讀せり

總裁宮殿下台臨の下に大日本蠶絲會靜岡支會發會式並に品評會褒賞授與式を擧ぐるに當り一言以て會員諸士に告げんと欲す方今國家の急務は殖産事業の發達を圖り以て富源を涵養するに在り而して蠶業は此の目的を達する捷徑にして又實に主要の地位を占むるものと云ふべし

熟世界の趨勢を觀るに蠶絲の需用は益增進し殆んど底止する所無きに似たるは當業者の大に意を强する所以なりと雖ども産額の多大なる清國あり絲價の優良を以て鳴れる伊佛ありて常に輸贏を市場に爭ふ、此秋に當り益々斯業發達を圖り長へに本邦蠶絲業の優勝を期せんと欲せば專ら技術の練磨と堅實なる結合力とに依り事業の基礎を鞏固ならしめざるべからず本日の發會式並に褒賞授與式は即ち戮力協心の實を示し技術の進歩を覗ふものにして最も時機に適せる舉なり冀くば會員諸士努めて初志を貫徹し以て國富の充實に貢献せられん事を

農商務大臣從三位勳一等男爵　大浦兼武

次に來賓の祝辭受賞者總代一杉要藏の答辭ありて式は全く終れるを以て支會長閉會を告ぐるや奏樂起り一同最敬禮の内に總裁殿下には御退場あらせられたり。

品評會場へ御成

式後　總裁殿下には支會第一回品評會場たる物産陳列館に台臨在らせられ、貴賓室に御小憩の後李家支會長の御案内芳賞審査長一々御説明申上げ會場を御一覽在らせられ、御小憩の後階下の陳列場を御巡覽在らせられて、午後四時頃式場へ御成の順序にて大東館に御歸館在らせ賜へり。

總裁殿下の御歸京

總裁殿下には長時間の式典に列せられ御疲勞の程深く恐察に堪えざる次第なるに御休息の御暇も在らせられず、當日午後四時四十分の靜岡發東行列車に便乘せられ御歸京の途に就かせ賜ふ、時迫りて定刻に近くや、停車場には御着當時に倍し奉送盛にして在靜各官衙高等官將校學校生徒、愛國婦人會員等整列して奉送申上げしが　殿下には御機嫌いと麗はしく一同に御會釋を賜り御發車在らせられたり而して本會よりは松平會頭酒匂副會頭吉池理事、遠谷重富の兩書記扈從し李家靜岡支會長は水野事務官補と沼津近生方校陪は警部一名と共に山北迄御見送申上げたり。

斯くて　殿下を載せ奉れる汽車は無事進行して午後九時新橋驛に御安着在らせられたり茲に馬場別當及牧家令其他の出迎を受けさせられ御機嫌いと麗しく御料の馬車に御移乘あらせられ紀尾井町の御殿に御還啓遊されたり。

支會職員の囑託

本會支會長並に副會長中異動ありたるに付、本會々頭の推薦に依り今回　總裁殿下より左の通囑託せられたり。

茨城支會長　坂伸輔
秋田支會長　森正隆
群馬支會副會長　佐藤孝三郎

本會群馬、福島兩支會委員部長中異動あり、兩支會長の推薦に依り本會々頭より左之通囑託せられたり。

群馬支會利根委員部長　中西鉎也
福島支會東白川委員部長　靑沼鋒太郎

高知支會の設置

高知縣は從來會員の數少く地方委員部を置き會務を處理し來りしが、近來會員を增募し、新に支會を設置せられたき旨同支會長より申請ありたり、依て本會に於ても其必要を認め之が設置を決定し、會頭の推薦に依り總裁殿下より左の通囑託せられたり。

高知支會長　石原健三

地方委員部職員の囑託

德島地方委員副長は從來缺員の處今回支會長の推薦に依り總裁殿下より左の通囑託せられたり、又同地方委員及廣島地方委員部地方委員は本會々頭より同く左の通囑託せられたり

德島地方委員副長　堀内秀太郎

同地方委員

山崎熊太　河原正名　川人兵次郎　磯部鎭次
小田耕介　大崎鉄作　佐藤重太郎　川田達太郎
大島英二

廣島地方委員部地方委員　望月關馬

特別會員の推擧

左の諸氏は本會功勞者及篤志者待遇內規に依り本會々務に貢獻せる勞功顯著なる廉を以て今回本會々頭より特別會員に推擧せられたり

靜岡支會

小川省治郎　稲見明精　久永良次郎　池田國太郎
佐藤新三郎　高林由松　鈴木甚平　佐原勝作　縣茂太郎
飯田傳太郎　内山樫治郎　中村善助　桑原百合　石川豊懐
水野富三郎　小島源三郎　藤田左士郎　雀部成宣　鈴木上二郎
辻芳太郎　後藤隆　本田豊助　尾崎敏樹　大澤富二三
桑原楯雄　矢野千代丸　小山鋼太郎　長島弘祐　石橋樹松
細田多次郎　合志修敬　岡部竹次郎　後藤角平　小川鉄次郎
大庭源太郎　杉井金次郎　山田誠一　鈴木一丸　中津川伸太郎
鈴木源一　小杉謙治　太田彦一郎　秋元操平　荒川嘉三郎
鈴木陸十郎　杉山金藏　内山猪三　土屋太七　木下新作
海野光太郎　山嶋準之助　松下幾平　落合英一　永井継次郎
大谷賢次郎　伊藤信廣　服部岩太郎　松永晋郎　田谷楯益
伊藤作太郎　清水常太郎　山本森太郎　伏見立雄　遠山聰橋
鈴木信市　飯塚棚作　枝村藤太郎　沼澤勝太郎　塚本和三郎
寺田長一　山本太三郎　楠木倖　松下嘉源次　石川林三郎
杉山幸平　鈴木宇作　宇野正治　林田重光　白倉保
山中德三郎　鈴木作左衛門　岡本幸一郎　清水逸太郎　新井熊吉
増田薫　青葉幹雄　岡本義一郎　鈴木五郎馬　杉田七財茂
將田啓次郎　生駒啓治郎　勝田敏通　土屋嘉次郎　中村寅次郎
山下善七　石田俊次郎　大塚逸司　磯部文綬　原愛三郎
佐原来作　鈴木六郎丸‖芹澤善道　長谷永之助　服部昌平
久米文作　久保田福次郎　内田新次郎　針谷伏　立田清巳
鈴木佐太郎　戸倉惣兵衛　野梨德三郎　鈴木七郎　鳥居篤藏
楢茂作　澤戸準藏　大塚喜太郎　内藤忠平　朝田萬作
中野惣作　山田健之助　高田市三郎　北條八郎　石田鹿右衛門
小池政吉　藤井萬平　渡邊源重　上村源一郎　高橋六太郎
鶴地春吉　土屋梅之助　原田福次郎　石谷満次郎　土屋傘次
土屋照雄　鈴木義雄　勝俣邦俊　瀧口源太郎　岩田房五郎
平井喜十郎　土屋民太郎　池谷忠太郎　池谷鍋次郎　髙杉太郎造
野木太藏　澁口幸吉　湯山一　鈴木傳夫　井上篤一郎

芹澤鑑太郎　野秋喜三郎　長澤市平　室住桂次郎　長岡涫之助
内田平吉　野瀬九平次　石川愛次郎　植松猶藏　渡邊鼎次郎
廣川平太郎　望月久作　牧田雄吉　大井忠藏　眞知孫作
高安健次　鈴木芳之助　深田彦三郎　青山善作太郎　戸倉實太郎
田邊岩吉　友田重吉　内藤惠三郎　池野記三郎　鈴木信一
渥美長吉　山内藤一郎　大場菊治　白尾金太郎　太田才一郎
鈴木新三　將田善九郎　桑原久次郎　佐藤喜代藏　鈴木長三郎
山田武助　杉山重樹　中井小三郎　鈴木正一　増田小三郎
齋藤操　清水浦太郎　土屋松太郎　太田孫兵衛　石上紋次郎
杉本馬之助　増田銀次郎　梶山米三　戸塚忠次　江川昌平
齋藤榮吉　大村利作　馬淵島藏　勝見藤太郎

山梨支會

中村愛矩　菊島順作　田村熊五郎　吉眞傳
下元熊之助

高知支會

谷重正　市原景賞

山口支會

野澤都

岩手支會

渡邊潔　馬場龜一郎

下野支會

丸井哲之助　福田庄一郎　水野塁太郎　西海石榮吉

信濃支會

大槻貞埴　古田清　深町誠吉　小林仁吉
芦澤市郎治　金子藤次郎　渡邊愛治　高見澤龜吉　櫛澤安一郎
宮崎新治　翀津金太郎　小野周三　本田議正　有賀政清
讓巖　松林多賀己　北澤健治郎　中條典四郎　橋本善三
竹村覺十郎　中島一美　若林眞治　響城啓次　玉井直太郎
田中猪五郎　内山八藏　野口近治　内村多喜治　山口寛一郎
岡澤牧治　海沼俊次郎　栗田德助　久保田新太郎　中澤源作
北村儀藏　安川安之助　小野頼次郎　丸茂政通　相馬將一
金井百助　荻原長次郎　松代儀八　島島清一　鷹野珍雄
黒澤嘉兵衛　猿刈基三　高橋正英　馬場今朝五郎　横内彦十

熊本支會

酒井新藏　見玉氏信　到津亘　河瀬弘
田添伊左衛門　今坂審圓　上村敬次郎　石川啓　田中武雄
田邊章　井上久治　美濃部盛行　有働茂一郎　宗村敬四郎
堤光次郎　十時參吉郎　大磯準藏　遠山友雄　藤岡常彦
坂本剣　淺井春之助　池田眞治　中西正義　古庄甚藏
手島香三　志水文太郎　四彦太郎　内村甄次　古住彦三
田中敷知　富永典平　古城彌三郎　沼安治　後藤章臣
堀内牛太郎　福山盛英　木村幸三　小野澤正喜　河喜多義雄
千田體彦　永坂正俊　原賀晋　小山幸雄　狩野伊三郎
米澤武一郎　稲垣九平　佐藤崎次　坂木佐一郎　原純太郎
小崎晋　有働文次郎　小島茂太郎　池田貞雄　島田季吉
福島凱一　蟻敬寛　小川惟明　田代豊　佐藤大平
福田典藏　栃原敦眞　有田堅藏　井本源次郎　齋藤長八
見玉榮　宮本恵一　岩橋鉄太郎　松岡柳太　野田眞晋
布田新吾　河野鄙平　吉本寅雄　松浦午太郎　荒尾森太郎
高松喜六　深道乙五郎　大島猪久麿　四十藏　中村直

宮城支會繭蠶種品評會景況

宮城支會第一回蠶種繭品評會を同縣柴田郡大河原町に開催し、十月三十日を以て其褒賞授與式を擧行するに際し、松平會頭は吉池理事及小池書記を隨ひ、十月二十九日午後八時五十五分上野發列車に投じ出張せられたり、三十日拂曉岩沼驛に至れば坪田宮城支會幹事來りて迎へらる、同七時七分大河原驛に着すれば數發の花火は轟々として沖天に鳴動せり、丹羽、河田、古藤の宮城縣技師坂元柴田郡長其他地方有志諸氏數十名の出迎を受け、腕車を列れて當町の有志尾形安平氏の邸に入る、午前十時河田技師の案內に依りて品評會式場なる農事講習所に臨む、寺田宮城支會長は一列車を乘遲れられたる爲此時來着せり。

褒賞授與式　當品評會の出品區域は二府十六縣に涉り點數一千餘點に達せり、來會者は縣下各郡長、縣會議員、郡會議員、町村長其他蠶絲會員出品者等二百餘名にして、一同着席君が代の奏樂あり、寺田支會長開會を宣告し、丹羽審査委員長審查の梗概を報告して褒賞の授與を懇請せり、次て松平會頭は一等より順次四等に至る受賞者に賞狀を、寺田支會長は同く賞品を授與せられ、終て寺田支會長は式辭を朗讀し、次て松平會頭は左の告辭を朗讀せられたり。

告辭

大日本蠶絲會宮城支會は本日の佳辰を卜し第一回品評會褒賞授與の盛典を舉行せらる正直此に列席するを得欣躍措く能はざるなり

惟ふに本縣の地たる沃野遠く開け其富源測るべからざるものありと雖も最近數年間の天候は陰晴常なく寒暄序を失し米作にのみ重きを置くの危險なるを感ぜしむるに至れり此に於て乎本縣當局者は凶荒の虞を將來に絶ち民力の挽回を圖るの道蠶絲業の振興を待つの外なしと爲し上下相和し全力を傾注して之が經營に盡力せられ今や漸く觀るべきものあるに至りしは獨り本縣の幸慶なるのみならず國家の福祉なりと謂ふべし然りと雖も之を隣縣の福島山形に比すれば尚遜色あるを免かれず是れ本縣當業者諸君の猛省を請はざるべからざる所なり又當支會は其創立以來茲に年ありと雖も會員の數未だ多からず會務の躍常に舉からざるを憾と爲せり然るに近時會務に刷新を加へ大に會員の增募を圖るを聞く本縣蠶絲業の振興急を要するの秋に際し此壯舉あるは洵に喜悦に禁へざる所なり會員諸君能く本會の趣旨を體し鋭意奮勵會員を增加して支會の基礎を確立し以て蠶絲業の發展に資し國富の充實を期せられんことを一言以て告辭とす

大日本蠶絲會々頭 正三位勳一等男爵 松平正直

縱て來賓坂元祭田部長大庭大河原町長の祝辭、受賞者總代八卷雄三郎氏の答辭あり、正午十二時午式全く了れり、受賞者の重なるもの左の如し。

繭一等賞（木盃一組）

宮城 千石順平 同 小野寺掌平 同 佐藤うめ

埼玉 藤八十吉

蠶種一等賞（木盃一組）

宮城 八卷雄三郎 同 本田三學 群馬 清水治郎藏

繭二等賞（木盃一個）

宮城 丹野恒治 同 齋藤伸吉 同 鎌田惣兵衛

同 遠山五三郎 福島 石幡新三郎 同 石幡吉四郎

同 石幡吉左衛門 同 加藤善助 同 八卷九右衛門

宮城 細田昌 同 菅原格治 同 佐藤勇太郎

同 加川正 同 三明保

蠶種二等賞（木盃一個）

長野 矢ヶ崎三彌 同 倉科一郎 同 矢島浩吉

東京 大野傳兵衛 靜岡 清水德重 宮城 山本丈吉

山梨 武藤久壽

●歡迎會 仙南五郡の有志者四十餘名松平男爵寺田知事等一行の爲め、午後二時半より蠶事講習所の階上に於て歡迎會を開きたり、大庭河原町長主人側を代表し歡迎の辭を述べ、松平男爵は之に對する挨拶を爲し、午後四時散會せり。

●百戸會 尾形安平氏の嚴父故尾形安平氏は資性溫良常に公共の事に心を用ゆる篤く、夙に地方の發達繁榮に力を盡せしが殊に大河原町の繁榮策には種々計畫する所あり、町の川向ひは氏の所有にして若干の耕地と草茫々たる荒蕪地の中に僅に三戸の住民あるに過ぎざりしが、恰も明治十四年松平男爵が當縣に知縣たりし頃如何にもして此地に居民を增殖し遂には一町を形くるに至らしめんとて、或は私資を以て架橋を爲し、或は道路を修築し、或は地代を免除する等移住者の便宜を圖ること至らざるなく、其誘掖獎勵の效果は漸次戸口の增殖を來たし三十餘戸を以て數ふるに至りし頃不幸氏は不歸の客となれり、然るに現代安平氏又父の志を繼ぎ、移住者の便宜を圖り土地の繁榮を畫すること茲に年あり、遂に現今に至りて故安平氏の當初の希望たりし百戸を超ゆること十七の多きに達し一小市街を爲すに至り、町名を尾形町と稱し、將來益澎漲せんとするの趨勢を現はすに至れりと是一に尾形家父子の賜物にして街も尾形町民の忘るべからざることなりとし、此に百戸會なるものを組織し、故安平氏の事業に少からず學援を與へられたる當時の縣令たりし松平男爵の來縣を機とし、尾形氏の別莊に於て紀念の園遊會を開き一行を招待せり、百數十名の會員は庭の廣場に整列して男爵及知事の一行を迎へ大庭町長は中央に進て尾形町成立の由來竝現狀及歡迎の辭を述べ、松平男爵、寺田知事は相次て當町の繁榮を祝し將來の注意を述べられ、一同萬歲を三唱して式を卒り、來賓の爲め別に小宴を開き、手踊數番の餘興あり、午後六時辭して更に尾形氏の邸に趣き晩餐の饗を受く同七時十分發汽車にて歸京の途に就く、數十名の有志者プラットホームに送られ、丹羽河田古藤の三氏は送りて白石に至り、翌三十一日午前五時四十分上野驛に着せり。

岐阜支會品評會

本會岐阜支會は第一回蠶絲品評會を岐阜市物產館構內に開き、去月二十三日其褒賞授與式並に支會總會を舉く會頭松平男爵には、臨席の爲に重富書記を隨へ二十二日午後六時半の急行車に投じ同地に向へり、午後十一時靜岡驛に着すれば同月の二十八日忝くも總裁殿下の台臨を仰ぎ奉り支會發會式を舉行せんとする靜岡支會の爲に萬事打合せを爲すべく先發せられたる吉池理事茲に同乘せられぬ。

翌二十三日午前四時十五分岐阜に着す脇田岩涌の兩技師並に縣官當業者等數十名に出迎へられ一同車を連れて玉井屋に入れり。

品評會場の一異彩 繭のみにても二千二百餘點を集めたることとて普通の陳列にては宏大の物產館も所狹きを覺ゆるとて方丈餘の四面硝子張の陳列箱中に方八寸餘の臘葉皿を青竹の上に或は高く或は低く或は山に或は波に似せ此上に繭を山の如盛れることとて、室内一層の光輝を放ち見るからに快感を與へしは他に見られぬ陳列振りなりき。

第一回岐阜支會總會 時は過りて午後一時饗筵一聲碧落に轟ける煙火と共に物產館前廣庭に開かれたり參列者は本會の一行縣官、山田岐阜地方裁判所長、木内岐阜聯隊司令官郡市長代議士縣會議員市名譽職新聞記者會員等無慮二千五百餘名にして一同着席するや樂隊の吹奏あり終て脇田支會幹事長開會の辭を述べ次に薄支會長は一場の告辭を演べ次て脇田幹事長より支會の事業報告を爲して總會を閉ぢ引續き脇田幹事より

第一品評會褒賞授與式を行ふ旨を告げ薄支會長は左の式辭を朗讀せり。

式辭

大日本蠶絲會岐阜縣支會第一回品評會出品の審査了りを告げ茲に貴紳各位の臨場を忝ふし褒賞授與の典を舉ぐるは當支會の光榮とする所なり

抑も本會は初回の開催なるに係らず出品點數二千八百點の多きに達し當初の豫期に倍する盛況を觀るに至りたるは洵に當業者熱誠の致す所にして斯業の爲めに慶賀措く能はざる所なり然れども猶其の現況は前途大に改善發達を要するものあり今や蠶絲業は邦家の經濟を維持する一大要素にして之が盛衰は國運の消長に影響する處少なからざるは勿論なるを以て斯業に關係ある者須らく本會の成果に鑑み採長補短の資となし益々之が發展を圖り富源の培養に努力せん事を望む一言を叙して式辭とす

明治四十一年十月二十三日

右終りて辻審査長は左の申告書を朗讀し褒賞授與の申請を爲せり

大日本蠶絲會岐阜縣支會長 正五位勳四等 薄定吉

申告書

大日本蠶絲會岐阜縣支會第一回蠶絲品評會を開催せらるゝに當り小官之れが審査長に享け審査員諸氏の熟練なる技術と熱心なる精勵とに依りて審査の結了を告け褒賞の授與を稟請するに至れるは小官の光榮とする處なり出品點數は蠶種三百三十一點、繭二千二百六十點、生絲百八十八點、桑苗六十二點、蠶絲具三十四點、總計二千八百五十四點にして其の內蠶種に九十三點、繭に七百七十一點、生絲に七十六點、合計九百五十六點を褒賞するに至れり即ち概評を報告すべし

蠶種は佳良なるもののなきにあらざるも一般に色澤及產者の意匠を缺き調製宜しきものに乏し關西に於ける製種地として其面目を保たんとすれば宜しく種繭と蠶卵類に於ける保護及取扱に注意し之に加ふるに蠶紙の一定を計り以て縣下蠶種の聲價を揚ぐべきなり

繭は概して優良にして繭層適度を得るも品質區々趣味に乏しく亦形狀大に失するの傾向あり秋蠶繭にありては關西府縣の先進地なるに拘はらず種類雜駁なるがため其の優點を發揮するを得ざるは遺憾とする處なり絲量豐富にして形狀適度のものを選びて種類の雜を避け斯業の發達に資するの注意を要す

生絲は其の品位絲量に甚だしき差異あり之れ縣下製絲業發展上の障害なり故に共同揚返協又は共同荷造協を設立し生絲の製造法を改良し生絲檢查の方法を一定し品位絲質同一なるものを顯はし殊に乾繭貯繭製絲の二種整理等一定し色澤佳良抱合正しき纖度齊一顆節の切斷等に強力伸度を減ぜず趣味良好なるものを產出するに至るべし之即ち本立を道生する所以にして斯業の發展期して待べきなり桑苗は發根一方にのみ偏し樹幹徒長に過ぎて堅實なる者少し苗圃の整地と植込の方法を宜しくし且つ施肥を適當にするにあらざれば良好なる桑苗を得る事能はず蠶絲具は良好なるもののなきにあらざるも理論に偏して製作せらるゝが故に實用に適するもの少なきは遺憾とする處にして當業者の此點に注意して製作せん事を望む茲に謹んで褒賞授與あらん事を稟請す

明治四十一年十月二十三日

審査長 京都蠶業講習所技師 辻保次郎

右終りて薄支會長は左記一等賞者には銘々に二等賞以下には各種總代に襃賞を授與せり。

▲繭の部

稻葉郡　小野木彌十郎　同　郡　藤井榮次郎　同　郡　北川　半助
同　郡　藤澤　秀市　羽島郡　野口　代治　同　　澁野　清六
海津郡　河合庄次郎　養老郡　粟田長之助　安八郡　川瀬　鶴吉
本巢郡　古川　紋一　武儀郡　大西宗九郎　郡上郡　野田新次郎
郡上郡　中島金次郎　加茂郡　安江德太郎　可兒郡　野口　五郎
土岐郡　小木曾重五郎　惠那郡　林　　鶴六　惠那郡　吉村佐太郎
同　郡　土田　庄藏　同　郡　東野與合名會社　大野郡　田口　又三郎
滋賀縣　中村　治幡

▲蠶種の部

稻葉郡　吉田藤次郎　本巢郡　高木種次郎　惠那郡　吉村芳太郎
惠那郡　篠田　彥助

▲生絲の部

惠那郡　金　水　館　大野郡　直井佐兵衛

次に會頭松平男爵は左の告辭を朗讀せり

告　辭

回顧するに本縣の蠶絲業は其の由來頗る遠く延喜格式には旣に美濃を以て上絲國の班に列せり爾來兵馬倥偬干戈の巷となりし爲め萎微として振はざりしが維新以後に至り頓に面目を改め殊に輓近其の發展著しく全國有數の蠶業地たるに至れるは時勢の然らしむる所とは雖も又當局者奬勵の施設宜しきを得たると會員諸君の熱誠之れに盡されたるに依るべし然れども殺桑に養蠶に製種に將た製絲に尙ほ改良を加ふべきもの一にして足らず岐阜支會の當局者玆に觀る所あり會員を増募し支會の基礎を確立し斯業生産品の品評會を開設して之を一堂に蒐め各自切磋琢磨の資と爲せり洵に眞摯なりと謂ふべし本日玆に發會式を兼ね品評會襃賞授與式を擧ぐるに際し正直親しく此席に列し會員諸君に面接するの榮を得實に欣抃に堪へざるなり

抑も本會の出品區域は數縣に跨り其の數三千を越へ品質も亦觀るべきもの尠なからず實に支會品評會中稀に觀る盛況にして當業者の稗益少ならざるを信ず庶幾は會員諸君堅忍不拔斯業の改良發達を圖り徐に鞏況回復の時を期待し益々會員を増加して支會の基礎を強固にすると共に會務の擴張を謀り一致團結華を戒め實を採り以て本會の目的を達し益々國富の充盈を期せんことを一言以て告辭となす

明治四十一年十月二十三日

大日本蠶絲會々頭　松　平　正　直

次に技術員會議員其他の祝辭及出品人總代吉田德平の答辭ありて午後三時式を終れり式後來賓一同に茶菓の饗應記念繪端書の配付を爲せしか何れも其意匠嶄新にして蠶絲等に因めるものなりしも殊に記念繪端書は盡きものなりき殊に當日は物産館内の賣店は本會員の爲に全部割引を爲し支會今回の擧を賛せられたるはうれし　此夜公園萬國館に盛なる招待會を開き一行懇篤を受けしは感謝の外なし。

明くれば廿四日午前七時滋賀に向ふべく玉井屋を出づ薄支會長其他縣高等官并に當業者數十名旣に停車場に在り七時卅六分盛なる見送を受けて關ヶ原を過ぎ午前九時五十六分馬場に着すれば土居小野の兩技師并に當業者旣に時や遲しとプラツトホームに待つ直ちに大津市竹清樓に入る。

滋賀支會第三回蠶絲品評會

十月二十四日大津物産陳列場俱樂部に式を擧ぐ此日第二回時好品展覽會(繪畫・織物・金屬・漆器・木具指物・刺繡・酒茶嗜食品等總數二千五百九十點)及第二回共同稻苗代品評會(總數七千六百四十五點)并に蠶兒飼育共進會(總數九百點)の四種襃賞授與式を合せ行へり、蠶糸品評會は其出品一道二府二十八縣に亘り出品を得しも其數僅に九百二十五點にして他に比すれば甚だ振はざるの感ありき午前十時半第一號砲にて出品人着席し第二號砲にて横井農學博士伊藤農商務技師、齋藤農商務農事試驗場技師西田大津聯隊區司令官、前田裁判所長山口檢事正下郷貴族院議員其他代議士、縣會議員、各郡長等の來賓着席し、川島支會長の先導にて松平會頭吉地理事着席するや川島支會長は擧式の旨を告げ左の式辭を朗讀せり、

式　辭

滋賀縣時好品展覽會滋賀縣農會共同稻苗代品評會及蠶兒飼育共進會并大日本蠶絲會滋賀支會蠶種繭生絲品評會審査結了を告げ茲に本日をトして襃賞授與の式を擧ぐ

惟ふに殖産興業は國家富强の基礎にして斯業榮えて始て庶民其堵に安んじ國運の隆昌長へに保持するを得べきなり事に斯業に從ふ者豈深く思を茲に致さざる可けんや

我江州の地たる東海東山北陸の要衝に當り商工業地として地の利を有するのみならず地味肯腴にして農蠶に適し其名聲旣に江湖に重視せられつゝありと雖も前途尙改善發達の餘地尠からず即ち之が鼓舞奬勵の手段として玆に前記各種の會を開設したるに幸に當業者諸氏此擧を賛し多數の出品若くは競技者を得たるのみならず何れも前回に比し大に改善の實を舉げ其成績見るべきものあるに至りたるは蜜に歡喜に堪へざる所なり

今や畏くも我　天皇陛下には國民荒怠の狀勢日に長ぜんとするに深く軫念を勞し給ひ勤儉自彊の大詔を煥發あらせらる是蜜に朝野臣民の恐懼措く能はざる所にして自今以後益上下心を一にし勤勉力行以て聖旨に奉答せんことを期せざるべからず冀くは諸子深く聖旨の在る所を體し各々服膺大に產業の改善發達を圖り以て國運の隆昌に貢獻せられんことを一言を敍し式辭とす

會長正五位勳四等　川　島　純　幹

終て時好品、共同苗代、蠶兒飼育、及蠶絲會支會品評會の順序にて各審査長より申告し次て各種の一等受賞者には銘々に二等以下は各總代に襃賞を授與し蠶絲會支會品評會の襃賞は松平會頭より之を授與せり、一等賞者左の如し。

一等賞（金牌）

蠶　種　群馬縣　　　　清水拾郎造
同　　　東淺井郡　　　武田與惣松
繭　　　阪田郡　　　　中川正三郎
同　　　蒲生郡　　　　梅井孫三郎
同　　　同　　　　　　井上正五郎
同　　　甲賀郡伴谷村　宮地　茂八
同　　　福島縣　　　　丹治七之助
同　　　群馬縣　　　　金谷權之助
生絲　　阪田郡　　　　近江原製絲協

終りて松平會頭は左の告辭を朗讀せり。

告　辭

大日本蠶絲會滋賀支會第三回品評會出品の審査結了を告げ本日玆に襃賞授與の式を擧ぐるに當り親しく會員諸君と相見ゆるを得るは正直の欣喜に堪へざる所なり由來滋賀縣は關西に於ける蠶絲業地として夙に世に知らる而して時世の推移は其產額に於て將又品質に於て棧進の諸國に一歩を輸するの觀あるは私に遺憾とする所なり然るに輓近著々として諸般の施設を行ひ官民共に銳意斯業の改善發達を圖り其成績漸く顯はるるものあり殊に滋賀支會又意を此に用ひ品評會を開催すること前後三回今又廣く會員の生產物を蒐めて之を較叢し斯蠶進步の一助となさんとす蜜に適切の美擧なりと云ふべし想ふに國運の趨勢は蠶絲業を驅て振は一層の進步を促して止まざるものあり此時に際し品評會を開催するは曾に本會の隆運に資する而已ならず斯業の發展を企圖する一大捷徑たるを信ずるなり希くは會員諸君現況に安ぜず協力一致相努めて會員の增募を圖り以て支會の基礎を確立し又一面に於ては今回の實績に鑑み採長補短の實を擧げ以て本縣蠶絲業の革新改善を圖り國家の富源を涵養せられんことを一言以て告辭とす

大日本蠶絲會會頭正三位勳一等男爵　松　平　正　直

次に郡農會總代として友田滋賀郡長、西川大津市長の祝詞西川縣會議長の祝電出品人總代柴田源左衛門の答辭朗讀ありて正午全く式を終れり。

式後松平會頭には川島會長と縣廳の供付の二頭馬車にて竹清に引越し午餐を共にし午後坂本町奚道館に開ける講話會に臨み蠶絲業の改良に就き懇々說示して午後六時より八景館にて川島支會長の晩餐會に懇招を受けたり之より先吉池理事は會務の舊式の畢るを待ちて京都に向へり。

二十五日午前七時四十分馬場發の汽車に投し川島支會長鈴木副會長小財事務官土屋小野兩技師其他に送られ京都に向ふ著後會頭には吉池理事と共に車を列て伏見宮御別邸に伺候し靜岡支會總會の儀に就き言上し會頭は重富書記隨行して大阪に吉池理事は滋賀支會長預婦人部の發會式に臨めり。

松平會頭には廿七日京都御別邸より靜岡支會發會式に台臨あらせらるゝ　總裁殿下に御陪從上申ぐべく廿六日午後二時京都に引返し俵屋に投ぜり。

高知支會の設置

高知縣は從來會員の數少く地方委員部を置き會務を處理し

來りしが、近來會員を增募し、新に支會を設置せられたき旨同支會長より申請ありたり、仍て本會に於ても其必要を認め之が設員を決定し、會頭の推薦に依り總裁殿下より御囑託あらせられたり。

高知支會長　石原健三

蠶桑雜觀

▲本年の養蠶　農商務省の調査に依れば本年の養蠶(豫想)は春夏秋蠶を通じ、掃立枚數は昨年に比し三分六厘平年に比し一割三分九厘を增加し收繭に於ては昨年に比し、一分一厘を減じたるも平年に比し約二割五分を增加せり、即ち左の如しといふ。(△印は減少)

掃立數

	本年豫想	昨年比較	平年比較
春蠶	二,四四八,四二九	二厘	△二厘
夏蠶	六八七,七六七	六三	八九
秋蠶	一,四四二,〇五七	八七	四,八七
夏秋蠶	二,一二九,八二四	七九	三,三一
春夏秋蠶	四,五七八,二四九	三六	一,三九

收繭石數

春蠶	二,一五六,六六九石	△三八	一,九〇厘
夏蠶	四三七,四九〇	△六三	一,四五
秋蠶	八一七,一五二	一,〇五	四,四四
夏秋蠶	一,二五四,八四二	四〇	三,〇三
春夏秋蠶	三,四二〇,三一一	△一一	二,四九

▲小學校兒童の秋蠶飼育　岐阜縣郡上郡奧明方村は郡內に於ても區域廣大なるを以て、地形上已むを得ず村內に五個の小學以下を設立せるを以て教育費の膨脹甚しく、況して義務教育の延長となり、將來の爲め基本財產の必要を感じつゝありし折柄、同村教育會は昨年秋期の總集會に於て、同村小學校教員會の提出せし小學校基本財產蓄積規程を可決し、每戶米三合以上つゝを醵出し、之を集めて賣却し、其金を蓄積することゝせしに意外に好成績を得たるを以て、本年春期の總集會に於て、同小學校長の提出にて基本財產蓄積規程に修正を加へ、米の外に繭を加ふることとし、乃ち七月來町田技師より寄贈の秋蠶種を、各校尋常三學年以上の兒童に一人に付一蛾種つゝ(希望あらば二年生にも與へたり)を分與し時恰も夏期休暇に迫りしを以て、兒童には懇々飼育上に關する注意を與へ、收繭の上は自家にて殺蛹するか、若くは殺蛹器具ある家に托し、丁寧に保存し休暇後開校の際持參すべく命じ、且同村青年會主催に關する繭及蠶絲工品評會の際共に品評する旨をも話して休校せり、而して八月十五日夏期休暇中一回兒童を召集し、飼育上に關する注意と共に飼育の注意をも與へたり、然るに初回のことゝて經驗なき爲め多少は注意を欠きたるものもあり、鼠害或は病害にて不作のものもあり、又收繭後の保存法不完全の爲め蛾を生したるあり、或は黴を生したるものもありしと雖も、初回としては成績可なりと云ふべし、且學校教員の多數は夏期休暇を利用して講習會へ出席するもの多く、或は旅行を企つものあり、爲めに注意の不十分なりし點もあらん、中には講習會へも出席せず、或は旅行をも爲さゞりし教員にして十分注意したる學校は幾分か好成績なりしが如し、而して其集めたる繭は總計一石二斗三升にして、一人に付五合以上のものゝみな審査品評して褒賞を授與せり、其審查方法は一蛾種に對する收繭の多少と品物の良否と、學年の上下との三項に依り、優劣を查定せり、其審查長には郡上郡農事講習所長町田技師を煩はし、審査員は村農會より選出を乞へり審查の結果左表の如し

一等	二等	三等	四等	五等	出品數	蛾數	學校名
二	七	七	一一	二四	六七	七〇	奧明方尋常高等小學校
二	一〇	九	一二	三	四一	四八	奧住尋常小學校
一	一	二	四	九	三〇	四二	畑佐尋常小學校
一	一	一	二	三	一四	四二	寄水尋常小學校
一	〇	一	一	二	二〇	三八	小川尋常小學校

合計　兒童數四八〇人

右の內各等に於て一點つゝを町田技師の紹介により岐阜縣蠶系品評會參考品として出品せり。

尙明年は本年の實驗に鑑み、其方法を改良し兒童一人に付蠶種二蛾つゝを分與し、其收繭代金を三分し一部分は學校基本財產に充て一部分は品評會經費に充て尙一部分は兒童の個人貯金に與ふることゝせんとす、而して蠶兒の發生をも後れしめ夏期休暇に入りてより發生せしめ、休暇後に收繭する樣にし、尙休暇中と雖も學校職員をして出來得る限り、時期を見計らひ一二回は飼育狀況を視察して獎勵を與へ、且兒童休業日誌として飼育日誌を記載せしむる計畫なり(松野數代氏報)

▲實業婦人同志會　鹿兒島縣川邊郡知覽村水田四百七十一町畑反別五千三百六十九町歩にして、畑作の重なるものは陸稻、粟は、甘藷、菜種、大小豆等を產し、近年殊に煙草の獎勵甚しく曾て盛なりし蠶業も今は衰微の一方なるより光永直奥氏平素之を慨しつゝありしが、本年七月本會特別報告を見、且つは婦人部設置に關する吉池理事の書信に接し、大に感奮する處あり、村內有志と相諮り今回實業婦人會を組織し、蠶絲業の改善發達を圖ると云ふ

▲蠶業大辭書の完成　昨年八月其刊行を公にして以來、蠶業界の智囊を標榜して着々其行程を進めつゝありし蠶業大辭書は愈本月を以て其完成を告げ魁然たる大冊となりて世に出でたり依て之を見るに頁數全部を通じて約一千九百餘頁にして豫約の頁數を超ゆること實に六百餘頁の多きに上れり、而して此內に網羅せられたる一萬餘の語は懇切に能く解說して四種の索引により隨意索出し得られ全く從來の辭書と其趣きを異にするものあり、又卷頭の極彩色石版刷數葉は皆悉く寫生になりたるものにて、當業者の爲には好個の參考たるを覺ゆ、本書の刊行に就ては編者監修者は勿論書肆印刷所共言ふべからざる苦辛もありしならんも、兎に角更に一大發展を要する本邦蠶業界に向つて無事完成の擧を揚ぐるに至りしは大に祝すべきことなりとす、因に本書は頁數の大增加に依り其定價を拾五圓に引き上げたるも他の一般刊行物に比すれば其割合頗る低廉となる由なれども、來十二月二十五日迄は特價拾圓にて廣く其求に應ずといふ。

讀者文藝

植物異名

松林花翁

俳句にも作る草木異名のうち少々初學者の爲め左にあつむ尤「かはらよもぎ」を菣「かゝみくさ」を大根、「にはさくさ」を芭蕉といふか如きは支那音にして異名とは別物である、此支那音の方現今和名の如くに通用する物も多く且つ一物數名又は異物同名のものも枚擧に遑あらずである。

稲、とみくさ、とろみ、○虎杖、ふたばもみぢ、たちひ、○芋、露とりくさ、しろみ草、○發相、いはこけ、いはぐみ、○亭歴子、はまたかな、はませり、あしなつな、○鳶尾、こやすくさ、一八、○薑、鼠、ほそき、○無花果、仙桃、天仙果、○樹莓、きいちご、懸鉤子、○覆盆子、くさいちご、○鴨脚木、公孫樹、○蝮草、くもきりさう、羊角、○菖、とうしんぐさ、席草、○若蓮花、慎火、○莢、莉蘆、○石茸、石芝、○白蘞、てつぽうさう、みなしごくさ、くろくさ、あまな、やまみ、○蠟梅、からうめ、○鼠麹、みゝなくさ、○白茅、なのりそ、おもひくさ、○蓮、水のはな、つまなしくさ、池見草、露堪草、○荻、しかなく草、野守草、月見草、庭見草、初見草、吉枝草、濃染草、秋遲草、○芭蕉、にはさくさ、○薔薇、ゆきゝさは花、○蛇莓、みきくさ、○雁來紅、かきつか花、かまつかの花、○麥門冬、やますげ、○羊蹄、しろびし、はまびし、○地膚、まきくさ、にはくさ、○澤蘭、あかまくさ、○知母、やまところ、やまし、○貝母、はゝくり、おひ、○三白草、かつしろくさ、かたのくさ、ふたしろくさ、○半夏、かたほそ、ほそぐみ、○紫藤、ちゝのはくさ、○酸漿草、ひきよもぎ、○菥蓂、めど、○柏、やひらて、○朱槿、にはさくら、○莎草、しきみ、もほこ、○蒲莉、はまほひ、○紫荊、滿條紅、百日紅、○巴且杏、あめんとう、○木槿、むくげ、しのゝめくさ、舜花、朝花、○花橘盧、七姉妹、錦帶花、○白丁花、はくてうげ、滿天星、○刺楸、ぼうたら、海桐、○馬醉木、あせぼ、梫木、○櫨、はじ、黃櫨、鳥白木、たうはぜ、○羽薄、みつたばこ、○一葉、ひとつば、○雁扶、○田字草、蘋の花、水田草、○接骨木、みやつこ木、○衛茅、かはくまつゝ

ら、くそまゆみ、二〇人參、かのにげくさ、くまのい、〇楡、やにれ、〇郁李、にはさくら、玉蝶花、〇旱蓮、たうちや、〇忍冬、すひかつら、金銀花、〇胡蘿蔔、紅蘿蔔、〇韮、翠髮、懶人菜、〇蒜、おほひる、蒜、〇牡丹、山たちはな、名とりくさ、ふかみくさ、夜白草、夜白色草、となりくさ、はつかくさ、すへらきのはな、〇薔薇、かをち、あかかをち、〇木瓜、もけ、〇瑞仙花、つまくれない、金鳳花、〇鴨跖草、つゆくさ、翠胡蝶、〇馬尾藻、帥馬藻、眞珠菜、〇最天、いきくさ、蛇含、うつまめくさ、絲瓜、いとうり、〇紅花、すゑつむはな、紅藍花、〇虎掌、おほゝそみ、兎見尾、珍珠菜、〇附子、おう、〇杼、七葉樹、橡、栃、〇櫚栗、かしのみ、櫚子、無食子、〇樹、つか、栂、〇鳥冠草鳥頭、〇黄蜀葵、とろゝあほひ、さるごま、〇土計草、玉蓋花、〇蕺菜、じうやく、とうやく、蕺香、蕺菜、孟銀菜、〇野老、萆薢、〇玉蜀黍、香參、玉參、〇冬瓜、かもうり、〇大薊菜、こゝふと、一疊海藻、石花菜、〇松蘿、まつふぐり、まつかさ、〇茅、つばな、淺茅、茅草、〇丸蘭、かやみ、〇沈丁花、ぢんてふげ、瑞香花、〇長春、しきばら、月季花、〇賽蘭、金粟蘭、〇蔄茹、生菜、〇滴露子、草石蠶、甘露兒、〇龍膽、りんたう、えやみくさ、たつのはくさ、おもひくさ、にかな、〇楊、庸木、將軍木、〇欅、ぬるで、〇蓴、じゆんさい、纏紅、わくかせわ、〇芸、香、へんろうに、〇萱芋、につゝじ、みつゝじ、〇纈蘭、はみ、おにのやから、〇旋覆花、かまつほくさ、〇荻、秋知草、山下草、れながら草、間れ草、なとこくさ、れさめくさ、風待草、〇女郎花、おもひくさ、〇老丹、達珠、〇剪絨花、紫茉菜、〇剪切草、小連翹、〇車前、なんばこゝ、ほとけのざ、菜苜、甚、〇紫蘿、萬年青、〇天、雞頭蓮、〇芒花、荻花、〇大麥、葑、飯麥、〇於胡若、海髮、頭髮菜、〇蕨、山棚草、いはしろ、菜のちり、〇王孫、かたかこの花、つちばり、すはりくさ、〇木天蓼、またゝび、〇淡竹、鐵竹、〇萱草、萎草、〇山蒼菜、山葵、森菜、〇若布、ちさのり、稚海藻、石蓴、搾帶菜、〇楓冠木、かへるでのき、〇楓、なかつら、〇桂、めかつら、〇殼木、かぢ、かつの木、〇排草、くゝ、〇楼櫚草、つぼくさ、〇杜蘭、つふれくさ、ふたまがみ、〇白芷、よろひくさ、〇蓍草、あしゐ、かきな、〇巴戟、やまひゝらぎ、〇蔵梅、ゑみくさ、あまな、〇射干、ひあふぎ、〇寒菊、窗見草、秋無草、のこり草、初見草、霜見草、〇杜若、花の君、かほよはな、燕子花、紫胡蝶、〇草、さいたつま、草かやひめ、〇海棠れむるはな、睡妃、花貴妃、〇棉、凌霜侯、〇柑子、包橘、〇桂、肉桂の木、〇橿、いちい、櫧、樫、かたぎ、〇柏、樸樕、青紅樹、〇水楊、蒲柳、〇寒竹、紫竹、〇烏梅、剪春羅、〇雀麥、ちやひきくさ、燕麥、〇香附子、はますげ、〇骨蓬、河骨、〇萍蓬、土瓜、〇葛、つたかつら、〇芥子、辣菜、辛芳、〇夏蟲、かりき、小蟲、〇何首芋、けいも、土芋、〇香茸、茅蕈、〇蓬、かくもくさ、さしもくさ、させもくさ、さしまくさ、つくろひくさ、たはれくさ、艾、もくさ、蒿、飛蓬、やなぎよもぎ、〇蘆、あし、ひむろくさ、葉、〇蕗、ふきくさ、〇蕨菜、のぎく、鶏見麟、〇蒲公英、にこくさ、たな、ふぢな、〇竹、かくはしら、からはしく、かこはしく、小枝草、千色草、夕玉草、川玉草、手草、此君、吾友、めふくまくさ、ことえたりくさ、淩酒侯、戸香孫、抱節君、〇筍、たけさし、たかんな、からたま、すゞめのこ、筍筍、苧、寧、龍孫、錦珠子、〇蓖麻、からえ、からかしは、〇橘、香果、香草、庭苦樹、陸吉、鉄橋、〇橙、圓膏橙、〇多羅葉、沙羅樹、〇櫨木、とりとまらず、〇躑躅、桑花、美人蕉、蘆瓜、れたま、昨葉、〇大根、かゞみくさ、すゞしろ、萊菔、蘆蔔、芦肥、爽子、〇大黃、おほし、〇番南瓜、かぼちや、〇大青、はとくさ、くろくさ、〇當歸、うまぜり、やまぜり、おほせり、〇離鬲草、うまきたし、〇茶、ちやの木、目さましくさ、〇大豆、夜白草、〇連翹、いたちくさ、あはくさ、いたちはぜ、〇石蓮、いはぐみ、いはのかは、くみのかしば、〇秦艽、ばかりくさ、つかりくさ、〇蓮花草、げゞばな、地錦花、紫雲英、〇苦瓜、つるれいし、草荔枝、紅姑娘、〇靈芝、ひじりたけ、萬年茸、〇薺蘿、つちひとかた、そくつ、〇蘇銭、銭蒲、〇蠶豆、翻豆、〇土筆、筆つ花、筆頭菜、〇露草、つきくさ、おもひくさ、百夜草、はなだくさ、つみくさ、うつしの花、〇露隠、火とり草、草まき、〇椿、あなきなつな、山茶、〇柘、くしのき、柞木、〇槻、けやき、〇鬱金子、倒粘子、王孫、〇釣鐘草、沙參、〇蔦、地錦、垣衣、墙衣、〇掌蘭、佛掌蘭、〇葱、うつぼくさ、ねぎ、ひともし、水晶管、〇合歡木、かうかの木、ねむた、有情樹、夜合花、〇兎絲子、さがりこけ、〇水菲、れしろくさ、〇榧子、とこなつ、目くらしくさ、石竹、瞿麥、なつかしくさ、そでぬれくさ、よとさくさ、〇梨子、ありのみ、食消子、百果宗、玉乳、〇南天燭、南燭、南天竹、〇椰、竹柏、〇樒、梻、〇薺、はちくさ、薺蒾、〇茄子、なす、紫茄、〇蘭、あらゝぎ、水蘭、幽蘭、〇蔽、なほみら、蕃薇、薯子、〇蠅、むくれにしのき、まめふし、むくれし、つきのき、無患子、欅子、黒圓子、〇紫草、わかむらさき、〇野木瓜、假蒸

懸賞募集

狂句

金坊子選（第九回披露）

秀逸

出る嫁も當り蠶で縁つなぎ　長野　梅風
多く種掃いて繭なば少し採り　尾張　磯逸
蠶飼して放蕩息子改心し　同人
養蠶が上手て嫁に欲しがられ　静岡　萬作
新世帯なぜか玉繭多く出來　東京　掬月
國家の爲なぞも胡摩すりの蠶種屋云ひ　尾張　冷露
絲繰りが深い緣の絲となり　岐阜　風月
法螺吹きが審査の結果音が止まり　信濃　暁尾
迷桑を振れば蠶がかふり振り　愛知　藤の家
蠶外れ居にくいけれど居候　茨城　鬼外
先生が來てから出ると蠶云ひ　栃木　蠶人
我儕が蠶上手てつのる嫁　備後　天外
場は手て亭主は口て蠶飼ひ　同人
難緣の火の手當り蠶てパタと消え　山梨　一笑
外債の利子を蠶が引受ける　滋賀　奥田
留守使ふ蠶盛りに碁の御客　同人
大風呂敷廣げて蠶種屋を出し　長野　豊峰
遊蠶から散師降參退散し　同人
法螺種屋繭の影まで桝に入れ　同人

人賞

長濕に蠶の腹は丸干き　長野　塚田梅風

地賞

黒となり稼いだ德て白い繭　群馬　力丸壽三

天賞

家内喧嘩蠶種屋の法螺の穴から出　備後　福澤花童

選者吟

腕のある工女は繭を裸にし

◎

風穴と聞いて出歯龜耳をたて

懸賞募集

俚謠

高橋鬼川選（第九回披選）

燃ゆる思の情に煮られ解けて僞にある蠶　愛知　下川
秋の夜長の糸繰り仕事外は細より白い霜　同人
田には欲しいが蠶にや困る儒にならぬよ夏の雨　長野　龍峰
姿しや母御の笑顔を見れば製絲通ひも苦にやならぬ　三河　冷泉
愉や姿に絲とりよせて二人愛の窓に月　静岡　積祭
お絲客親よし絲とり上手皆んな絲さんいとしがる　尾張　冷露
日もよし月よし又首尾もよし蠶當りて仲もよし　三河　半丸
嫁は桔に結ば操に柏子合はせる仲のよさ　甲斐　不知戀
蠶飼には迷はず問ひ迷ふや問はれみ蠶に迷ふ　同人
想ひ輝く錦の蠶も繭が蠶の社に絲　同人
去年は老野孤の窟に今年や桑摘唄の聲　同人
末に此身はどうなるとても離れまいぞと二ツ繭　常陸　仙月
娘十六嫁入り仕度秋蠶當てたる北絲で　備後　花童
川と云ふ字ばりの字になりて蠶飼あしや主の留守　山形　陵月

ゆ紀なるさるな御主人様よ鶴て千屠家内無事
鶴銅ふ鶴に赤の果の事かふ思ふふで忘れずに
鶴の鶴にと鶴は飼へど貧に身の鶴め家の鶴め
鶴と鶴いかと見舞は夜遠に鶴たい人が居る
田舎銀の云ふと聞けば変しや鶴て身みたる
心こめたる鶴の山に咲てうれしい鶴の花
鶴に心を姿やゆ掛げだす蘇はとやせたる此身體

三重　仙走
岐阜　五山
近江　松甫
同人
信濃　如海
同人
愛知　鷹峯子
信濃　曉星
同人
長野　柴田
山梨　結慈

五彩

霧渡れと云ふたは嘘か　京都　小雲素華
可愛い娘が来だ肥えぬ

人賞

たとへ小節が出来よとまゝよ　滋賀　吉井松甫
好いて寄り添ふ二つ繭

地賞

天賞

愛知　村上下川

懸賞募集　一と口噺（第九回抜萃）

人賞

◎母と娘　東京　立澤武藏坊主

娘『お母さん、妾は獨り娘だから、幾人も姉妹があると思つて、何か澤山貰つて頂戴な

母『お前は獨り娘だから幾人振りも一人で働きなさい』

地賞

◎慈善調査　茨城　田中一笑

巡査『お前はそんな立派な體格をして何故貰つて歩くか』

乞食『ハイ、慈善の調査をしてゐますので』

天賞

◎親と子　山梨　長田泉澄

甲『私の子供は六歳になつて死んで惜しいことをした』

乙『未だ六歳位ならよいが、私は親を八十歳まで育てゝ死なれたよ』

懸賞募集　一と口噺（第九回抜萃）

人賞

◎母と娘　東京　立澤武藏坊主

娘『お母さん、妾は獨り娘だから、幾人も姉妹があると思つて、何か澤山貰つて頂戴な

母『お前は獨り娘だから幾人振りも一人で働きなさい』

地賞

◎慈善調査　茨城　田中一笑

巡査『お前はそんな立派な體格をして何故貰つて歩くか』

乞食『ハイ、慈善の調査をしてゐますので』

天賞

◎親と子　山梨　長田泉澄

甲『私の子供は六歳になつて死んで惜しいことをした』

乙『未だ六歳位ならよいが、私は親を八十歳まで育てゝ死なれたよ』

讀者文藝懸賞募集

俳句（原稿〆切毎月三十日頃来没書）

▲選者　花の本花翁宗匠

▲課題　盧間、石蕗の花、鴨、小春、冬の月、

▲懸賞　天（一人）文章一ヶ年分◎地（一人）文章半ヶ年分◎人（一人）文章三ヶ月分

▲規則　一題一句つゝ一人に付五句限り。用紙端書に限る。便宜上東京新宿北裏一二三の郵林花翁宛送らるべし。『懸幕』は会員外にも開放せず。郵便切手同記ぜら為べし。之れなき者は編入せず。

狂句（柳）（原稿〆切毎月三十日限り）

▲選者　高橋鬼川先生

▲課題　霧絲業に関係あるものならば何にてもよし

▲懸賞　天（一人）文章一ヶ年分◎地（一人）文章半ヶ年分◎人（一人）文章三ヶ月分

俚謡（都々逸）（原稿〆切毎月三十日限り）

▲選者　高橋鬼川先生

▲課題　霧絲業に関係するものにて女工などに唄はしめても遜支なきもの（但し卑猥なるものは投書と寸）

▲懸賞　天（一人）文章一ヶ年分◎地（一人）文章半ヶ年分◎人（一人）文章三ヶ月分

一と口噺（原稿〆切毎月三十日限り）

▲選者　高橋鬼川先生

▲課題　何にてもよし（但し卑猥なるものは投書とす）

▲懸賞　天（一人）文章一ヶ年分◎地（一人）文章半ヶ年分◎人（一人）文章三ヶ月分

注意

狂句（俳諧歌謡の者は用紙一枚に付き五句限り）へ一人に付三句限り）▲用紙は郵便はがきに限る▲懸幕若くは会員外と記し住地の郵郵町村名を無き分は編入せず▲本会々員若くは会員外にて送らるべし住所氏名無き分は編入せず▲大日本霧絲共同記入らるも懸賞せず

選者吟

懸の合圖か機織る窓を　鬼川
丁と打つたよ玉霰

懸賞募集　一と口噺（第九回抜萃）

秀逸

◎出歯亀　群馬　好霧

子供『お父さん、あの人は亀さんと云ふのですか』父『ナセ』子供『でも出歯ですから』

◎鬼の恐るるもの　岐阜　風月

甲『鬼の一番怖がるものは何だらう』乙『酒に酔つた人さ』甲『ナゼ』乙『俺が酔めるとシオキにするから』

◎共進会出品　三河　牛丸

見番『君さんは共進会など出すやうな織がとれますか』工女『ハイ、外国へ出す蘇なら一つつて居ります』

◎姉妹船　米國　藤崎生

第一兄さんがコヤ、ヒヤ、ヒヤと云ふ船に乗せるか、兄さんを』第二『でも姉妹船だと云ふから』

◎天狗　信濃　如海

子供『お爺さん天狗に何がなりますか』爺『大方義経が上手で鼻が高くなつたんだらう』

◎上戸と下戸　福島　一貫

上戸『酒の飲めない奴は共に踊ずるに忍らん』下戸『さうさ、あんな風邊水を飲んで悦こんで居る奴と同様では困るからな』

◎手紙の結尾　群馬　好霧

父『これ〳〵、兄さんの所へ手紙を出せ』子『ハイ、結尾に頓首と書くのですか』父『早々』

AVI.

—

1 Le bulletin de l'Association Séricicole du Japon est l'organe des membres de cette societé qui compte actuellement plus de 30.200 membres.

2 Cette Association a pour but de développer toutes les industries de la soie en publiant un rapport mensuel, dans lequel il sera mentionné tous les faits et études sur la soie émanant de savants et intéressés.

3°. Dans ce rapport sera inscrit dans les langues européénnes le mouvement mensuel de la Condition des soies de Yokohama, lequel sera distribué aux intéressés étrangers.

4°. L'Association recueillera et publiera les essais et études faits par les interessés étrangers en matière des soies.

La Direction de l'Association Séricicole du Japon.

NOTICE.

—

1) The report of the sericultural Association of Japan are intended to serve the interest of the members of the association, whose number is over 30.200

2) This association has for its objec the development of all silk industries by publishing a monthly report containing the facts and studies on silk by specialists and persons interested in silk.

3) In this report the monthly statement of the Yokohama Silk Conditioning House will be published in a European language for distribution among foreigners interested in silk.

The association will collect and publish articles and studies foreigner of topics concerning silk.

The Direction of the Sericultura Association of Japan.

蠶海涓滴

△明治四十二年度の豫算既に確定し其歳出總額五億七千五百餘圓なりといふ國民果して此負擔に堪ゆるや否や第二十五議會の新議員新面目に討議せよ。

△南方印度 カシム河氾濫して二萬餘の溺死者を生ず斯かる大洪水は史上稀有の大災害吾人轉同情の念に堪へず天帝若し有りとせば眞に是れ大の惡戯者。

△後藤遞相 電話度數制に依りて痛く世人の反對を招き昨今大に閉口の體若しく後藤さん財源の掘出も結構ちやが人民の迷惑チト御察しあれ左樣なら。

△波斯帝 僧侶輩の請願を容れて憲政廢止を認許せりと傳ふ各國競ふて憲政を布ける時に際し敢て之を廢止せんとは變的なり紛亂爲めに起らずんば至幸。

△十月の英國貿易額昨年の同期に比し輸出に於て約六千萬圓輸入に於て約五千萬圓を減じたりと傳へらる此の如きは英國の貿易史上特筆すべきの現象。

△書生の田園勞働は士族の商ひと同一徹醜寓の寄生蟲たる穢夫は慨れ物識りにして田園の成功者に比較的文字ある者尠しと井哲博士曰ふ味ひある微言。

△昨年の世界生絲產出額二千二百六萬其瓦一昨年に比し百十四萬七千其瓦の增加園て各地の產額孰れも增加し佛國獨之に反す同國の蠶絲業も愈末路か。

△長野縣聯合共進會に出品五十一點中蘭一等賞以下廿四點の賞與を得たるは新潟縣の大成社年々好個の實績を奏し今此名譽を受く眞に是結社の好模範。

△本會々員山口太三郎齋藤兵次郎佐藤量平池田常藏の四氏斯業盡瘁の功績著大なりとて勅定の綠綬褒章を賜ひ其善行を表彰せらる人間嘗斯くありたし。

△神奈川縣農會の斡旋に成れる解繭整理講習會は縣下七郡十二ヶ所に開き實習を修了せる者既に女子のみ四百餘名に達し其成績優良なりとは頗る結構。

△本年春夏秋蠶全部の標文昨年より三分六厘平年よりも一割三分九厘を增し收繭亦昨年より一分一厘を減じ平年よりも二割九分の增加とは其筋の調査。

△重要輸出品の一たる銅の價格海外市場に於て昇騰せりといふ生絲の輸出漸く增加せんとするの際此快報に接す我實業界に活氣を添ふ蓋疑なからん歟。

大日本蠶絲會報廣告料

回數	特等 一頁	特等 半頁	特等 四分ノ一頁	並等 一頁	並等 半頁	並等 四分ノ一頁
一回乃至二回（一回ニ付）	十五圓	八圓五十錢	五圓	十二圓	七圓	四圓
三回乃至六回（一回ニ付）	十二圓	七圓	四圓	十圓	六圓	三圓五十錢
七回以上（一回ニ付）	十圓	六圓	三圓五十錢	八圓	五圓	三圓
四分ノ一頁以下ハ一行ニ付金參十錢ヲ申受ク						

●會員ハ右料金ノ二割引トス●特等ハ四分ノ一頁未滿ハ謝絶ス●料金ハ前金ニアラサレハ掲載セス●一頁ハ一行二十七字詰七十二行トス

●本報定價 一冊金拾五錢 一ヶ年分前金壹圓七拾錢

明治四十一年十一月二十日印刷發行

編輯兼發行人 東京市神田區錦町三丁目十八番地 小池市松

印刷人 東京市神田區美土代町二丁目一番地 島連太郎

印刷所 東京市神田區美土代町二丁目一番地 三秀舍活版所

禁轉載

發行所 東京市神田區錦町三丁目十八番地 大日本蠶絲會 （電話本局一四七三番）

TABLEAU DU MOUVEMENT DES SOIES RÉPARTI PAR JOURS.

DIAGRAM SHOWING DAILY MOVEMENT OF RAW SILK.

Jours. Days.	Arrivée. Arrived.	Vendue. Sold.	Renvoyée Sent back.	Exportée. Exported.	Noms des filateurs. Names of filaturs.	Prix. Prices.
	Piculs.	Piculs.	Piculs.	Piculs.		Yen.
1	621	268	4	—	Hikomikyôdôsha.	970
2	592	438	6	2.639	Meisha	1,020
3	938	276	14	551	Kaisôshôgyôten.	950
4	—	—	—	892	—	—
5	1.071	404	30	—	Kôsôsha.	990
6	514	487	33	—	Yamamurasôshi.	935
7	732	690	47	652	Seikensha	950
8	567	524	95	—	Kojimakwan.	940
9	476	553	35	—	Kimi ôsha.	975
10	485	482	29	1.176	Tsûyamasôshi.	960
11	—	—	—	576	—	1,010
12	557	635	35	—	Kanrashabeikin.	930
13	939	475	20	548	Aichisôshi.	965
14	550	897	23	—	Yajimagumi.	985
15	703	513	30	—	Kanrasha.	980
16	517	699	7	—	Sendaisôshi.	950
17	—	—	—	—	—	—
18	1.608	—	—	—	—	—
19	—	457	10	—	Hongôkwan.	980
20	894	647	—	1.082	Shimouitasha.	980
21	520	506	27	—	Jônansha.	960
22	636	341	14	—	Kimposha.	1,000
23	—	515	20	1.073	Meisha	1,010
24	664	570	29	859	Rokumonsensôshi.	1,000
25	—	—	—	—	—	970
26	1.092	740	27	691	Kônansha.	970
27	667	490	25	—	Asahikwan.	1,015
28	778	581	30	1.219	Kimposha.	1,015
29	991	933	36	—	Tenryûkwasha.	1,040
30	750	498	—	—	Yajimagumi.	1,015
31	448	847	48	1.243	Nafusigumi.	—
Total	17.769	19.724	575	13.147		

1 pos vaut environ fr. 2.50. 1 Picul = 60 kilg. environ.

TABLE OF MOVEMENT OF SILK IN DIFFERENT INDUSTRIES.

(October 1908.)

TABLEAU DU MOUVEMENT DES SOIES RÉPARTI EN DIVERSES INDUSTRIES.

(October 1908.)

		Report. Brought over.	Arrivé. Arrived.	Vendu. Sold.	Exporté. Export.	Renvoyé. Sent back	A reporter. Brought forward.
		Picul.	Picul.	Picul.	Picul.	Picul.	Picul.
Filature.	Filature.	14.194	13.528	1.1703	—	476	15.510
Zugami.	Bercel.	3.135	3.300	1.793	—	130	4.411
Kakeda.	Orihayashi.	1.410	1.015	514	—	55	1.819
Autres.	Other.	37	97	28	—	17	88
Total.		1.8776	17.840	14.038	14.854	678	17.730
1906.		12.694	17.173	10.490	12.577	338	19.052

MARCHÉ DE YOKOHAMA

Voici la situation de notre marché au mois d'Octobre dernier. Pendant les dix premiers jours, le calme très dense a regné sur notre place, les prix ont baissé tantôt de 5 yen, tantôt de 10. Mais vers le 10 courant, on a constaté un certain raffermissement et une certaine tendance à la hausse. Ce n'était toutefois qu'un phénomène éphémère. Notre marché a présenté de nouveau l'état de l'accalmie vers le 16 ou le 17 ct. Mais les acheteurs européens qui, depuis l'arrivage de la nouvelle soie, ont ajourné leurs achats au dernier moment, ont commencé grandement leurs achats, plus de 5,000 balles leur faisant défaut comparativement à la correspondante période de l'année dernière. Les maisons américaines ont aussi commencé leurs achats, de sorte que le marché a présenté subitement une grande activité pendant les dix derniers jours. Plus de 11,000 balles ont été enregistrées du 20 à la fin du mois. Aussi les prix ont-ils augmenté; Extra No 1 qui s'était vendu à yen 925, a accusé, à la fin du mois, le prix de 935 yen, phénomène qu'on ne peut voir que très rarement.

Les tableaux suivants indiquent d'ailleurs le monvement de la soie durant la même période.

THE YOKOHAMA RAWSILK MARKET.

The general condition of the Yokohama rawsilk market is summarised as follows:—

During the first ten days, the general tendency of the market was anything but bright, the price making a gradual decline by 5 or 10 yen. Coming to the middle of the month, however, the market somewhat improved, as the result of which the price began to recover its normal state. But this satisfactory tendency was only momentary; and on the 16th or 17th, the market again fell into a temporary stagnancy. Owing to the strict reserve on the part of the European merchants since the appearance of the new crop, the transations conducted till then showed a discrepancy, in the amount of sales, of about 5,000 bales as compared with the corresponding period of last year. But these merchants, taking advantage of the circumstance, began to assume buying activity. The American merchants also followed suit of their European confrères. So that in the last ten days a remarkable briskness reigned on the market. From the 20th till the close of the month, over 11,000 bales are returned to have really changed hand. In consequence, the quotation made a decided advance; extra No. 1, which was at first quoted at Y. 920, got to Y. 935. Such a price is indeed quite phenomenal since some years back.

The following tables show the movements of the silks during the period.